

324
566



始



30. 9. 26

324-566

南洋

南洋	南洋	南洋
協會	協會	協會
會	教	會

瀨川龜著

大正
7.5.16
内交

若川顯正

生家神

一



「回教」序

余が回教と回民に關し一種の親しみを覺へたるは其端を支那研究に發し既に廿餘年前の事で、當時支那に遊び退くは陝甘、滿蒙、雲貴、新疆の域邇くは閩粵、江浙の境到る處回教を奉ずるの民少なからざるを知り又支那史を繙きて捻匪、回匪等の由來を探り、北清事變の立物たりし端郡王、董福祥の回教徒たるを聞くに及んで支那の統治上回民を打算外に措くべきに非ざるを察し一層の興味を惹くに至つた、後憂を東方の時局に抱きて歐洲に學ぶや、東邦問題と干滿の關係ある中央亞細亞問題、波斯問題並に巴爾幹問題を研究せん爲め滯在三箇年の間機に觸れて中央亞細亞、波斯、高加索、露西亞、小亞細亞、土耳其並に巴爾幹列邦を視察して回民に接し其生活を味ひ其思想に觸れ、回教國の史乘を閲して其興亡の因果を究め回教の美術、文藝、建築等に依りて其文化の盛衰を推し回教に對する趣味漸く深く、最近明治四十三四年の旅には土耳其を中心とするボスニヤ、ヘルセゴヴィナ、モンテネグロ、塞爾維、勃牙利よりバルバリー諸國即ち北亞の埃及、チユニス、アルゼリー、摩呂哥、左てはサワラの大漠、蘇丹の蕃地、印度、南洋諸島等所謂回教國を普ねく巡歴し又ビレニー山南西、葡兩國の如き曾て回民の脚下に蹂躪せられし地方をも蹈破

2
して回教に對する趣味益々濃く、特に此旅行より歸來間もなく事を南洋に興し躬ら回教國の人となり多數の回民と交渉あるに到り、趣味の科目は進んで必要の科目となつた、然れ共系統的に之を研究し其教理を味ふには未だ其時を得ない、偶々著者を獲て之に當らんことを慫慂せしに、著者見を余と同ふし回居時代夙に余の書架より回教に關する書籍を抽いて耽讀し、南方に客たるの後も廣く回民と交り深く回教を研究すること既に四ヶ年、机上の備忘積んで一千有餘頁の大冊を成せるが其要を摘録して先づ本書を著し之が公刊を余に託した、乃ち南洋協會當局の議に附し出版のこととしたのである。

惟ふに教祖マホメットが劍を右手にしコーランを左手にして亞刺比亞に崛起してより千三百年、耶、佛兩大教と鼎立の形を爲し歐、亞、阿三大陸に跨りて三億萬の信徒を擁し教勢毫も衰へず、他兩大教より回教に改宗するものは却つて一倍熱烈の信仰を把持するに似たり、此理由果して何れに在るや、再思三思すべきである。

最近百年間歐洲の禍源として謠はるゝ巴爾幹問題は言ふ迄もなく回教徒と耶教徒との争にして久しく歐亞の間に蟠屈して雄を稱せし阿土曼帝國も十九世紀以來大勢振はず且に一城を抜かれ夕に一砦を奪はれ今や新月の旗影薄く歐土より消滅せんとして居る、青年土耳其黨此頽勢を既倒に挽

3
回せんとしコーランの近世化を絶叫しアブヅル、ハミッドを廢してミドハットの定めし憲法を復活し、新サルタン、マームード五世は宗務總監たるセイク、ウル、イスラムに勅語を下しセイク、ウル、イスラムはコーラン聖典の手に於てサルタンが憲法を布くを宣したる旨誓言した、即ち憲法を復活するもハミッドを廢するも將た革命の旗を翻すも皆なコーランの命する所に従ひ之を決行すと稱す、而かも守舊の徒は一にもコーラン二にもコーランなり、青年黨を迫害し新政を顛覆せんと企てたるもコーラン聖典に依りセリアートの命に従ふと云ふ、斯くて新も之を用ゐ、舊も之を用ゆるも國民の大多數は憲政に無關係にして苟もすれば舊に泥み新を排せんとす青年黨苦心の存する所、彼の康有爲が曾て黃、顧の餘流を汲み別に一家の言を立て孔子改制考、新學僞經考等の書を著はし中土の政治、法律の西歐の自由民權と必ずしも支梧せざるを唱へたと同調である、土の青年黨もコーランは宗教の如何を問はず人民一般に同權を與ふるを許すと云ひ、カリフにして獨夫たらばセリアートの命する所に依り之を廢するも可なりと云ひ以てコーランの近世化を主張した、コーランの近世的解釋は必ずしも難事ならざるべきも最難なるは近世化のコーランを大多數のマホメダンに信せしむるの點にある、土耳其のクロンウエルと呼ばれしシエフケツトも爲めに之に斃れ、土耳其のナポレオンの稱あるエンベルも滔々の勢を如何ともする能はず、

4
竟にカイゼルの犬牙となつて共に碎けんとして居る。最近の飛報にはサルタンもエンベルも共に刺客の兇刃に斃れたとある。

回教の本尊たる土耳其帝の勢威全く縮まり波斯も亦振はず埃及、トリポリ、チュニス、アルゼリヤ、摩呂哥の諸邦或は英、或は伊、或は佛に分屬して其割を受け阿富汗は祕密の國として堅く封鎖せらるゝも要は英の一附庸に過ぎず、ハイダラバット以下印度大小の諸汗國も英の願使に従ひ古帖木兒子孫の國、中央亞細亞の域も露の脚下に伏し、大塊の上、數多回教の國、一として嚴然たる獨立の體面を維持するもの之れなきよりして見れば今日の回教民と回教國は最も意氣地なきの感あるも、下れるは上るの階梯なり衰へたるも盛の日なきを必し難し、逆境の回教が其信者を新なる方面に開拓しつゝあるは人世の奇蹟である、余曾て伯林に在るの日、獨逸殖民會議に列して對外布教に關する講演會に臨み、阿非利加に於ける傳道は回教村落を避くるの方針を執るべし、回教村落に布教するも何等の効果なく却つて不測の災害ありと云ふを聞けり、又サラエホに滞在中ボスニヤ、ヘルセゴウキナ兩州議會の議長バンヤキツチは回教徒（議長一名、副議長二名をオーソドックス派、回教派、加特力派より各一名宛皇帝より勅選せらるゝの制度也）にして夙に維也納大學法科を卒業せる秀才なりしが、余を延て快談し同派議員キヤミルと共に余に向つ

5
て曰く、本日愉快なる新聞を得たり貴國東京には我回教徒に依りアラブ語と英語とにて發刊せらるゝイスラムの機關雜誌ありと云ふは眞乎と、余は是れ恐らく埃及人フアドリーなる者の發刊する所ならん、フアドリーとは兩三回會合せしことありと答へたるに大に喜色あり、回教徒は三大洲に擴布せられ其數三萬萬漸次興起の兆候あり貴國之が牛耳を執るべしと傲語して居つた、同種の質問は其後君士坦丁堡に於てもアラビヤの選出議員ベハ、ベイなる者より受けた、彼等が東方民族の盟主として我を目し我を仰がんとするの狀況以て推すべきに非ずや、カイゼルは北海より波斯灣なる年來の雄圖を伸ぶるにはイルデス宮廷を懐柔し土耳其帝國を抱擁せざるべからざるを悟り、極力之が施設を怠らず、今次の大戦にも道伴となすを得た、ボスニヤ地方の回教徒はスラブ族にして元耶教徒たりしが土耳其施政四百年の間に改宗して回教徒となりしものにして其頑強なる信仰は本國の土耳其人以上なりとのことである。南洋諸島は元印度教や佛教の瀾漫せし地方なるに一旦回教を強制せらるゝや、爾來幾百年曾て其信仰を改めず全然回教民となり、耶教三百年の努力は僅かにアンボン掌大の島民を化しミナハサ無宗教の蠻族を歸依せしめたるに過ぎぬ。更らに地中海の南岸に國するものを見る、東、埃及に起りトリポリ、チュニス、アルゼリー、摩呂哥あり、此等地方は三千年前世界文明の淵藪にして羅馬加特力の發生地たるは史家シャツプ

の吾人に語る所、バイブルの拉丁譯は實に北亞之が先鞭を著けたのである、宗教史に紀元二百五十二年カルセージの宗教會議に列せし僧正の數八十七名、長老亦之と相如けりとあり以て當時耶蘇教の如何に此邊一帶に瀰漫せしかを想ふべし、然るに第七世紀の初にマホメツドの飛將シデ、オクバが疾風の如くに北亞を席捲し瞬時にして之を回教化し去り其後進ムサ、タリツクの徒が八世紀の初に海を起へてビレニー山南の地を掩有し餘威佛國に及べり、現に埃及は英の占領に歸せしも其住民の大多數は熱心なる回教徒にして他は佛、伊の領土となれるも住民の信仰は依然たるのである、サワラ漠南の土民間に回教の益々擴布し往く、支那、印度に於ける回教徒の數多き、一旦斯教に入りしものは頑強移らず他宗より轉化せしもの程其熱烈の度高きは寧ろ不思議と云ふの外ない。

若し夫れ中央亞細亞に遊びサマルカンドに帖木兒の古帝都を弔しブハラのカラバンセライに帖木兒の子孫と回教生活を飽喫し、西班牙、葡萄牙にムール文明の跡たるアルハンブラ宮殿の壯麗を仰ぎ、君府エーチャ、ソフキヤ大禮拜堂に入りては眉雪の老僧よりイマラムの優勝を示せる遺跡を聴取し、又遙かの此方より雲表に聳ゆる新月の尖塔を見れば東羅馬帝國以來の歴史を想起せざるはなからん、此建物はチャスチニアンJustinianの創めし所、千四百五十三年四月六日にマホメツド二世は

二十萬の壯丁を引率しアドリヤノーブルより進軍此都を包圍したるに、當時の希臘皇帝コンスタンチン十一世は五千の希臘人と三千の以太利援兵を提げ之に抗する五旬遂に衆寡敵せずして戦死するや其首をソフキヤ寺院前のチャスチニアン記念柱上に懸けマホメダンの勝兵全市を掠奪する三日、捕虜六萬、就中最大悲劇はソフキヤ寺院内の虐殺であつた、斯くて尖塔の上に在りし十字架は撤せられて新月之に代り爾來四百六十餘年、マホメダン三萬の中央禮拜堂として嚴存して居る、ソフキヤ寺院の回民の手に歸せしより耶蘇教國の之を奪還せんと欲せしもの夫れ幾何ぞ、ツアールの國は固より獨逸も希臘も他の國々も一念茲に存すること疑を容れず、げにソフキヤの尖塔に再び十字架を掲げ歐、亞兩洲の形勝に依り四方に號令せんこと總ての國の英雄の欲する所、サラエボの一撃に世界の大亂を捲起せし現代の列強は安んぞソフキヤ寺院の爭奪に異日の風雲を醸成せざるを知らんやである、余再び君府に遊び舟をボスホラス海峡に浮べて一抹の暮烟兩大陸を包む雄大の光景を望み不幸にして日東の小帝國に生れ大に驥足を伸ばす能はざるを想ひ感慨禁せず一句を吟じた

亞水歐山眼底收 不知雄心何時酬

悠然凭欄回頭處 一抹暮烟包兩洲

這般の襟懷誰人が能く領得する。

波斯の首都テヘランの殿宇も讚歎に値し印度のデリーやアグラに於けるモゴール大帝王の創めし大木工就中タヂマハルに至つては世界の行客をして駭目驚心せしものがある。

翻て文學、教育に見る、土耳其や、中亞の舊式なるメドレッツセは多くコーラン一點張りにして埃及カイロ府のアヅハル大學は最大最古のもので一千年前の創設に係り獨り埃及一國のみならず回教社會に於ける最大の學府とせられ現に學生の數一萬二千、教師四百人、案内の僧に伴はれ廣き方形の内庭を過ぎ堂内に入るに多數學生のコーランを默誦するあり或は祈禱するあり、世界各地より學生を吸収しシリヤ人五百、摩呂哥及其他佛領北亞人三百、土耳其人、二百五十、ヌビヤ及蘇丹人二百にして波斯のクルド人三十、印度人六、アフガン人五、瓜哇人三十あり、此等は別に一廓を爲して起臥す、中にはサワラの黒奴もあり、入學手續は極めて開放主義にして回教徒ならば何國人たるを問はず讀且つ書くを得るを限度とし十五日間の試験の後之が入學を許可し毎日食を給し校内に寄宿を欲する者は收容し得る限り之を許す、尤も埃及人は一年間試験の後食費を給するを通則とし寄宿以外の學生は大抵附近の民家やメドレッツセに泊して通學す、外國より入學せしものは先づアラビヤ文法を學ばしめ略々アラビヤ文學に通じたる後マホメッドの教義を授け然

る後宗教法律に入るを順序とす、教授法は極めて舊式にして暗誦を専らとし毫も思想を鍛練せず、近來此弊を矯めん爲め新教育法を施さんとの議あるも未だ實施に至らざるが如し、然し十年前新に開校せられし埃及大學は政府宗教省の補助に成り文科を主とし經濟科と女子部とあり、其科目よりせば大學と名づくるは當らず正しく高等學校程度なるも學生男女四百名、埃及人の外に英、佛、以、希、獨各國あり向學の新氣運は都鄙に勃興し就學者激増せり、是れやがて埃及人を以て國家的精神と勃興せしむる所以にして同國に於ける國民黨の勢力は比年著しく増大し英國の統治をして甚だ困難ならしめたる形跡がある、國民黨の故首領ムスタファ、カメルは我吉田松蔭を彷彿せしむる熱烈なる人格者たりしこと彼の遺著や遺業に依り想像せしむ、現首領フェリド、ベイ以下皆な其亞流なり、開戦前キツチネル元帥を起して埃及大守たらしめたるを以て英國用意の存する所を知るに足る、又サラエボのセリアート、レヒテ、シユウレ即ち回教法律學校を參觀せしことあり、回教法律を主として一般の法律、地理、歴史、算數をも修業せしむるものにして設立以來既に三十餘年多數有力の回民を出せりと云ふ、奥匈國が土人教養の一端たり、大體各國とも回民を治むるには餘程の手心を用ひ其宗教其習慣を尊重し之に壓迫を加へて反抗心を激成するの愚を爲さず、ボヘニ州の如きは回教宗務行政の自治を特許し宗務本部は回教法律を以て州内

回民に蒞み、冠婚其他の社會的事件を主宰し、學校を設け、回教法の命する制裁を行ふを得、正しく私立政府の觀を爲せり、斯くて費用を回民より徵收する權を公認せられ宗務本部の財産は動産、不動産を合せて約一千萬「クローネ」を有し、一ヶ年の收支豫算七八十萬「クローネ」に上ると云ふ、以て埃匈國政治家の苦心を見るべしである。

斯く親しく回教の國に赴き回教の民に接し今古を俯仰するに興味の津々たるものがある、況んや回教の根據地たる亞細亞に位し亞細亞興隆の使命あり興望ある我邦としては回教と回民の何物たるかを知り國際道德を尊重して其蒙を啓き其の不正を匡し之に同情し之を扶掖して人類共存の誼を全うするに力めねばならぬ、

此著は僅かに回教の一斑を簡單に説明せしに止まり世人の視聽を回教研究に向けしむるの一助たれば恐らく其志を達したりと謂ふべく、今後著者不斷の研究努力は世人耳目の肥ゆるに従つて更に發表せらるべきを囑望し且つ期待する、聊か余と著者と回教との因縁を述べて卷首に題する次第である。

大正六年仲秋東都郊外目白臺畔に於て

井上雅二識

自序

本書は余が中學の先輩にして志業の師たる梧堂井上雅二先生の徳と鞭撻と助力とに倚つて成れるものである。先づ記して以て深厚に敬意を表し恭しく感謝する次第である。

三歳未だ治まらざる世界的大戦亂の吾人に與へたる教訓は、貴くして重なるもの多々有之、就中、吾人をして吾人が知らざるべからざるもの、爲さざるべからざることの未だ多く遺されあることを覺悟せしめたることは、その最も貴きものであると感せられる。回教を知ること亦這箇吾人が知らざるべからざるもの、多きが中の一つではなからうか。蓋し、隆々として日に旺んる我が國威の揚る所、世界二億の回教徒を扶け導かんことは、聖き使命と高き理想とを有つ吾人日本民族が聖命の一つであらねばならない。敢て道の遙かなるを云はず、現に今日吾人は南して南洋の地に彼等と交渉しつゝあり、北しては滿蒙の地に亦た彼等と相見えんとしてゐる。これ近き過去に於てさへ未だ覺悟せられざりし吾人が聖命の漸く顯示せられたものであるに相違ない。而かも翻つて今日吾人が何程か彼等回教徒を理解してゐるかを思ふ時、自ら彼等の宗教―回教を知るべき必要を感じるのである。蓋し回教は嚴格なる儀律教の一つであつて實に教徒日常の

一舉手一投足の些事をさへその教義を以て律してゐるが故である。これ余が菲才淺學なるを承知しつゝも敢て本書を公にする所以である。

余は業務の餘暇ながら常に回教に關する書物を繙き、又、幸にして身の南洋回教流布の地に在る、實地にその一斑を窺ふことを待つ、閑を利し筆を執つて、書物に得、實地に見聞したる回教に關する智識を録して紙一千三百を超えた。但し之は單に余自らの備忘に裨したもので、世に公にすべく用意したものではなかつた。が、今回南洋協會の囑托を受けて愈々本書を成すに當つては當然、稿を改めねばならぬことであり、且つ刊行上種々の事情もあり三百餘枚のものに摘抄したのである。稿成り反讀して甚だ取材の宜を失し態裁の統一を缺けるに忸怩たるものであるが完全を後日に期し、且つ又、他日その教義を哲學的將た宗教學的に、回教儀律 (Mahomedan law) を實際的に詳述すべき機會と必要との來らんことを望みつゝ敢て梓に附して公刊することにしたのである。

本書が用ゐたる固有名詞は普通に西歐の書に用ゐる慣らされたるものを取つたので、アラビヤ原詞には據らなかつた。殊更にアラビヤの源を擲んでモーゼをムーサ (Musa) エス、キリストをイサ、アル、マシー (Isa e Musik) エヂプトをミサル (Misal) 杯と呼ぶことは徒に煩はしきことと思

ふたからである。又、括弧内へ挿入したアラビヤ語のローマ字改綴も余が任意に改綴したもので西歐の書のそれとは大分違ふ點があることに相違ない。こはその發音を日本式ローマ字綴のそれに準じたいと思ふたからである。

別に記したる諸書は余に回教に關する智識を授けたる師にして此の機を以て敬意を表す。

本書原稿の整理に關して友人高田成義、端良純兩君の友誼なる助力を多とし此の機に於て篤く感謝する。

大正六年九月十一日

シンガポール、ウォーターロー街に於て

南洋協會囑托 瀬 川 龜

PREFACE.

- ✓ Mahomet and Islam; — Sir, W. Muir.
- Religion of Islam; — F. A. Klein.
- ✓ Religion of the Koran; — A. N. Wallaston.
- ✓ The Spirit of Islam; — Ameer Ali.
- ✓ The Selections from the Koran; — Lane Poole.
- ✓ A Comprehensive Commentary on the Quran; — M. Wherry.
- The Koran (Eng. trans.); — G. Sale.
- ✓ Aspects of Islam; — D. B. Macdonald.
- ✓ Mahomedan Law; — Ameer Ali.
- ✓ Rise and Progress of Mohametanism; — H. Stuble.
- History of Muhammedanism; — Mill.
- Mohamed and the Rise of Islam; — D. S. Margoliouth.
- A Short History of the Saracens; — Ameer Ali.
- History and Conquest of the Saracen; — E. A. Freeman.
- Spanish Islam; — R. Dozy & F. G. Stokes.
- History of the Spanish Moors; — H. Conde.
- The Moors in Spain; — Lane Poole.
- ✓ Rise of the Mohamedan Power in India to 1612 A. D.; — John Briggs.
- Our Indian Musalmans; — K. Hanter.
- Mohammed (Encyclopaedia Britannica); — Wellhausen.
- A critical Examination of the Life of Mahammed; — Ameer Ali.
- Mohammed and his successors; — W. Irving.
- Islam as a Political System; — Urquhart.
- The Mystics of Islam; — R. A. Nicholson.
- A Western Awakening to Islam; — Lord Headley.
- England and Moslem World; — H. R. Majid.

回教目次

開教篇

第一章 アラビヤ

— 地理— 歴史— ハム系アラビヤ人の興亡— セム系アラビヤ人の來住— 言語— 民族性— 社會文化— 宗教— サビ教— 偶像崇拜— 外來諸教—

第二章 マホメツド

— 象の歳— マホメツド生る— コレイシニ家— 不幸の孤兒— 富寡婦の入婿— 風貌— 天神の豫言者— 最初の信徒— メツカ宣教— コレイシニ家の迫害— アカバの誓約— ヤスレア遺走— 回教曆—

第三章 ヘジラ以後

— 經卷を劔ミ— メザナ— バズルの聖戰— オードの聖戰— メツカ軍の來襲— メツカ巡禮— 境外派使— エダヤ族の誅滅— ムタの聖戰— メツカ占領— 神聖外套の由來— アラフワット山上の訓諭— 最期—

教義篇

第四章 イスラム

目次

PREFACE.

Are Reforms possible in Mohammedan State?; — Chiragh Ali
Essays on Islam; — Sell.
Pilgrimage to El-Medinah and Meccah; — Sir R. F. Burton
Tales of Caliphs; — C. Field.
Saints of Islam; — H. R. Sayam.
Literary and History of Arabs; — R. A. Nicholson.
Arabian Wisdom; — J. Grrigor.

Das Wesen des Islam; — M. A. Schmitz.
Geschichte der Herrschenden Iden des Islam; A. Kremer.
Die Varlesungen uber den Islam; — I. Goldziher.
Caltur geschichte des Orients unter den Chalifen; — A. Kremer.

A Dictionary of Islam; — T. P. Hughes.
The Encyclopaedia of Islam, vol. I.

—イスラーム—經典—コーラン—コーランの由來—コーラン編纂小史—コーランの熊裁—神祕の文字—

第五章

アラ—

一〇一

—宗教の進化—ヤーベの信仰—アラ—天使—惡魔—ゲニ—豫言者—經典—宇宙世界觀—生命觀—最終日の審判—地獄及び極樂—宿命觀—

第六章

修行

—五箇信條—祈禱—清淨—割禮—齋食—回教本山—巡禮—喜捨—

第七章

儀律

—民事儀律—一夫多妻—マホメツドの問房—婚姻—離婚—相續—奴隸—對人—契約—治罪儀律—

—賣姪—姦通—竊盜—殺人—傷害—宗教義務—聖戰—禁誡—飲食に關するもの—其他に關するもの—回教徒の異教觀—

教團篇

一八七

第八章

教史

一八七

—教皇四代—シリヤ征服—ヘルシヤ征服—エジプト征服—オムミヤ朝の篡奪—カリフ—回教國々家組織—ケルベラの聖戰—十日祭—阿弗利加北岸地方の廣布—スベイン侵略—中央亞細亞の流布—支那布教—インド侵入—アツパス朝—オムミヤ朝のコードバ移遷—フワチマ朝—サラセ

第九章

教派

二二七

—ンの文明—トルコ族の活動—インド流布—セルジュク—蒙古諸汗國—オスマントルコ—セリム一世の教皇自立—教皇の寶器—東部阿弗利加の布教—南洋廣布—

第十章

教勢

二五一

—教祖豫言の七十三派—分離派—異教派—他方派—自力派—過激派—因循派—シヤ派—スンニ派—スンニ派の四派—回教記標—

—右教運動—女子回教教育—教徒數—回教諸國—回教徒の現状—回教新興運動—汎回教主義—餘論—

回教挿圖目次

寫真

コーラン

回教寺院の内部 (コンスタンチノーブル、**「スライマン寺」**)

十日祭古畫 (インド古畫)

地圖

目次

古代アラビア略圖



目次

- 4 古代アラビア路圖
- メツカ回教本山「神聖寺」平面圖
- 回教之南洋廣布略圖
- 回教廣布略圖

回教

開教篇

第一章 アラビヤ

—地理—歴史—ハム系アラビヤ人の興亡—セム系アラビヤ人の來住—言語—民族性—社會文化—宗教—サビ教—偶像崇拜—外來諸教—



一體、アラビヤと云ふ地方は我國と餘程縁遠い地方で、従つて吾等の有つアラビヤに關する智識は貧弱なるを遁れなかつた。アラビヤとし聞けば、アジアとアフリカとの間にある荒涼たる大砂漠の一大半島を想ひ出し、峻逸なるアラビヤ名馬と凄麗なるアラビヤナイト物語とを聯想する位いの概念しか有つてゐなかつたのであるが、今日我等は今少しく否、更に多くアラビヤに就て知らねばならない。我等は北に發展して滿蒙の地に回教徒と接觸し、南に伸びて亦、南洋諸地方に回教徒と交渉する様になつた。我等は彼等の宗教、回教を理解してやる必要上先づ回教の本

アラビヤ

地として又、アラビヤを知らねばならないのである。

アラビヤはアラビヤ人自身がアラビヤ半島 (Jazīrat-al-Arab) と呼ぶが如く、アジアの西端シリアの地方から東南に突出した略ぼ矩形をなす一大半島であつて、東南西の三面はペルシヤ灣、インド洋及紅海の水に限られ、東北及び北方はイラ砂漠及びシリヤ砂漠を境として、地勢は北部及び中部に高く、南するに従つて低くなつてゐる。山脈はシリヤ砂漠の西端に起つて直ちに紅海の沿岸を南に馳せ、其の南端に東折してインド洋に沿ひペルシヤ灣に達して居り、全半島は其の地勢上、古來三地方に分れてゐる。即ち中部高臺地方と紅海斜面地方と南部地方とであつて、中部高臺地方はネジズ (Najd) 高地の謂と稱され全半島の約三分の一を占めてゐるが北はシリヤ砂漠に連なり東北はイラ砂漠 (Barīyat-ul-Irak) を以てメソポタミヤの文化の地と遮断せられ、河流は砂丘の谿に發するものがあつても直ちに砂の平原に消へて瘠土、徒らに連らなる無人の境である。只僅かに其の南部地方ナジャ (Najā) アルズ (Arūd) の地は稍々人の居住するに足り、古くヤマナ (Yamāna) と呼ばれる都市が發達したが概して此地方はアラビヤ文明に貢獻する所は尠なかつた。紅海沿岸の地ヘザツ (Hijāz) も亦突秃たる岩山と砂原礫丘の連なつた瘠地ではあるが別名ゴール (Gaur) 低地の謂の示すが如く低地であつたからネジズ地方に比して人の居住するに足り、

多少見るに足るべき農産物もあり、古來メッカ (Mecca) ヤスレブ (Yathreb) シツダ (Jidda) タヒヤ (Tahya) 等の諸都市が起り南部地方と相對してアラビヤ文明の美を濟し上げた地方である。(アラビヤの地理學者の區分する所に依ればシツダを中心として南に長く紅海沿岸を帶の如く伸びた地方を別にテハマ (Tahma) と呼び一獨立區劃をなさせてゐるが一般にテハマはヘザツの一地方とされてゐる。次に南部、印度洋に面する地方は古來ヤマン (Yaman) と呼び西歐人はエーメン (Yemen) と呼んでゐる。蓋しヤマンはアラビヤ語「右」の謂で日出づる方即ち東に向いて右方は即ち南であるから此の地方がアラビヤの中心メッカの南方に當る所より恣く名付られたものらしい。此地方は地積に於て全半島の大半を占め其の東部にダーマ砂漠 (Dahma) 東北部にナフド砂漠等多少の不毛地はあるが北方ネジズ地方と界する一連の山脈は能く印度洋より來る水蒸氣を遮断して多量に雨を降らし、従つて土地は肥え氣候も亦概して溫和であり、且つ此地の住民は古く航海の技に長じ、ヘザツの住民が主に駱駝に依つて陸上貿易をシリヤ、バビロンの地に行ふたに對して、彼等は海路直ちにペルシヤにインドに紅海沿岸地方に將たアフリカの東海岸に貿易して財寶を蓄積し、都市は諸方に開けてネジラン (Nejran) アシル (Asir) ハドラモート (Hadramaut) マーラ (Mahra) マーサ (Masa) オーマン (Oman) 等の諸地方も亦獨立的に發達した。主都サナー (Sanaa) の

4
如き今日尙ほ世界最古の都市の一つとしてアデンの北方に嚴存し歡樂府 (Hish-al-Mawahib) と呼ばれて有名であり、此地古來の産物として乳香と珈琲とは、其の品質の點に於て依然世界第一位に居る。

ヤマンの地は實に斯くの如くであつたので、古來アラビヤ半島に移遷した幾多諸民族の一度は必ず居を定め羈を競ふた處となり、彼のアレキサンダー王の如きも此地の厚腹なると民の富裕なるに食指動いて、其のインド遠征の歸途、必ずや軍を此地に進めて其の帝座を築かんと欲した位であつた。然し此事は幸か不幸か彼れの病死に由つて成し遂げられなかつた。斯の如くにしてヤマンは實にアラビヤ半島の中原であり、マホメツドのアラビヤ統一迄、アラビヤの權力は常に此處にあつた。従つてマホメツド以前のアラビヤ史は此地を舞臺として延べられたのである。

古來、アラビヤ十七萬方里の地は常に世界の中心には遠去かつて居つたが、其間幾多民族の興亡隆替があつた。第一に此地に移住した種族は、ハム民族のアヅ族であり、亞いでタムード、タスム、ヤデス、アメレ、前ヨルハム等のハム民族の數種族であつたらうと云ふことになつてゐる。

アヅ族 (Banu Ad) はノアの玄孫アヅの苗裔で、彼等はメソポタミヤの地より先づ中部アラビヤ

5
に移住し、次いでヤマンのハドラモートのアーカフ (Ahka) 地方に着跟して其地に蕃殖し、更に東してオーマン、イラ地方に伸び其の族長シェダード (Shedad) は更にペルシャを侵し、インド國境に迄進んだと云はれてゐる。シェダード王は其の名は回教經典コーランに迄記されてゐる位いで、父アヅの志業を繼いで大いに威を四隣に振ふたらしく、彼れの人民からは殆んど神以上の人格として崇敬され、其の宮殿の如きは壯麗極まりなく、彼れの曾祖父イレムの名に因んでイレム宮殿と稱し、アラビヤ人の云ふ所を聞くと此宮殿は今日尙ほ神意に依つてアデン砂漠の中に保存され、平常は人其所在を知ることが出来ないが若し神が聖明なるを示さんが爲め、是れを見る事を人に允した場合は、何人も明かに其の昔の儘に壯麗なる宮殿を見ることが出来る相である。斯の如く榮を誇つたアヅ族も漸次時代を経るに従つて其の信仰は現世の歡樂の爲めに墮落して天神の崇拜を離れ初めたので、天神は豫言者ヘベル (Habar) を遣して彼等の墮落を救はんとしたが墮落しきつた彼等の耳にはさしも豫言者の福音も空吹く風程の効果なく、彼等の信仰は日に荒み行くばかりであつたので、天神は更に彼等を反省せしむべく四ヶ年に渉る大旱魃を災したが、彼等の反省は天神のそれに歸せずして反つて當時偶像崇拜の府とも云はるべきメツカのカーバ宮殿へ祈願の使者を派せしむるに到つた。於是、天神は自己を離れたるノアの子を罰す可く恐

るべき酷熱の大旋風を下して彼等の滅亡を企てた。酷熱の大旋風は八日七夜其の暴威を逞うして、生きとし生ける不信仰の輩を一人も残さず滅ぼして仕舞つた。只僅かにへベルの教に真正の信仰に歸つた少数者と當時メツカに使した數十の反信者とのみが、その災厄から遁れたのであつたが、後に反信の生存者は猿に化せられ、正信者のみへベルに率ゐられて荒廢したるアーカフの地を去り、ハドラモートの他の地に移住したが其の後ありし昔の繁榮は再び來らずして此族はアラビア史から葬られて仕舞つたのである。今日ハドラモートのカブルフード (Kabr-i-Fud) と呼ぶ一小都市は彼等正信なりしアヅ族最後の地であるらしく此の地名はフードの墓の義であり、フードは即ちへベルのアラビヤ名である。南部、ヤマンの地にアヅ族が移住したに少し後れて、等しくハム民族のタムード族 (Banu Tamud) は半島の西北隅へベル (Hil) 地方に蕃殖した。此種族はノアの子アラムの孫タムードに率ゐられてゐたのでアヅ族とは同系の種族ではあつたが其の文化は遠く彼に及ばずしてへベルの地に在つて尙ほ岩石を穿つて穴居し、駱駝を飼ふてバレスチナ地方と陸上貿易を行つてゐた位のものであつた。此族の信仰も漸く天神を離れて、あらぬ偶像の崇拜に迷はんとし始めたので、天神は又豫言者サーレ (Saleh) を下して迷へる信仰を正道へ導かんとしたが、深くも迷へる彼等はいみじき豫言者の教へを聞かばこそ、反つて「汝若し眞の豫言

者ならば、吾等の面前に於て此の岩壁から仔駱駝を連れて牝駱駝を現し得るや。等と喧ふので、サーレは直ちに奇蹟を示して彼等の云ふが如く、岩壁から仔駱駝を連れて牝駱駝を現はした。不信なる迷へる者は眼前、其の奇蹟に怖れはしたが、尙ほも彼等の頑迷はその牝駱駝を屠つて迄天神を蔑にした。そこで天神も其の救ふ可からざるを知つて此種族殲滅を決した。恐るべき大地震は忽ちにして彼等の不信の徒を襲ふて、僅かにサーレに導かれた僅少の正信者を残して悉くを滅しきつた。此の二種族滅亡の事は後年、マホメッドが其の信者に反信者の蒙るべき罰の如何に怖るべきものなるかを教ふる際に屢々例に引いたものである。残されたる正信なるタムード人等は豫言者サーレに率ひられて此の穢れたる土地を後に、北の方バレスチナの地に遷つたが後更にメツカに移つて消えて仕舞つた。タスム族 (Tasm) も亦ノアの子セムの子ルドの苗裔であり、エセル (Jether) の子孫なるヤデス族 (Banu Jadis) と共にヤマンの或る一地方に蟠居して共にタスム族の族長の治下に在つたが、或る亂暴な族長が出で「ヤデス族の男兒は我れエセル族長に姦されざる女子と婚すべからず」等と途方もない暴令を發してヤデス人を虐待したのでヤデス人等は或時饗宴に事寄せて彼及びタスム族の権力者を招殺した。生殘つたタスム人等はヤマン王の下に遁れて其の援を乞ひ、ヤデス族を返り討つて復讐した。其後、是等二種族に關する事蹟はアラビア史

に趾を絶つて仕舞つてゐる。ヤマン地方には又アラビヤ史家がノアと共に例の函船で神罰の大洪水の難を遁れた八人の中の或る一人の後裔と稱する前ヨルハム (Jorham) 族其他二三のハム民族の種族が居つたが、何時の頃にか消滅して仕舞つて古代アラビヤの歴史に重大なる事蹟を止めなかつたが、此處に一つヤマンのアヅ族と相對して、古代アラビヤに盛を頌はれた一種族がある。アラビヤ史家がノアの孫アメレの子孫なりと云ひ、又、ノアの孫アデヅの子即ちノアの曾孫アメレの後裔と稱するアメレ族 (Banu Amalek) がそれである。(西歐の史家は此種族をエソ (Esau) の孫アマリカ (Analka) の子孫であると斷じてゐる。) 此の種族はアツシリヤ人の爲めに夙くバビロンの地を逐はれて、アラビヤに遁入り、南の方ヤマン地方から北ヘザヅ地方に涉つて居を構へ、更にシリヤ、パレスチナ地方に迄擴がつて居たので、集團としてアツ族の如く燦然たる盛時を示さなかつたが尙ほ其のシリヤ、パレスチナの地に蕃殖した彼等は其の主長ワリード (Waid) に率ゐられて深くエヂプトに攻め入り、幾代かエヂプトの王位を保つて後、遂に彼の土民に驅逐せられた。エヂプトの史家の『ポエニシヤの牧夫』と呼んだ種族は即ち此のアメレ族である。彼等のアラビヤ半島に居住してゐた者は、ヤマンのアヅ族よりも久しく盛えてゐたが後遂にセム民族であるヨルハム族に滅ぼされて仕舞つたのである。

如上ハム民族の諸種族の活動の一般は息まつて、爾後アラビヤの歴史はセム民族の數種族の記録となる。既に述べたる如く、ハム民族の諸種族は或は天刑に、或は他種族との鬭争に滅亡し、或は他種族との交通に混血し、或は漸滅して、今日のアラビヤ人とは全く別種のものであり、夫等ハム民族の諸種族は普通『消滅したるアラビヤ人』(Arab-ul-Baida) と稱され、全く歴史上過去の種族となつてゐるので、現今のアラビヤ人は是等『消滅したるアラビヤ人』の滅亡し或は其の衰微せる期に當つて、北方シリヤ、パレスチナの北方から侵入したカータン族とアヅナン族との二セム民族の子孫であると云ふのである。

カータン族 (Kathan) はエベル (Eber) の子カータンに起るセム民族の一種族で、初め其の族長カータンに率ゐられてメソポタミヤの地を發し、アラビヤ半島の東北隅より漸次全半島に擴がり、其の到る處に可成進歩したる政治組織の下に王國を建てた。カータンの子ヤレブ (Yareb) はヘザヅ地方に蟠居してヨルハム王國の祖となり、其の名は直ちに全アラビヤの呼稱となつた位い榮えた。(即ちアラビヤの名はヤレブから出たと云ふのである。) 其の子エスハド (Yeshad) は更に南に伸びて、ヤマンのメルブ (Merub) に據り、其の子アブウツシヤン (Abd-ush-Shan) は威を四方に振ふてヤマンの全地方を統一し、サバ (Saba) に都し、自らトツバ (Tobba) と號し、雄威はヨル

ハム王國の上遙かなる邊にあつた。トツバは後年マホメツドの回教統一帝國の君主カリフと同義であつて、神聖繼承者を意味するのである。其の子ヒミエル(Himyar)亦、能く父の遺業を承いで盛威を誇つたので、アラビヤ史家は爾來此の王國をヒミエル王國と稱してゐる。其の時代は丁度ペルシヤとビザンチンとの間に交通が開けた初期であつたらしい。

斯くの如くカータン族は北、ヘザヅの地にヨルハム王國を、南、ヤマン地にヒミエル王國を建て、事實上全アラビヤを掌握し、彼等自身も亦、自ら『眞のアラビヤ人』(Arab-ul-Arabi)と稱し、當時相前後してカルチャの地方から移遷してゐたアドナン族の上に居り、アドナン族を稱して『歸化したるアラビヤ人』(Arab-ul-Mosariba)と蔑してゐた。

アドナン族(Adnan)はアブラハムとハガルの子イスマエルの後裔であつた、アブラハムの時代にありて、既にアラビヤに移住してヘザヅの地に着跟してゐたので、其の子イスマエル(Ishmael)はヨルハム王メガシブンアミル(Meghass-ibn-Amr)の女を入れて婚し、自らは努めてカータン族の風習に慣れ、言語も亦ヘブライの古語を棄て、アラビヤ語を用ゐる此處に二種族は融和一致の基をなした。が、カータン族は常に政治上の權力を掌握して居り、且つ社會上にも常に優位を占めてゐた、然し兩者がアラビヤ文明に貢獻した點に到つては敢て甲乙なく、アヅナン族は其の天

賦を通商貿易上に露はし、隊商を組んで砂漠を歩き、北の方シリヤの諸地方より西はエジプトに東はメソポタミヤ、ペルシヤの地に通商し、更に小アジアに迄伸びて、彼等の足蹟は或はバルガンの一角にさへ達したかとも察せられる。メッカ市の如きは實に彼等が開いた都市の尤なるもので、北方の富は彼等に依つて此の市に蒐蓄されたのである。ヘザヅのアヅナン族の陸上貿易に大活動をなすに對して、南方、ヤマンのアヅナン族等は大いに海上に雄飛し一片の赤帆時風を孕ませて、北はペルシヤ灣の海港に、東してインド半島の西岸諸港及インド河口に、西は紅海沿岸のアフリカ諸地方に、更に南してはガールヒー岬以南のアフリカ東海岸諸地方に通航して、インド、ペルシヤ、スーダン諸國の富を吸収して蓄積し南北相呼應して専ら經濟的に發展し、カータン族の政治的に優越なるに對して敢て遜色を示さなかつた。彼等は斯くの如くして古代世界の運送者となり、能く東西の文化を融通せしめて、新に起るべき近代東方文明の助産婦たるの榮譽を擔ふに到るのである。

斯くて時の移るに従ひ、此處にアラビヤ古代史上怖るべき大異變が生じた。紀元前三世紀の初葉、天刑的大洪水は殆んどアラビヤ全部に涉つて襲來したのである。彼等はこの水災を『アレムの洪水』と云つて居る。

元來ヤマン地方は其の地形上屢々水災に遇ふた所で、何れの代にも彼等は意を先づ治水の業に用ゐて居り、殊に彼のアブウツシャン王の如きは、其の首都サバ市を築くに當つて、大いに土工を起し、メルバ盆地の中央に、二十餘尋の堤防を築き上げて、市民の用水は後方遙かなる地の高丘から大水道工事に依つて引用し、彼れの市民をして全く洪水の恐怖から遁れしめた筈であつたのであるが、彼等の口碑の所謂神の怒りは、さしものサバ城市をも一夜の内に潰し去つて、更に其の附近の都市村落迄をも洗ひ流して仕舞つたのである。此の不幸なるアレムの洪水の結果、少なくとも彼等の中の八家族等は其の一族を率ゐて彼等の故地を見棄てねばならなくなり、其のシリヤの地に去つた者は、ガサーン河畔にガサーン國(Diyar Gassan)を建て、カルヂヤに遁れたものはヒラ國(Dipar Hira)に據つてベルシヤの保護下に落付いた。又メソボタミヤへ移住した家族は其處にベクル(Beer)モダル(Modar)ラゴア(Rabia)の三國を建てたが勢威甚だ振はなかつた。此の外の家族等は以然大水災に荒廢した故地に踏み止まつて、ヒミエル家支配の下に其の善後に力めてゐた。が、其の後七百年程経つてドノワス王の時代(Dhu-Nawas)王の信仰的に頑迷なりし、甚だしく其の地の基督教徒を迫害したのでエシオビヤの大軍に攻伐せられ、王は其の生命と共に王位を奪はれて仕舞ひ、其の後、エシオビヤの四王族更迭の下に此の地は治められてゐたのである

が、其の後再びヒミエルのセリフ(Sarif)と云ふ者が出て、ベルシヤ王コスルアスシルワンの援を得てエシオビヤの王族を討ち王位を復したが、間もなく生き残つてゐたエシオビヤ人の或者に弑されて、後年マホメツドのアラビヤ統一迄、此の地の王位は常にベルシヤ王家の干渉する所となり、事實上ベルシヤの領土となつてゐた。ヤマンの最後の王はバザン(Bazan)と云ふので彼はマホメツドの勸降を容れて回教に歸依し、ベルシヤの保護下を離れて王位を去り、ヤマン國は名實共に滅んで仕舞つた。

ヘザヅのヨルハム國もアラムの大洪水の災に滅亡して仕舞つたので、其の後ヘザヅの統治は、今日アラビヤ中部砂漠地方が各自分立した數土酋の配下に分れてゐる様に、數家族の権力者の下に各自割據してゐて、マホメツドの統一迄其の状態を續けてゐたのである。マホメツドの生家たるコレイシユ家の如きは、實にメツカの支配者であつたのである。

西紀六百三十一年、マホメツドが天神アララーの命により經典コーランと劔とを以てアラビヤ全土を統一するや、全アラビヤは打つて一團の回教皇國となり、教皇の萬事統治する所となつてゐたが、十世紀の中頃、異端カリマツト派(Karimat)の爲めに其の大部分は奪はれ且つ聖地メツカ市さへ彼等の暴戾なる脚下に蹂躪せられ、是非なくも教皇自ら貢を約して和を請ふ様の仕儀に陥

いつたが、此れに反してヤマンの地は當時アリ(Ali)の苗裔なるタバタバ家(Trabatba)に統治せられをり、民は富み威は遠くエジプトに迄及んで居た。今日尙ほタバタバ家の子孫は残つて居つて十三世紀の末葉に分家したアユブ家(Ayub)が其の族長としてアデンの北方サナー市に居り、ヤマン地方は回教信仰の最も敬虔にして盛大なる地方となつて居るので、西紀一千五百十七年土耳其帝セリム一世の爲めに教皇の位を兼併せられた後は常に屢々神聖叛亂を起し、遂に昨一千九百十六年の如く歐洲戰亂にトルコの忙殺され居る隙に乗じて、聖地メツカ市を奪ひ返したと傳へられる位である。

ヤマン地方の斯る變遷に對し、ヘザヅ地方に爾後常に勢力ある大主長の下に治められたことなく、メツカ及びメチナの兩市が常に中心勢力として移推したのである。此の兩都市は一つはマホメッドの生地であり、一つは彼れが興隆發祥の地である所から、教皇の下に司祭(Shahin)が常住して殆んど常に教皇の干渉以外に獨自專斷の政治を行ふてゐる。アリの子ハサンの子孫たるカデル(Kaler)ムサタニ(Musa-Thani)ハセム(Haslem)キタダ(Kitada)の四家が交互に其の職に就いてゐたので、キタダ家は今日尙ほ綿々としてメツカ市の司祭の職にあり、ハセム家はメチナの司祭を傳承してゐる。

是等ヤマン王及びメツカ、メチナ兩聖地の司祭家は、教皇の主都がダマスカス、バグダッド、カイロ、コルドバ等常に多くアラビヤ半島以外の地にあり、且つは教皇朝のオムミヤ、アツバス、フアチマ等、或は篡奪し、或は並立して居つた結果、自然親和一致を缺き屢々内亂紛争を事として相互に勢を張り權を争ふて、常に教皇朝との交通は斷へがちになり、遂に十六世紀の初めに到つて、トルコ帝セリム一世及び其の子ソリマンの乗する所となり、爾後今日に到るも又、アラビヤの地はトルコ帝國と世界地圖に彩を同じくされてゐるのである。即ちアラビヤは其の年を以て政治的に滅亡したのである。然し彼等が三千年の長き歴史を回顧して見ると、其の北部に横はる荒涼たる一大砂漠と内地に連なる砂礫の原と、其處に籠むる瘴癘多き熱氣とは、天與の保壘となり又、障壁となつて、常に世界的政治の中心とは隔離され住民は常に自由であつて、他の壓迫干渉を蒙つてゐなかつた。彼のアッシリヤ帝國の如き其の盛時に於てさへ尙ほ且つ一步をだも此の地に踏み入れたことなく、アレキサンダー大王の威武も亦、此れに加ふるを得ずして終り、ベルシヤ王の權を以てして尙ほ時に朝貢を肯べなはし得たりと雖も、完全なる屬領として全き權を振ふことは出來ず、彼のカンピウスのエジプト遠征に當つて道をアラビヤに借らんとするや、先づ彼等の允許を得ねばならなかつた程である。羅馬の史家は屢々アラビヤは我が版圖なりと記

すと雖も、事實は彼の侵入軍の失敗を曲辯するものであつて、其の第一回の遠征軍の如き、勇將
 エリウス、ガルスの下に幾多の精銳なる勇士は空しく砂漠の鬼と化して、彼れは其の精兵の大半
 を失つて軍を斑すの餘儀なきに到つた様の仕末であり、トラジャン帝に企てられたる第二回の羅
 馬軍も亦、運命を曩と同じうして終つたのであつた。斯の如き自然の荒涼と人爲の獨立とは、長
 き時の経過と共に、彼等獨異なるアラビヤ民族性を醗酵した。吾等はその民族性を述ぶるに先立
 つて彼等の言語を一瞥しやう。

今日のアラビヤ語は、其の單語に於て將た語法に就て、餘程古代の夫れと違つたものになつて
 ゐるが、古代のアラビヤ語は實に世界最古の語の一つであり、既にバベルの混亂後間も無き太古
 に於て、他の古代語に對して特異なる一言語を成して居たらしく、其のメツカに於て公にせられ
 たりと云ふ古代詩人の砂漠生活を歌へる古詩、或はヘザヅ、タマヅ (Thamud) 等より出土したる
 古碑文等に依つて見ると、既に當時のアラビヤ語は少なからざる琢磨を加へられてゐたことが知
 れるのであるが、各種族間の交通の疎遠なりしは、勢ひ多種の方言を生じて種族を異にし家族を
 異にしては殆んど通用せなかつた位いの相違した方言もあつたらしく、幸に後年マホメッドが經
 典コーランを筆にしたので、大いに各種方言は統一せられ、從來彼れの家族即ちコレイシユの一

族及比較的廣くカータン族間に用ゐられてゐた方言が、アラビヤの標準語となり、引いて今日の
 アラビヤ語と變化したと云ふ譯である。一體、アラビヤ人は彼等の言語に對して一種の矜持と讚
 美の情を有つてゐたらしくあるが、斯く彼等が矜りとし讚美するに堪ふる言語を記し留むる術は
 容易に發達せなかつた。ヒミエル族の間では僅かにモスナド文字 (Mosnad) と稱するものが使用
 されてゐて、今日彼等の古碑に見ることが出来るが、其の他の諸種族間には殆んど文字と云ふも
 のは無かつたらしく、殊にメツカの住民は文字に就て全く無智であつたと云はれてゐる。然し、
 今日のアラビヤ文字の母と云ふ可きものは既にマホメッド出世以前にメツカに傳へられてゐた。
 夫れはケンデア族のバシヤル (Bashar) と云ふものが、カルヂヤの都府アンバル (Anbar) から將來
 したもので、カルヂヤのモラメレブモラ (Moramar-Ebn-Morra) が造つた文字であるが、最初マ
 ホメッドが經典を記すに用ゐたクヒ文字 (Cuphi) と同一物であるか否かは分らない。が、それに
 酷似したものであつたらしく、兎に角アラビヤ人の間に一度は使用されたことがあつたに相違な
 いのである。今日のアラビヤ文字は、其後幾人かの手に依つて幾度か改良し訂補されたもので、
 記録に止められた所で見ると、第十世紀の頃、イブンモクラ (Ebn-Moklah) が先づクヒ文字から改
 造し、後更にアリイブンボワブ (Ali-Ebn-Bowab) が改訂して今日のアラビヤ音符文字が完成さ

れたのである。又一説にその完成者はボツブでなく、ヤクツルモスタセミ (Yakut-ul-Mostasemi) と云ふ者であると云はれるが、今日ボツブはアラビヤ人の間に文字の祖として頌はれてゐる。大體に於て、アラビヤ語はユダヤ、フェニシヤ、モアブ、カルデヤ、サマール、マンデ及びシリヤの諸語と等しくセム語の特徴を有つてゐて、語法上その意義の重要な變化に連れて、語の母韻に一定の固定性があると云ふ特性がある。随つて、これを記載する場合に母韻を表はす文字を略すると云ふ記字上にも特徴を有つて居る。彼等はこの言語を有つことを誇り且つ無意識に讚美してゐたので、古來彼等の間では雄辯と云ふことが彼等の徳目の一つとして擧げられ、彼等は幼少の時より雄辯家たるべく修養し訓練されてゐた。而して雄辯なる者はカテブ (Katab) と尊稱されてゐるので、其の教祖マホメッドの如き其の莊重にして權威ある雄辯は多くの記録に讚稱されてゐる。この雄辯の徳目に伴ふて、詩歌も亦、彼等の讚美する所であり、彼等は好んで演説を試み詩を作つて楽しんでゐた。獨り自ら楽しみ、私かに矜つたに止まらず、彼等の各種族、各家族間では時折、詩合戦を催して以て家族の優劣を論じてゐた。メッカ市の定期市場たるオカツ (Ocah) では毎年一回各家族間の大々的詩合戦が開かれて、其優秀なる詩は『黄金の詩』 (al-Yodhahabat) と讚せられて、エジプト絹の上に黄金の文字を以て記されてカーバ神殿に掲げられ、アラビヤ最

上の名譽として喧稱されたものであつて、西歐の史家はこれを記すにアラビヤのオリンピヤ競技と呼んでゐる位い彼等を熱狂せしめ激勵したものであることが知れる。

彼等の社會組織は、家族を單位とした種族集團であつて、従つて其の社會將た國家制度は族長專政であつた。此の制度は彼等の職業上父祖の業は必ず繼承し守るの固定的風習を馴致し、又家系の重んじ尊ぶべきを知る美風を成し、系統學を發達せしめ彼等個人として自重心、廉耻心を養はしめた。又一面に、外冠の憂が少なかつたことが誘因となつて、彼等は屢々牆内に諍ぎ合ひ、自家の家系を尊重し且つは現世的に自家防衛の必要から、馬術を練り、劔撃の技を鍛ふるの習俗を成し、尙武の氣象を養ふた。彼等の古諺に『神は吾等アラビヤ人に四箇の大いなる賜を幸せられたり。曰く王冠に代ふる頭布 (turban) 曰く屋壁に代ふる天幕、曰く城塞に代ふる劔、曰く法典に代ふる詩』と云ふのがあるが又以て彼等の男々敷風格を偲ぶに足るものと思ふ。

彼等は又尙武なる騎士の勇敢なる他の半面として、當然、寛仁であり大度なるべき美徳を具へねばならなかつた。又、其の反對に、卑怯未練なるは極端に指彈されたのである。タイ族 (Tay) のハテム (Hatem)、クザラ (Kuzara) 族のハサン (Hasan) 兩家の如きは男々しかりしアラビヤ人の中の尙ほ男々しかりし家族として、傳稱されてゐる。然し此の美徳も次の様な嘶しが傳へら

れてゐる位に極端に迄馳つては、遂に馬鹿氣で仕舞つて、嘗に此の徳目のみならず、他の諸徳目迄が不道徳的に貴ばれ且つ修養されたことになる。その嘶と云ふのは。

或る蒼茫たる夕暮、一人の旅人がヤマナの市の一アラビヤ人の戸口に重い歩を止めて一夜の宿を願つた。宿の主人は早速に肯なひ入れて篤く饗なし、安らかに睡らしめた。所がその旅人と云ふのは實は盗人であつて、夜半に竊かに起き出で、馬舎から一番の駿馬を奪つて逃げさせて仕舞つた。夜は明けて、早くも主人はこの事を覺るや、自己の親切に酬ひられたこの非禮に對し怒髪實に天を衝き、直ちに他の駿馬に鞭打つて馬盗人の後を追ふた。日沖して幸に或る砂原の中で彼に追い付いた。主人は直ちに弓に矢を番へて満月の如く引き絞り、將に只一矢、彼れ馬盗人を射殺さんとした。と見ると彼れが逃げ行く數十歩の先きに一疋の蛇が蟠つてゐる。主人は鎌を蛇に向け、盗人を呼んで、『馬盗人よ、汝は余が昨夜の親切を酬ゆるに竊盜の卑怯を以てした。余は余の正確にして鋭き矢を以て汝を罰せねばならない。然し余は又寛容の徳を貴ぶ。余は汝の不徳を寛恕し、尙ほ汝に其の盗みたる馬を贈るべし。されど余は我が弓の強く我が矢の鋭きことを證さねばならぬ。見よ、汝の行手に蟠れる蛇を』と、言の未だ終らざるに矢を弦を放れて彼の蛇に中つた。主人は裕暢と馬首を回らせて家路を指し、馬盗人はさながらに去つた。

彼等アラビヤ人は斯の如き數多の美德を有つ、然し夫れ等は皆後天的のものであつて、先天的彼等の性情に立ち到れば、彼等は依然として索漠たる曠野の兒である。彼等は不幸にしてその食物として、菽穀蔬菜の類を得ることは容易でなかつた。従つて彼等は多く駱駝を屠つて、其肉を啖ひ其の生血を飲んで。加之も彼等は荒寥たる曠野に生れ、索漠たる砂礫の野に育つのである。其の性情は勢ひ慘忍にして暴戾であり、執拗であつて復讐の念強く、流血を悦んで争鬪を好み、怒り易くして頑迷なるを遁れない。

彼等は又、其所住地に因つて社會上二つに分れてゐた。即ち都市の住民と、曠野に轉々して天幕生活をなす遊牧の民とである。前者は商業に従事し、或は山羊駱駝等の家畜を飼ひ、又耕作を業として居て、後者遊牧の民に比べて社會上將た政治上常の優勝の地位に居り、その文化の程度も遙かに高く、前述の諸徳も多く此都人士のものであつたに反し、後者は全くの曠野の兒で彼等は多く前者の所有する牧場農圃に雇用せられ時に又、白浪綠林の徒と化つて、旅人の貨財を奪つて生活し、居所は生活の便不便に左右せられて常に轉々してゐたので、彼等は後天的諸徳を修養することなく、指彈すべき惡風を惡風なりと意識することなしに逞しうしてゐた。概して此種遊牧の民はアドナン族のものに多かつたらしく、其の彼等が屢々行ふ追剽強盜の惡行も毫も惡行爲

たることを自覺することなく、反つて強盜掠奪こそ己が生命であり、將た曠野の兒の享有する特權の尤なるものであると思爲して彼等は必ずしも生活上の窘窮に迫られずとも、一種勇敢なる遊戯として屢々旅人を掠かし、隊商の群を襲ふたのである。彼等は常に屢々豪語した「吾等の祖なるイスマエルが父アブラハムに逐はれて此の曠野に漂ふや、彼れが天帝より惠まれたる彼れの財産は實に此の荒漠たる曠野のみであつた。吾等の祖イスマエルは此の曠野に横はる總ての物を取る權利を有つてゐた。吾等は其子である。此の權利を行使すべき祖先に對する義務がある。」と。

實に彼等は曠野の兒である。その都市に住する者と雖も、亦、曠野の兒たらざるを得ぬ。彼等是一日の業を終へて蕭寥たる曠野の一角に佇む時、奇しくも彼等の注意を引くものは、銀砂子の如く滿天に撒き散らされたる無数の星辰であつた。彼等が心奥の或物は、此の無心なるべき星辰の瞬きに、何等かの神秘を看取せんと欲したであらう。又彼等は長き時間の經驗に依り、星辰の位置と或は其の狀の變異に依つて、己が嚮ふ所の方向を定め得るやうになつたであらうし、來るべき次の日の天候を豫知し得る様にもなつたに相違ない。實際又彼等は斯くなり居り、星學は彼等の間に早く、著しき發達を遂げてゐた。彼等の星辰觀測は彼等獨創のものであつて、古代カルヂヤ、ギリシヤ等にあつて惑星を基礎としたるに反し、彼等は恒星を基として先づ二十八宿の星

座を定め、^{アラビヤ}獸帯を區分して太陰の軌道を圖し、^{アラビヤ}アヌソ(Anwa)即ち月の家と稱する一枚の星座圖を作製してゐたものである。其の無数の星に名づくるに、一々彼等が地上に親める家畜獸蟲の名を以てして、言語として地球上言語多しと雖も、實にアラビヤ語程星辰の名を多く有つ言語がない位い多数の星に命名してゐた。然し吾等は此の小冊子に、アラビヤの天文學に就ては多くを記述することは出来ない。我等は彼等が星辰に導かれたる科學以上に、彼等の宗教方面に就て觀察せねばならない。

彼等が原始的宗教心意は、星座圖を作つて星學てふ一科學を形成する以前遙かなる過去にありて、無心の星辰を宗教的神祕に彩つた。而して彼等の間に各種の星辰を崇拜する自然物崇拜の原始的宗教は芽を萌き、星辰の外幾多地上の自然物に迄、それぞれ神格を認めて崇拜し更に夫れ等の神格を形像して、幾多無数の偶像を作り成して崇拜し、漸次進歩してサビ教を發達させた。

サビ教は、是等無数の自然神の上に主一權力神サバ(Saba)あることを認め、此れを「神中の神」(Allah-Tala)と崇め、諸神は即ちサバの補佐神(Heih)であつて、サバの命により各自其の分擔する職に勵んで、相倚つて宇宙萬物を保護し、世界を或る神意のある方向に進ませつゝあると解釋するので其の經典として一つの詩篇を有ち、又セス(Ses)書と稱するカルヂヤ語の經典を有つ

てゐた。然し此の主一権力神は偶像に像られなかつたので彼等の多くは主一権力神のあることを教へられつゝも、尙ほ諸多の補佐神に敬虔なる禮拜を捧げて、サビ教とし云はゞ星を祭るの宗教と思はしめる位い、恒星及び惑星の多くを祭つてゐた。ヤマンのサナに祭られた金星(Beth)の殿堂の如きは後年オスマン教皇に破壊されたが、其の昔のありし様は實に壯嚴極まりなきものであつたと記録にあるし、メッカ市の聖堂カーバ神殿の如きも最初は土星(Zohal)を祀る爲めに建てたものと傳へられてゐる。其他、ヒミエル族は太陽を、ラカム(Lakim)ヨダン(Jodan)族等は木星(Moshiri)を、タイ族はカノバス星(Solani)を、カイス族(Kais)は天狼星(Sirius)を、アサド族(Asad)は水星(Otared)をと云ふ工合に、各自、種族將た家族毎に、其の守護神として別箇の星を祀ぎ祭つてゐた。(マホメットの母系の祖父ワヘブ(Wahab)等も亦、天狼星の信者であつたので、彼は後年、その經典コーランにサビ教を叙するに、天狼星崇拜を例にとつてゐる。)彼等サビ教の徒は斯く劣等補助神を直ちに偶像に型り、或は自然物をその儘に、直接交渉することが出来たが、主一権力神との交渉はその中間に幾多の天使あることを認めて、夫れ等天使の中介を待つて初めて祈願し感謝する等の交渉を全ふし得ることになつてゐた。而して彼等は又夫れ等天使そのものをも又、直ちに肉眼に認識し得べく偶像に型つた。吾等は夫れ等偶像の多くの天使を今日

知るに由ないが、回教經典の記する所に依つてアラット、ウツザ、マナーの三女性天使のことに就ては多少を窺ひ知ることが出来る。

アラット(Allat)はタエのタキフ族(Thakif)の守護神で、其の殿堂はナカラ(Naklah)と云ふ處にあつた。此の偶像はその殿堂と共に後年マホメットの命に依つてアブソフキアン(Abu-Sofian)が破壊し去つたが、其の時タエの住民、殊にもその女性共は非常に哀惜してせめて三ヶ年だけ破壊を猶豫して貰ひ度く哀願したが、許されなかつたことが或る記録に残つてゐる位い熱心に敬虔に信仰されてゐたことが知れる。(ポコック博士(Dr. Pocock)はその名アラットは回教の唯一天神アラー(Allah)の女性形名詞であると論じてゐるが注意すべき研究である。)

ウツザ(Uzza)はコレイッシュ、ケナ、(Kenanah)及びサリン族(Salin)の或る一家族に信仰されてゐた天使であるとも云ふし、又、一説にガツハン族(Ghatfan)が信仰してゐたエジプト茨(acacia)の巨木であるとも傳はつてゐるが、其の名ウツザはアラビヤ語アツザ(azza)即ち勢力者の義から出たものらしく、此の偶像も亦回教曆の第八年マホメットの偶像大破壊の年に、カレデブンワリド(Khaled-Ebn-Walid)に破壊され巨木は切り倒して焼棄てられて仕舞つた。

マナー(Mannah)その名は、アラビヤ語マナ(mana)進る謂の語から出てゐるらしく、即ち此神に

捧げた犠牲の動物から血が迸り出づる状を以て直ちに神の名にしたと思はれるのであるが、斯る詮索は第二段として、此の神はメツカ、メデナ兩市の間に住んでゐたホヅヘル (Hothell) カザー (Kazath) 兩族に信仰されて居り、又、タキフ、カズラジ (Kharaj) アウス (Aws) 等の諸族からも信仰されてゐたと云ふ。其の神體は一大巨石であつて此れ亦、マホメツドの偶像大破壊の歳に破壊し去られて仕舞つた。其の他全アラビヤ各地に涉つて、苟しくも人煙の揚る處、否な人跡絶へたる砂漠の中にさへ、此の種の偶像は無數に安置されてゐたので、其の數は殆んどアラビヤの人口と等しかつたと傳へられてゐる。就中、メツカは偶像の府であつた。

メツカは世界最古の都市の一つであり、現在は回教の聖地として其の名は廣く世界の人に知られて居り、其の市名は亦アラビヤ語で大集合を意味するベツカ (Bacca) のそれであるが、實は四方突柔たる岩山を以て圍まれた南北二哩許り東北僅々一哩足らず、加之も不毛の砂礫地の溪谷に開かれた渺たる一小市街に過ぎないのである。而も、市の開祖イスマエルが天神を祀る爲めに建立したカーバ神殿 (Kaaba) は市の中央にあつて、實にアラビヤ偶像の府となつて居り、其の處にはホバル神像を主として、ワダ、サワ、ヤグス、ヤウ、ナサル等の偶像を初め、少なくとも一年中各毎日の當番守護神として三百六十箇の偶像が安置され、既に略述した様な名家族各自の守護神

や將た食物の神、家畜の神、災病の神等種々雑多な神の偶像が市中に充ち満ちて居たのである。

ホバル神像 (Hobal) と云ふのは紅瑪瑙で刻んだ人體の偶像で、イスマエルの父アブラハムの像である。一般に信じ崇められてゐたもので、此の偶像はシリヤのブルカ (Balka) から將來したものだ相で、その將來の當時は像の手が折れて失くなつてゐたのであるが、コレイシユ家のものが後に黄金で慥へて附け直したとか云ひ、其の手には彼等アラビヤ人が卜占の際に用ゐる羽も鏃もない矢を七本握つて居たと云ふのであるが、是れもマホメツドの偶像大破壊の時に破壊されて仕舞つた。次にコーランに記述されてある偶像として、前記五箇の偶像に就て略述しやうならば、夫れ等は皆其の昔、ノアが信仰した偶像であつたのを後アラビヤ人が傳來して崇拜してゐたものであると云ふので、ワダ神像 (Wada) は曠空たる天を人體に像つた偶像であつて、カルブ族 (Kalb) の守護神として崇められてゐたものであり、サワ神像 (Sawa) はハマダン族 (Hamadan) の守護神として祀られた女體の偶像で、昔ノアの洪水の折、水底深く沈没してゐたのをハマダン族の或者が拾ひ上げてその守護神としたものだ相である。ヤグス神像 (Yaguth) は獅子身像で其の名はガサ (Gatha) 救助と云ふ謂から出たものらしく即ちマタハジ族 (Madhaji) 及びヤマンの或る一地方の住民から救ひの神として崇め祀られてゐたものである。ヤウ神像 (Yauk) は馬身の偶像で、其の名

は防禦すると云ふアラビヤ語の動詞アーク(ak)と同根で、即ち總ての災厄仇敵から安全に守り護り呉れる神として、モラド(Morad)族及びハマダン族に祀られてゐた。ナサル(Nasr)神像は其の名の示す如く鷲の偶像で、ヒミエル族の守護神であつた。是等の偶像はいまだしも彼等の原始的宗教心意の創造として、尤もなるべきを首肯せしむるに足るとして置いて、他に甚だ怪しからぬ神の偶像まであつた。今日我國の田舎の諸所に往々見る粟島明神、道祖神と云ふた類の偶像の有無は彼等の記録に傳はつてゐないが、アサフ(Asaf)と云ふ男體の偶像と、ナエラ(Naylah)と云ふ女體の偶像との如き其の昔カーバ神殿を野合の淫媾に漬したヨルハム族の男女が神罰を蒙つて石に化せられた者を、コレイシユ家の者が神と崇め初めたもので、アサフはサフツ山頂(Saf)にナエラはメルヅア山頂(Murwa)に神殿を立て、祀られてゐた。是等の偶像も亦前述した多くの偶像と共に、マホメツドの偶像大破壊の歳に破壊し去られて仕舞つたが、マホメツドは姦淫の不徳に對する天神の裁斷の怖るべきを覺らしむる爲めに、毎年各地より來る回教徒の巡禮をして、必ず此の兩山に詣り天神の聖明を默念する事を定めてゐる。此の外、我國の「鱧の頭も信心から」を其の通りに、ハニフア族(Hania)の如きは一塊の素麵を神と祀ぎ崇めてゐた杯のことも傳へられてゐる。

斯の如く、サビ教はアラビヤに發達したる彼等固有の宗教としてアラビヤ全土に擴がり、彼等サビ教徒は人間の靈魂は、その肉體の滅後九千年間神の斷獄にあつて前生の罪業を消滅せしめて神聖なるものとなる爲めに苛責されるものであると信じ、其の苛責の苦しみを軽くせられん爲めに此の世に於ける修行として、禮拜、祈禱、斷食、巡禮杯の修行を積んでゐた。即ち彼等は、一日に三回、日出の半時間前と、正午太陽の西へ傾き初めた時と、日没時とに北を拜し南に禮して主一權力神サバに祈願し、轉じてメツカの方向に諸補助神を拜し、更に自家守護の偶像將た星辰其の他の自然物に禮し、豆、大蒜、其他野菜類を忌み年に三回、第一回目は三十日、第二回は九日間、第三回目には七日間の斷食を修し、又時折にメソボタミヤのハーレン(Harrah)及び斯教の開祖と稱せらるゝサビ、斯教擴布の導者と稱せらるゝサビの二兒セス(Seth)エノ(Enoch)の墓に巡禮して、牡鶏黑犢杯の犠牲を捧げ、香を燻き、セス經を朗誦し、メツカのカーバ神殿及びエジプトの金字塔をも神聖視して崇敬してゐたのである。

斯くの如くにして西紀四五世紀頃のアラビヤはサビ教の盛なりしに交つて、ユダヤ教も基督教も傳はり居り、尙ほ是等二教に先立つてベルシヤのマヂ教も傳來して居つた。又、彼等の間にはサビ教徒にもあらず、將た又た外來諸教の宗徒でもない異端無宗教の徒も介在してゐた。彼等異

端無宗教のアラビヤ人には、未だ鮮明なる神の觀念はなかつたが、又一種の轉廻轉生説的の觀念を有つてゐたらしく、彼等は死者の墳墓に、死者があゝの世の旅行に便せんが爲めに一匹の駱駝を繋いで駱駝が餓死し果てるも介意しなかつた。又、彼等の或る種族では人死すれば其の腦の血はハマ(Hamh)と云ふ一つの小鳥になつて、何處へか飛び去り、一千年に一度宛その墳墓を訪れると云ふことが信じられてゐたし、又た死者が若し他人に殺された場合では、そのハマは悲し氣にその墳墓の上を漂ふて、オスクニノ(Oscuni-oscuni)と啼き叫ぶ。其聲は彼等の語で「飲せて呉れ」と云ふので、即ち己れを殺した悪人の血を飲ませろと啼き叫ぶのであるから、その悪人が復讐されるか死するかすればハマ鳥は安心して何處へか飛び去ることが出来るのだ云ふことを信じて居た。蓋し、斯る思想はサビ教に修飾されない以前總てのアラビヤ人が有つてゐた生命觀であるらしくある。

前にも述べた如く、ベルシャとの斷えざる交通は、ベルシャに發達したベルシャの宗教マデ教を傳へ、少くとも半島の南部ヤマン地方では稍々盛んであつたに相違ない。この教はベルシャの導師(Mis)の宗教で、日月星辰水火精靈等の崇拜から漸次進んで、正義の善神(Sapenta-Mainyu)アフラ、マツダ(Ahura, Mazd)を主神と崇め、其の下に七小善神を配し、又一方に、邪惡の神

(Angra-Mainyu)アローマン(Ahriman)及び其の配下の七小惡神を對立せしめた、二元的多神教であつて、その善惡二神の鬭争を火と毒蛇との鬭争に叙し、其の宗教的修行としては、火を極度に崇拜し、火に向つて祈禱し禮拜せなければならぬ。(普通西歐でベルシャ教と云ひ、又たゾロアルター教(Zoroastrianism)と呼び、我國語に譯して拜火教と云ふものは即ちこのマデ教の統一され道德化されたものである。)この宗教修行は、彼のサビ教の偶像崇拜に比して、同程度に或はより以上に迷惑なものであつたに相違なく、今日斯教徒の間にあるダクマ塔(Dakhma)の如く、屍體の穢れを以て神聖なる水火を穢がすことを畏れ、此の塔を築いて屍體を投げ入れ、鳥類の來つて撞まゝに啄み啖ふに任すと云ふが如き殘酷なる鳥葬塔的の弊行が既に存在してゐたかも知れない。然し、マデ教に關するアラビヤの記録はその今に傳はれるものなく、マホメットの如きも斯教に就ては餘り多くの智識がなかつたとみえて、その經典コーランにも多く又た深き記述がないので、吾等はアラビヤに於けるマデ教の多くを知ることが出来ないのである。

ユダヤ人も早くよりアラビヤ人と交通して居り、就中、ローマ帝國の來り侵すに遇ふや、多く難をアラビヤの地に避けて、ケナナ(Kenani)やケンダ(Kandah)とかハレセブスカイバ(Harethebn-Cadn)とかの數種類に分れて多く都市に群住してゐたのであるが、元來ユダヤ教の天

神エホバはユダヤ國民のみの守護神であつて、其の全智と全能と慈愛と仁恵とは他國民に對して太だしく偏狭で、其の聖明は獨善なるユダヤ人に匿はれて、彼等一處に軒を並べつゝも、尙ほ且つ久しくアラビヤ人の間には傳へられなかつたのである、西紀前一世紀の頃ヤマン王アブカルダサツド (Abu-Card-Asad) が一度其の教へを聞くを得て、其族に傳布して以來、ヒミエル族は熱心なるユダヤ教徒となり、就中、ユセフ王 (Yusef) の如きは熱烈なる信者であつて大いに四隣に布教し、その改宗を肯せざる者は皆悉く捕へて火坑に投じた。由來世人、王を稱して火坑王と云ふ杯と、コーランに記してある位いで、兎に角ユダヤ教はヤマンの地方に盛行してゐたのである。

基督教は、又た四海同胞博愛仁慈を眞額にして驚異すべき奇蹟を演じつゝ、アラビヤの地にも布教の努力は盡くされてゐた。西紀三世紀の初め、一時蹉躓したことがあつた様であるが、爾後益布教に努めて、マホメツド出世當時にはラビヤ (Rabia) タグラ (Tagrah) バアラ (Bahra) トス (Tonuch) タイ (Tay) ロデア (Kodaa) 等の諸族の大部分、及びヒラ、ナジランの住民は既に教化せられ、ヤコブ派の下にアラビヤ大僧正 (Bishop) はクハ (Cufa) の都に駐在し、ヒフ大僧正はバグダッドの附近にありて彼等の所謂東の都マフリアの支配下に、益々布教の事に勵み居り、ネストリア派も亦、本國總教主 (Patriarch) 直管の下に一人の大僧正を派遣して居つてサビ、マデ、ユダ

ヤ諸教に比して大いに目を眩るべき活動を續けてゐたのであるが、其の教義は多くキリストの眞意を誤り宣べられ、三位一體の説は怪しげに繰り返へされ、聖母マリヤの信仰は遙かに唯一天神 (God) 信仰の上であり、マリヤの偶像は至る處に安置されて、其の宗教的修行は偶像崇拜の徒の陋弊を再びして、其の状サビ、マデ兩教のその如く迷惑して居つた。

翻つて當時の社會状態を見る。天幕住民は以然粗暴にして頽荒、砂漠掠奪の權利を傲唱して横行し居り、都市住民も亦、漸く財富衣食足るや奢侈の亂行と淫靡の惡風に慣れ初め、一夫多妻、人身賣買の弊風は盛んに行はれて、遠くベルシャ、アツシリヤ將たエジプトの地に美姬を求めて日夜、宴樂に耽り、アラビヤのオリンピヤたるオカヅの詩合戦は青春の男女が戀歌交換所と變り、姦通野合の淫婦は日夜公然と行はれてゐた。神の道を教ふべき宗教は混迷してゐる、世態は斯くの如く頽廢した。神はその慣用手段として天變か地異か自界叛逆か將た他國侵逼か孰れか怖るべき凶變を下して彼等の反省を強ひ、更に何人か敬虔なるを選んで世態革新の聖命を授けねばならぬ時代とはなつてゐるのであつた。斯る時代にマホメツド其の人は生れた

第二章 マホメツド

34

一象の歳—マホメツド生る—コレイシユ家—不幸の孤兒—富寡婦の入婿—風貌—天神の豫言者—
最初の信徒—メツカ宣教—コレイシユ家の迫害—アカバの誓約—ヤスレフ遁走—回教曆

西紀五百七拾年はアラビヤ史に特筆された年である。彼等は此の年を象の歳と記し、後年、マホツド開教してヘジラ紀元を採用する迄、象紀元幾年と年を數へてゐた。此の年、天帝は彼等の荒類淫靡を反省せしむべく、他國侵逼の難を遣つたのである。ロハイヤ(Lohya)駐屯のアビシニヤの太守アブラハルアルシヤム(Abrah'al-Arsham)はメツカ市民の富を掠奪すべく雲霞の如き大軍を引率し、自らは逞しき巨象に跨つて軍の先登に立ち、決河を開くが如き勢を以て大舉メツカに殺倒した。砂礫を蹴立て、進軍し來るアビシニヤ軍の劔戟は黄なるアラビヤの太陽に輝き、立ち上る砂煙の濛々たる裡に吼へ猛る軍象の吠吼は雷の如く、その凄まじき光景にメツカ市民は戦はずして都市の守りを棄て、悉く後方の岩山に避け、次いで來る光景と怖るべき運命に畏れ戦く口唇を強ひても働かせつゝ、只管に神の救ひを祈願してゐた。勝ち誇りたるアビシニヤ軍は破竹の勢を以て市内に侵入し、カーバ聖殿を破壊した。忽ち見る天の一方に一團の黒雲は現はれ、

須臾にしてメツカの空を覆ふと見る間に、砂礫の雨は盆を覆すが如くに降り、降り來る礫に中たるアビシニヤ勢は悉く傷き倒れ、次いで豪雨は宛然瀑布の九天より直下する底に注ぎ降つて、アビシニヤの醜草を洗ひ流し、穢されたる聖地を祓ひ淨めて止んだ。アラビヤの口碑に云ふ、最初に空を覆ふた黒雲は鳥の群で、砂礫の雨は鳥の啄み來つて投げ降した天の魔礫である。次いで天の水堰は引いて落されたのである。然し凡ての神祕と奇蹟とを破壊し去らんとする近代の史家は論ふて、アビシニヤの軍勢は長途の強行軍に病み疲れ、會々メツカ出水の機に軍を溪谷の市街地に屯して水難に滅びたのである。彼等の史家イブンヒシヤム(Ibn-Hisham)は又、アラビヤに痘瘡の輸入されたのはこのアビシニヤ侵入を機とすると記してゐる。孰れにするもこのアビシニヤ侵寇は儉安に慣れた彼等にとつて大なる恐怖であつた。此の事件に反省して神を恐れし正信の信仰に立ち戻れば或はマホメツドの出世を要しなかつたかも知れないのである。が、然し彼等は其當座こそ神を畏敬もしをれ、咽喉下すぎて熱さは既に忘れられた。於此てかマホメツドは此の年、アラビヤ曆三月(Rabi-ul-awal)の十二日—西紀五百七十年八月二十九日—メツカの主長コレイシユ家の族に生れた。後年アラビヤの世態人心を革新すべき聖命の兒も、生るゝや何等の奇蹟もなく唯、無心に加之も父アブヅデー(Ab-Dulh)の世を去りて後に父を知らぬ不運の兒と

35

して孤々の聲を擧げたのであつた。(一説にマホメッド出世するや一切の偶像を慄ひ戦き、ペルシヤの宮殿は凄まじく振動したと云ふがこれはそも後年回教徒のその教祖を光嚴せんが爲めにした故意の説話と見ん。)

既に屢々述べたるが如く。彼れの生家コレイシユ家はアラビヤの名門であつた。斯家はイスマエルの後裔ヒール(Hil)に起るので、ヒールは一般に天才的なるアドナン族の商人中に伍して、更に卓越したる商人として當時に頌はれ、加之も其の子孫は代々亦た卓越したる商人であつた所から、時人呼んで彼の一族を商人の家系、コレイシユと呼びなし、遂に彼の子孫の家名となつたのである。(コレイシユはカラシユ(Karash)商業を謂する語から出てゐる。西紀四世紀の末葉(或は五世紀の初め)、斯家第五代目の家長としてコッセイ(Kossay)が云ふものが出た。コッセイは實に斯家中興の祖とも云ふべく、西紀五世紀の中葉衆望に依つてメツカの主長となり、宮殿をカーバ神殿に對して建築し、宮殿の前庭を市政議事堂に當てた。この議事堂はナドワ(Nadwa)と呼び人望見識兼ね備はつた四十歳以上の名士が參集して、市の立法、行政及び司法の事を議する場所で、ナドワの議長は即ち市の主権者であつてコッセイその人であつた。コッセイはナドワの議長として大いに意を市政の事に注ぎ、凡そメツカの主長として行使すべき権限を分類し規定して後

代、メツカの主長となるべき者の信據すべき不文の憲法を遺した。夫れに依ると、主長の行使すべき第一の権限はナドワの議長として、市政上の議案に對する最終の決定權であつて、第二にカーバ神殿の鍵を保管する權利(Hijab)即ち教權を有ち、次に警察司法の權(Dizat)市民及び毎年各地方より參集する巡禮者に彼等の用水を供給する權(Siyah)を保有する。後者は權能と云ふより寧ろ義務と云ふ方が當つてゐる様に思はれるが、前にも述べた如くメツカ市は砂礫の豁谷に開けた市で市内に飲用に耐ふる井泉は唯一つカーバ神殿のゼム／＼と呼ぶ聖泉の外なかつたので、この聖泉の鍵を保管する權は即ち市民の生命を掌握せる權として現世的には寧ろ主長の有つ諸權の中、第一のものであつた。然し彼等が有つ唯一の井泉ゼムゼムも決して理想に近き飲用水ではなく、非常に鹹味を含んでゐたので後年屢々完全なる水道工事は計畫せられ、着手せられたのであつて、今日のメツカ水道はトルコ帝ソリマン教皇の妃に依つて完成されたものである。第五の權能として、市民より一種の財産税を徵集して敬虔なる信者に轉施する權(Rifada)を有ち、攻伐、防衛の兵權(Liwa)、使節を遣派するの權(Sifah)、市財産の行使權(Kazina)、市政會議を召集、開會、散會する權(Kaimmah)を保有してをり、最後に教權の一部として、吾々より考へて少しく變に感せられるが、ト占權(Azlan)と云ふのを有つてゐた。如上の諸權限は元來、前代々

の主長が無意識の裡に保有し、且つ時に當つて行使し來つたもので、それをコッセイが意識的に規定したに止まるものであるが、後年、將た、今日にあつても回教々皇の回教徒に對して有つ教義上の権能は如上の諸権能を近代的に解釋し敷衍したものとたるに止まるのである。

コッセイは斯くの如く實力あるメッカ主長として齡百に垂んとする迄、銳意メッカの發展に努め、其の死後、其の長子も亦た父の遺言に依つて其の職を継ぎ、メッカの威は其の市街地を超えて遙かの郊外の地に迄及んだのであつた。が、其の没後、彼の數子は相互に、又、彼れの弟等と權力の爭奪を初め遂に名義上、彼れの長子はメッカ主長とはなり得たが、實權は箇別に兄弟、叔父數人の手に分有され、就中、マホメツドの生家の族は重要な權力を多く保有した。(マホメツドの生家はコレイシユ本家と區別するために往々ハシエム家 (Hasiem) と呼ばれる。ハシエムは即ちマホメツドの曾祖父でコッセイの孫に當る) コッセイの孫の代になつては、主長の權力は殆んど全部、コレイシユ本家の手を離れて分家の手に移つて仕舞ひ、マホメツドの曾祖父ハシエムの如きはコレイシユ家第一の富豪として、加之も仁慈の心に厚く、救貧税 (Rifaada) の徵集權のみを保有してゐた者であるが、衆望は期せずしてメッカ第一にあり事實上ナドワの議長であつた。

ハシエムはシリヤ行商の途、ガツザ市に死んで彼れのメッカにあつて占めた權勢は其の弟ムタ

リップ (Mutalib) の手に歸し、彼が遺した唯一人の幼兒シャイバ (Shayba) も又、ムタリップに養はれることになつた。が、兄の財産と權勢とを私したムタリップは兄の遺孤シャイバに善くなかつた。後年、彼の本名シャイバとして、ムタリップの奴隸 (Abd-ul-Mutalib) として有名なるが如く隨分と酷遇されたことが想像される。シャイバは慘忍なる叔父の下に玉成して後年、メッカ市民の衆望を一身に集め、亡父を辱かしめざる人格となつた。メッカの市民は其の德風に感激して切に第二のコッセイたらんことを請ふたのであつたが、艱苦の裡に玉成した彼は主長專政、貴族寡頭政治の弊を擧げて、メッカ主長の名義さへも受けずして、主長の保有し行使すべき諸権能は人を選んで數人に分掌せしめ、自分は亡父の職たりし救貧税徵收の權のみを收めて大いに慈惠の事に従ひ、斯權を本義的に行使してゐた。彼は又、亡父の業に忠にして毎年二回、夏は南の方ヤマンに冬は北シリヤの地に多くの隊商を引率して貿易のことに銳意し、従つて家は益々富み、家庭は亦、十二男六女と云ふアラビヤ人間にありては珍らしき子福長者として、清福は彼れの一身に聚つたかの觀があつた。然し好事魔多き例か、アラビヤには子福長者の拂はねばならない慘しき犠牲の習慣があつた。子福長者は一家後代の繁榮を祈るために數多き兒の男兒を一人、カーバの神に犠牲せねばならないのであつた。彼れは息むなくも愛しき兒のアブブラーを犠牲に供したのであ

る。この犠牲の事實は敢えてアブヅラーを神前に屠つた譯でなく、百疋の駱駝が彼の命の代償とせられたのであつたが、事は悪く運んでアブヅラーは現世に幸少なくて夭折した。

アブヅラーは彼のアビシニヤ軍の侵寇の後、幾許もなくしてヤスレブ(後年のメチナ市)の行旅に病死し、其の死後、彼れの妻アミナ(Amina)は夫に先立たれた悲嘆の裡に新しき希望マホメツドを生んだのである。

アミナはヅリー族(Zuhri)の主長ワッブ(Wahb)の娘であつて豫言者マホメツドの生母として決して相當はしからぬ卑賤の出ではなかつたのである。

マホメツドは生るゝや、アラビヤの習慣通りメッカ郊外の曠野に天幕生活を營むベヅイン族(Bedouin)の婦に一時預けられ、僅かに外物を識別するに到つて生母アミナの手へ歸つた、然しアミナが賄贖の慈愛と周到なる注意は餘りに久しく彼れを幸せず、齡僅かに二歳、未だ生母の温容を定かにせざるに、生母は希望多きマホメツドを遺して亡夫の後を追ふたのであつた。於是、マホメツドは世にも不幸な全き孤兒となつたのであるが、然し此の不幸事は彼れの未だ幼孩なる意識せざる時の出来事であり、且つは父母なかりしと雖も、尙ほ仁慈なる祖父シャイバが残つて居た。シャイバは己れの幼かりし時の困苦を想ふて、一入この憐れなる孫の世話に心した。然

し神は近く頽廢したるアラビヤの世態と人心とを革新すべき聖命の宛を試練するに怠つてゐなかつた。神は、生れて三日ならざる仔獅を幾度も千仞の谷底に投げ落して獅子の氣を試むる母獅の夫れの如く、彼れが漸く十歳の夏、祖父にして又た、父であり將た、母である慈愛のシャイバを奪ふて仕舞つた。彼れは總艸、加之も形影相吊するの外なき天外の全き一孤兒として此の世に取り残されたのである。尤もシャイバの死に臨みてや、可憐き孤孫の身の行末に思ひ案ずる所切にして臨終の枕頭近く第三男アブタリブ(Abu-Talib)を召して呉れ、も其甥マホメツドの養育を依頼して逝いたのであり、アブタリブも亦た父の遺言を奉じて孤影倚る邊なき弟の遺兒を引き取つて世話してゐたのである。が、彼れマホメツドにとりては伯父の家の生活は樂しむべく悦ぶべきものではなかつた。彼れは伯父の家の小僮として、日に幾度かメッカの市の舗道を小走りに往來せねばならなかつたし、稍々長じては郊外に伯父の家畜せねばならなかつた。彼れは又、人傳てに、その生き顔さへ覺えぬ亡き父母のことを聞き、忘れ得ぬ亡き祖父の慈愛を思ひ起しては今の惨き己が身の上を顧みて、終夜冷たき床に涙を流すことも度々であつた。斯くして彼れは未だ壯ならざるに人生の悲惨を知り、彼れの心性は超自然の何物かを憧憬する様になつた。神は己が聖命の兒の心性試練を終り更にそを訓練せねばならぬ時が來たのである。

彼れの伯父アブタリブは彼れの保護者として決して惨忍酷薄な人ではなかつたのであるが、當時シリヤの諸地方に行商して、彼の地の學者が常に神を論じ生命を諍ひ、加之も、己れ自身は常に何物かを追ふ不安の霧中に漂ふて居る矛盾を目の前で見聞しては、世に文字ある者の悲惨なる事を思ひ知つて、家弟の遺孤を養育するに當つても文字ある者にすまいと思ひ定めて居つたので彼れはマホメッドに授くるに學問としては僅かに商業上必要な少數の文字と計數の初歩とより外に出でしめなかつた。で彼れマホメッドは實際文字通りに無學の一駱駝飼ひに外ならなかつた。然し神の訓練は單に現世の人間が一片の約束に止まる文字の上でなく數字の上の事ではない。

彼れは日夜に彼れの周圍に行はるゝ淫靡なる風俗と荒蕪した世態を目撃しては己れの現世の數奇なると思ひ較べて其處に人生の意義を探らんとし、メッカの市中、到る處に鼻を衝く偶像を見ては無意味なる一片の木片、一塊の土塊に宿る神性の何物たるかを究めんとした。然し考へれば考へる程、思へば思ふ程、無意義は依然として無意義であり、無意味は矢張り無意味である。彼れの懷疑は日に益々深く濃く、又た苦しくなつて行く。會々、彼れは彼れの伯父が彼れを導く方針の實行として、伯父アブタリブが率ゆる多くの隊商の群に投じてシリヤへ旅行することになつた彼等は各自所有の駱駝にヘザツ、ヒジルのなつめじゆる、ヤマンの香料を負はせて出發し、

ダマスカス、バグダッド、バストラの諸都市に交易してビザンチンの工藝品を持ち歸るのであつた、この旅行は可成長く、且つシリヤ、メソポタミヤの諸地方に涉つてゐて、彼れマホメッドにとつては、彼れが一生涯を通じて忘れ難き印象の重要な一つとなつた、彼れは到る處に何處も同じ世態の醜惡を見、人生の悲衰を感じ、信仰の惑迷を見た。一方に又、各地の學者にその究むる所のユダヤの神、基督の神に就て多くを聞いた。彼れはアラビヤの神の如く殊更に人に依つて像づくられた人爲の神以外に、力ある眞の神のこゝを知つたのであるが、翻つてその神の信仰の墮落を嗟く前に、尙ほ眞なりてふ神に對して多くの疑を挿んでゐたのである。彼れの心は既に或る神性に向つて開かれてゐた。然し、開かれたる彼れの心は未だ神の光に満ち充たなかつた。彼れの懷疑は益々深く濃くなりゆくのみであつた。

斯くして彼れは二十五歳になつた時、同じく彼れが同族中の富みたる寡婦カチーシャ(Khadja)の手代となつて、第二回のシリヤ貿易の旅に上つた。今次の旅行は彼れを現世的に祝福して、彼れは程經て巨利を家苞にしてメッカに歸著した。カチーシャは彼れが非凡なる商業上の才幹と將た又、彼れがアラビヤ男子の曲型的な容貌とに動かされて婚を乞ふた。彼れは伯父アブタリブの勧めもあり且つは自らも望む所あつて遂に切なるカチーシャの請ひを容れて彼女が第二の夫とな

つた。

彼れとカチージャとは、其の各の年齢に於て二十近くも違つて居り、彼れは彼女の息の如く見えぬでもなかつたが、夫婦の交情は美しく誠に、彼女の彼れを遇する單に夫と云ふ以外に彼れの未だ露れざる素質の何物かに畏敬し信頼せる所があり、彼れは又、彼女を待つに後年彼女をして回教徒婦人の典型なりと宣したが如く彼女の婦徳に感じ、彼女の爲めに進んで益々自己の商業上の天賦を發揮して、シリヤにヤマンに毎度巨利を獲得して家は益々富み、彼れは四十歳にしてコレイシユ家第一の富豪となり、家庭は常に平和にして其の間に三男四女をなした。

此の十五年間は家富み家内睦まじく身は市政議會の有力なる一議員として、他人からはその現世的幸福を羨まれてゐたのであるが、一度彼れが内心の懷疑に思ひ到れば、彼れは尙ほ安らざる大なる苦悶の兒として取殘されてゐたのである。彼れの周圍は、彼れの祖先達が創造した多くの神々に満ちてゐる。然し夫れ等は觀じ來れば一片の木片であり、將た一塊の土塊に過ぎずして、彼れの渴仰する眞の神は、未だ其の片影をだも彼れに示されない。彼れの心は常に大いなる懷疑に虐まれ、彼れの眼は斷えず際涯なき天の一方に或る物を求めて居た。然し彼れは家にあつて依然愛情ある夫であり慈愛なる父であり且つ伯父アブタリブの囑を受けて其の兒アリの訓育に忠實

なる従兄となり將た、慈愛なる第二の父となつてゐた。又、外にあつて一般市民に對して彼れの仁慈は普遍であり、殊に貧者、病者を憐んで彼れの私財は常に屢々惜まるゝ所なく是等の憐むべき者に施されてゐた。彼れの汎愛なるは、只に人間にのみ限られずして畜類のそれに迄及んでゐたのであつた。彼れは或る時、遽かに席を立たねばならなかつた。然し彼れの外套の裾には一匹の猫が安かに眠つてゐる。彼れは無慈悲に猫の辱を奪つて、その安眠を破ることを畏れて、靜かに外套を脱ぎすて、席を立つたと云ふ美談が今に傳へられてゐる。(此の傳説は今日多くの回教徒をして畜類、就中猫を愛する風習を馴致してゐる。)

吾々はこゝに彼れマホメツドの風貌を想描する事が出来る。

筋骨共に逞しき中年の丈夫、身長は六尺に垂んとしてゐたであらう。幾度か塞外の遠きに通商して日に焦げたれど、血の氣みなぎつた顔色と、炯々たる鳶色の眼と、髯々たる鬚髯と、濃き眉と秀でたる鼻とは、蓋しアラビヤ丈夫の典型である。半ばタバーンに覆はれたる廣き額に刻む世故の皺は、その慧智の多き分量を示し、堅く引き締つたる唇は、敢勇の氣をほめかす。彼れが豊かなるアラビヤ外套の肩にタイラサン(タバーンの上から頭に引被る布)の端を軽く波打たせて静々と歩をメツカの舗道に運ぶ時、英姿は颯爽として隣りを掃ふ。但し人あり近いて彼れに會釋

する時、或は又小兒の走りて彼の裾にすがるとき、引締つたる唇は破れ、双頬の豊かな肉と共に其處に云ふべからざる温慈の色を漂はす。然し彼れの眼は常に大いなる不安と、不満に曇りて、唯只管に追求する或物を外にしては、周囲の凡てを不注意に看過せんとする。所誼は物質上の慰安、真に精神上の慰安となり得ないことを證するのらしくある。

彼れは多くの豫言者や聖者達が行つた如く、多忙なる家業の暇を窺ひ、煩雜なる公務の餘暇をメツカの近郊に横はるヒラ山(Hira)の岩窟内に避れて、其處に眞の神に接せんとした。彼れは時に其處に、家族を伴ふこともあつたが、多くは只一人で氣を鎮め心を凝らして、生の不思議、死の不思議を解き、宇宙の神秘を讀んで眞の神に見えんとしたのである。

彼れが四十の齡を重ねたアラビヤ曆第九月の或る夜である。例に依つて彼れは只一人、凄きまで静かなるヒラの岩窟内に端座して、只管に宇宙の神秘を讀まんと默念して居た時である。荒寥たる岩山の夜も既に更けて、吹く風はありとすることも死せるが如き夜の静寂を破る稍有つ一本の立木さへなく元より流るゝ水もない。夜の静寂は檀まゝに四隣を壓して、空には星影怪しく瞬く、忽ち天空に聲あり。朗かに且つ力強く「宣べよ」と響いて默念するマホメットの耳朵を激しく衝つ。再度三度、「宣べよ」「宣べよ」。於是、マホメットは靜かに頭を上げて尋ねた。「我れはそも何を宣

ふべきか」答は直ちに、加之も更らに明らかに、且つ力強く「神に代りて宣べよ」俄然、彼れは神の聲を聞いたのである。然し、彼れは怪しみつ且つ怖れつ、直ちに走り歸つて愛妻の膝下に轉び伏し「お、カデージャよ、そも我れは如何なるにや」と少時は激しき發作に語を續けて事件の始終を語ることが出来なかつた。やゝあつて事の委細を聞き終つたカデージャハは「神は常に吾々を護り給ふ。我が夫よ、お身は未だ嘗て他人に不善をなしたことはない、加之も常に神を畏れ神を信じて居る。私等は神に感謝せねばならぬ。あなたは神に祝福された、否、神はお身を聖なる豫言者として吾々に遣はされたのに相違ない。」と云ふて、更に走つて伯父ソラカ(Waraka)にこれを確めた。ソラカは既に頹齡の加之も盲人であつたが、ヘブライの語に通じ、その神學を究めた當時有名なる學者であつた。ソラカは姪カデージャを勵まして教へた。「汝の夫マホメットは、世にも聖なる神の豫言者である。彼れは嘗てモーゼが聞きしが如く神の御聲を聞いたのである。彼れこそは我アラビヤの聖なる豫言者であらねばならぬ。」と。又た數日を経て市中に、マホメットに行き會ひ見えぬ眼にマホメットを凝視して「マホメットよ、あはれ御身は神の豫言者である。お身は疑ふ所なく、勇猛に神の道を宣べねばならない。然し、心の盲人はお身の教へに耳を傾けるかどうか、定めし彼等はお身を嘘言者と罵るであらうし、更にお身をお身を害せんとし、尙ほもお

身を追放せねば措かぬであらう。然しお身は神に代つて誠の道を説かねばならぬ。心弱くては叶はぬことである。精進せよ、あはれ豫言者マホメッドよ。』と

斯くの如く、マホメッドは遂に聖なる神の聲を聞いたし、神の學に深きワラカに激勵されもした。然し、未だ彼れは直ちに神の道を廣く多くの人に宣べんとはせなかつた。彼れは先づ己れの家族に教へ、近親に説いた。

第一に彼れの説く神の道に入つた者は、彼れの愛妻カデーシャであつた。次いで彼れの従弟アリであり、彼れの忠僕ザイドであつた。ザイド(Zaid)は憐れにも卑しき奴隸として、マホメッドに贈られた者であつたが、マホメッドの仁慈は彼れを直ちに放釋して自由の身分にしてやつたので、彼は恩に感じてマホメッドより去らず、常に獻身的忠實を盡くした家奴であつた。次いでアブヅラー(Abdullah)タエム(Taym-ibu-Murra)オスマン(Othman-ibu-Affan)アブヅラーマン(Abdur Rahman)サード(Saad Ebn-Abi-Wakkas)ズバイル(Zubair)はマホメッドの教へに歸した。是等は皆、當時メッカに於ける名門の長者であり、就中、アブヅラーはコレイシユ本家の出として當時メッカ市政の重要な權力を握り、カーバ神殿の忠僕(Abdul Kaaba)と稱されて熱心なる偶像の信者であつたのであるが、一度マホメッドの教に耳を傾けて以來覺醒して厚き唯一天神の信者と

なつたので、其の又の名アブベクル(Abu Bekr)は、精進なる回教の使徒として回教史に香ばしく残つて居り、タエムは思慮ある富商人として、その高潔なる人格を頌はれてゐた者であり、オスマンも亦、アブベクルと並び稱さるゝ勇猛の使徒となつたし、サードは後年劔を執つて大いにベルシャに回教の廣布に努めたものである。ヅバイルはカデーシャの甥であつた。

斯くの如く、有力なる信者を得たけれど、彼れの布教は決して容易なるものではなかつた。コレイシユ家の主長アブソフキアン(Abu Sofian Ebn Harb)はナドワの議長として、メッカの主権者であり、教權を握り居り、マホメッドの新宗教に對しては、自家の信仰及び位置よりして絶對の反對者であつたし、市民も亦、久しく偶像崇拜の毒酒に酔ふて、唯一天神を認めない。健忍不拔の彼れの布教も、常に混迷したる市民の惡罵に遮ぎられ勝ちであつた。而も日を重ね月を閲するに及んでは稍々、彼れの教に耳を傾くる者も寥々ではあつたが出来初めて來た。彼れの教への擴まり初むるに比例して、彼れの反對者の妨礙迫害も亦企て初められて來る。コレイシユ家の者共は、不逞の暴漢を使嚇して彼れが布教の場を騒がせ、瓦礫を擲つて彼れを傷つけ、果ては及杖を用意して彼れの血を流さんと企てた。然し、彼れの熱烈なる敬神の情は、不拔の勇氣と化つて迫害に遇ふて益々堅固に、唯一天神の福音は火の如き熱辯を以て各所に喧傳される。コレイシユ

家の迫害は更に激しく更に頻りに、加之も方面を換へて彼れの信者の身邊に遷る。ラムダハ丘 (Ramdha) とバサ砂原 (Batha) とでは日々に捕へられたる回教徒は、鞭打たれ、石を負はされて酷熱の炎天に曝され、苦痛と饑渴の苛責を受けてゐた。

彼れ天啓を感受して唯一天神の教を説き初めてより第五年、十八人の信者は執拗なるコレイシユ家の迫害に堪え兼ねて、遂に忘れ難き故郷を棄て、エシオビヤのナジヤシ (Nasish) に遁じた彼れの使徒オスマンは即ち此の行の嚮導であり、彼れの妻、マホメッドの娘なるラキヤ (Rakia) も亦一行の中にあつた。回教史はこれを『第一回の遁走』 (Muh-jarat) と稱してゐる。次いでアリの兄ヤール (Yahar) 嚮導の下に、八十三人の男兒と十八人の婦女子との一團も亦、オスマン、ラキヤ等の後を追ふてナジヤシに避難した。ナジヤシの主長は好く彼等亡命者を遇して、コレイシユ家よりの亡命者引渡の要求を浚拒した。於是、コレイシユ家一族の怒りは、尙ほもメツカに踏止つて布教に健闘するマホメッドの一身に集まらねばならぬ。然し、メツカ古來の信仰を賊する背叛の者とは云ふても、彼れマホメッドは等しく權門の一族であり、且つは彼れの生家ハシエム家及び其近親なるムタリブ家一統は明かに彼れの信者たらざる迄も彼れの同情者であり、救貧税^{リッヰヤ}賦課權^{シカヤ}と給水權^{シカヤ}の所持者として彼れの伯父であり又た、養ひの父であるアブタリブは尙ほ一方の

權力者として健在である。コレイシユ本家 (オムミヤ家 (Ommeiya) と云ふ) 一統の怒りと報復の決心が如何に火と燃えても兇暴直ちに彼れの邸を襲ふて、彼れの首を假月刀^{シキグイ}に懸くることは憚られる。於是か、迫害者は術を換えて、彼れの伯父アブタリブと懇談して、彼れを説き其の信仰を棄て、古來の偶像信仰に立歸らんことを勧告せしめた。然しアブタリブは彼れの新しき信仰には理解を有ち、且つ同情して居る者である。彼れアブタリブの勧告は尋常一遍の力なきものであつて、決してマホメッドをして其の堅き信仰を翻さしむべくもなかつたし、譬へアブタリブの勧告が權威あるものであつたにしても、彼れマホメッドの信仰は恩愛の肉身に叛るて迄も貫徹されねばならぬ超自然の權威に固められたものである以上、些細の動搖も現はれぬ筈である。宜なり、コレイシユ家は再び品を代えて復、彼れの叔父オトバ (Odba) をして彼れを説くに『若し汝にして、我が族古來の信仰に立ち歸るならば、吾等は選んで汝をナドワの議長とし、メツカの主權を授け、且つ又、巨萬の富を贈らん。』ことを以てしたるに答へて『余は富を欲し、名譽に憬れ、王國を欲するものではない。余は唯一天神の此の世に下されたる使者として、神の福音を宣傳すれば足る。』と斷言したことや。蓋し彼れや既に一介のメツカ市民にあらず、榮光なる天神の豫言者である。威武の能く屈する所にあらず、富貴の得て淫し得べき底のものではない。彼れは不斷の

迫害の裡に、從容として彌々熱心に敬虔に神の道を宣傳する。其の間、屢々ヒラの岩窟に凝念して神の聲を經典コーランに録する。又たカーバ神殿に參じて醜き偶像を外にして、凡眼に見るべからざる全智全能の唯一天神を禮拜し祈禱した。彼れが天啓を得るヒラの岩窟は彼れの伯父アブラハブ (Abu-Ishak) の無智なる妻によつて荆茨を以て蔽はれ、彼れが天神に見ゆるカーバ神殿はコレイシユ不逞の徒の刀杖に阻まれた。然し彼れは荆茨を掃ひ、刀杖を避けてヒラの默念とゼム／＼泉畔の祈禱とを怠らなかつた。彼れの説教は屢々メツカ偶像の徒の嘲罵に壓されつゝも、尙ほ外より來る巡禮商人の輩の耳を傾けしめてゐた。コレイシユの迫害は夫れ等巡禮商人の徒に及んで、彼等のメツカ市に近づくや嚴重なる監視の下にマホメッドに近づくことを禁せられたし、一方に瓦礫の雨は、時ならぬ晴天にマホメッドの身邊のみに降り注いだ。

オムミヤ家のオマル (Omar Ebu ul-Khattab) はカーバ神殿の忠僕として彼れマホメッドに怒ること猛く、常に無頼の徒を指揮して彼れのカーバ神殿に詣るを妨げてゐた。一日遂に意を決し、偶像の爲め、コレイシユ族の爲め、メツカ市民の爲めに一身を犠牲として彼れと刺し違はんことを欲し、彼れがゼム／＼聖泉の傍りに端座して天神を禮し祈願を凝らせるを見て、偃月刀を抜き放つて彼れに近づきゆく。余は敬畏すべき全智全能なる唯一天神の地上に遣はされたる豫言者なり。爾等須

らく余が説くを聴け。信する者は神その現世未來を護り給はん。信せるざるもよし。余は耐えん。されど神は信者と不信者とを厳しく判じて制裁せらるべし。』朗々たるマホメッドが讀誦する經典の聲は織々たるゼム／＼聖泉の水聲に和して、殺意に熱したるオマルの耳朶を打ち、迷える心を憐むげに響く。オマルは此の神祕に衝たれて忽ちに大感激し、刀を投げ棄て、豫言者の前に轉び伏し、『豫言者よ、我れを救せ。』昨日の強敵は今の忠僕と化り、オマルは回教のポーロとして芳名を回教史に垂れる敬虔なる信者となつた。彼れの沈毅と熱心とは又、頑なる小父ハムザ (Hamza) の偶像崇拜の心を和げて精進なる信者と化した。此時は彼れ開教六年である。

於是か、コレイシユの偶像の徒(回教經典コーランでは偶像崇拜の徒を「神を離れたる團體の一員」(Mushikin)と呼びなしてゐる。)が豫言者迫害の策は改められて、彼れが回教第七年、コレイシユ家の一統は彼れが生家たり又た同情者たる擁護者たるハシエム、ムタレブ兩家に絶交を宣し、其のメツカ市長の權を以て厳しく一般市民の兩家と交通することを禁止して、是等兩家が餘議なくもマホメッドを追放するか、彼等一團となつてメツカを去るか或は又、坐してメツカの地に餓死するか、其の孰れか一途を擇ばねばならない様に仕向けた。彼等はアブタリブに率ゐられ、マホメッドを擁して市の東郊、山勢相逼つて自らなる險要の地シブ (Shib) に退りて、或は來るべき

コレインユ家の追撃勢に備へた。コレインユ家の族は敢て大勢を催はして、是れを掩殺せんとは企てなかつたが、常に哨戒を嚴かに配して、外間との交通を阻み、嚴重なる封鎖を怠らなかつたので、シブの籠城は兩家の者供にとつて非常なる苦しみであつた。幸に籠居三年、マホメッド開教第十年、アムルの子ヒシヤム(Hisham)が調停に盡力するものがあつて、一同は和解してメッカに回つたが、マホメッドに對する偶像の徒の瓦礫刀杖の迫害は、依然にも倍して執拗に又猛烈であつたので、彼は忠僕サイドに案内されて其の故郷タエに遁れたが、此の市も亦、彼の身を容れて呉れない。タエの市民は彼れを手とり足とりして市外に放り出して仕舞つた。

彼れマホメッドは、四塞道通せざるの悲境に沈淪しつゝも、尙唯一天神の信仰に心は雄々しく安らげ、再びメッカに歸つて來た。神は自れの豫言者に、殊更にも嘲罵瓦礫刀杖の迫害に遇はせて、徐ろに廣宣流布の曙光を認めしめんとはする。歸り來つて一日、彼れは市の北西、ヤスレブ街道の路傍にメッカに巡禮せんこ來る六人のヤスレブ人に會つた。彼れは例の如く熱心に唯一天神の道を説き、敬虔に祈禱する。彼等六人のヤスレブ人達は遂に感激して神の道に入つた。其の翌年、彼れ開教の第十一年、彼等六人のヤスレブ人は更に六人の同胞を誘ふて、マホメッドに詣つた。マホメッドはメッカ北郊の岩山アカバ(Akaba)の頂に彼等と見え神の道を説く、彼等は

悉く回教に歸依し、マホメッドの前に天神に誓約した。『我等は凡ての偶像を破棄すべし。我等は偷盜せず。我等は姦淫せず。我等は幼兒を殺さず。(當時未だ昧晦なるアラビヤ人間にありて、養育難に陥つた場合は、何等怪しむ所なく其の幼兒を殺したものであつた。)我等は讒誣せず。凡て豫言者の教に従はん。』と更に斯教宣布の爲め、神聖なる劔戟を執ることを辭せざる旨を誓約したのである。これを「アカバ第一の誓約」と呼んで居る。マホメッドは彼等の歸郷に際し、其の使徒マサザ(Masab Ebn Omair)を同行せしめ、ヤスレブ布教の事を命じた。マサザは大いにヤスレブに布教し其の主長サード(Saad Ebn Moadh)及びアウス族長オサイド(Osaid Ebn Hobeira)を首め市民の多數を教化して翌年メッカに歸來した。

越えて二年、ヤスレブ人は七十五人相伴ふて來り、アカバ山頂にマホメッドに見みえ以前の誓約を繰返し、且つ切にマホメッドのヤスレブ巡錫を請ふて歸つた。(これを「アカバ第二の誓約」と云ふ。)マホメッドは彼等の請を容れて直ぐにはヤスレブ巡錫の途には上らなかつたが、彼れの胸中にはヤスレブこそ我が天神の教への興隆の地たるべきを感じたるべく、彼れは彼れと共に日々執拗なる偶像の徒の迫害に耐えつゝも尙ほ、メッカに踏み止まれる彼れの信者をして、ヤスレブ避難を命じ、三々五々夜暗に紛れて竊かにメッカを立ち退かしめた。元より己れも後を追ふて、

遠からずヤスレブに入る筈であつたのである。彼れの身邊には、常に執拗なるオムミヤ家の間者が付き纏つてゐる。マホメツドの此の企劃は忽ちアブソフキアンに傳へられた。急遽ナドワは開かれて、彼れに對する決定的處分案が議せられる。ナドワにあつて常に唯一人の有力なる彼れの擁護者アブタリブは曩きにコレイシユの兩派和解してシブの籠城から歸來後間もなく世を去つてゐる。(アブタリブの死後更に間もなくマホメツドの愛妻カデージャも逝いた。回教徒は其の年、即ちマホメツド開教第十年を「悲しみの歳」と呼んでゐる。アブタリブの死後は、ハシエム、ムタリブの兩家は、常に甚だしきオムミヤ家一派の迫害に苦しめられてゐたのである。)囚へて獄すべきか、捕へて追放すべきか、斬るべきか將た、族誅すべきか。アブジャハル(Abu Jal)の説は決せられて、各家より各々當千の勇士を撰出して、偶像教徒の假月刀(シキヤ)を彼れの胸に貫くこととなつた選ばれたる各家の勇士は、各々祕藏する假月刀(シキヤ)を砥いで夜中竊かに彼れの邸を圍み、曉、彼れが禱りの爲め戸外に出づるを待つて刺さんと勇む。彼れが寢室の戸の隙より窺へば、天か命か彼れは常の如く緑色の外套を被つて、迫り来る危険と知るや知らずや安らかに眠つてゐる。既に曉にして、起き出づるものを觀れば、マホメツドにあらずして其の甥アリであつた。斯くと知るやオミヤム家の一族は、騎士を放つてヤスレブ街道を北に西に彼れを追ひ求め、更に多數の搜索隊

はメツカの附近を隈なく搜し求めた。然し當のマホメツドは巧みに逃れて、彼等の追撃も搜索も空しく終つた。マホメツドは自れの危険を知つてか暗殺者の未だ窺ひ寄らざるに、既に邸を逃れてアブベタルの邸に隠れ、更にベルクの家僕アミヤ(Amir Ebu Fohetrah)に護られ、一人の案内者を雇ふてメツカの南方なるトール山(Thour)の岩窟内に隠れ、三日間を其の岩窟中に過してヤスレブ街道追撃者の空しく引き上げたるを見て竊かに間道を辿つてヤスレブに落ち、市外二哩許りのコバ(Koba)の村落に追ひ来るアリに會し、彼れが開教第十三年の第三月(Rabi-ul-awwal)の十六日金曜日(西紀六百二十二年七月二日)の早朝、ヤスレブに安堵したのである。此のヤスレブ落ちに就ては、古來、彼等回教徒間に奇蹟的傳説が信じられてゐるのであるが、元來マホメツドには奇蹟といふものが少ないと云ふより殆んど無いので、彼れ自身も亦、所謂奇蹟を語らず、その果して有り得べきものなりや否やさへ、考へたことがなかつたらしい。或時、彼れは奇蹟に就て信者の問ふに答へて「吾等が此の世に生れ來りたること、それ既に大なる奇蹟ならずや。之れを他にして宇宙何物か奇蹟なるものあらんや。」と。されば此の遁走に關して傳へらる所謂奇蹟、彼れは煙の如く將た霞の如く戸の隙間から逃れ出たとか、彼れが逃れてトールの岩窟に潜むや蜘蛛は來つて窟の入口に巢をかけ、山鳩は更に卵を生みつけて置いたので、オムミヤの搜索隊はその窟のみを

搜索せずして引上げしとか云ふことは、之れをユダヤの聖者ダビデに借りしものと見るべく、彼れが開教第十年の一夜、メツカよりエルサレムに旅行し、更に天馬に跨つて第七天に天神に謁し、經典コーランと降魔の劔とを授かりしと云ふが如き、所謂奇蹟なるものは、之れを後人が善意の假説とみて、心理學的の詮索さへもしたくない。勿論、假説は假説として自ら價値を有つ、所謂奇蹟は奇蹟として傳へらるゝも亦、害せないものである。

此の日は即ち回教徒の所謂「遁走の日」(Hijrah)で、此の日以後アラビアの暦年はヘジラ何年と算ふ。ヘジラは即ち遁走の義で回教暦ヘジラ紀元は此の年に始まるのである。尤も、ヘジラ紀元の採用は此時直ちにマホメッドによつて宣言されたものではなく、後十七年、教皇アプベクルに依つて西紀六百三十九年七月十五日を以てヘジラ第十七年一月(Muharram)一日と定められたのである。又、此の日は金曜日(Jumma)に當る。回教徒が金曜日を以て聖日となし業を休んで只管に神を拜し禱るのは蓋し之れに因るのである。

既に豫言者マホメッドは迫害頻なりしメツカを逃れてヤスレブに安んじた。回教史の一紀元はこれに劃されて、新しき布教の生面は、向後ヤスレブを本據として全アラビヤに布かれねばならぬ。

回教暦は古來、アラビヤに特異の發達を遂げた純然たる太陰暦であつて、一年を大小各六ケの十二ヶ月に分ち、大月は三十ケ日、小月は二十九ケ日で、一年は三百五十四日となる。而も、支那に發達した太陰暦の如き閏年の制がないので、暦年と四季との關係は常に一致してゐない。蓋し、アラビヤにありては、民の生業は農業を主とせず、専ら星辰に頼つて曠茫たる砂漠を渉る隊商にあつたので、勢ひその暦は暦日と星辰との關係の一定を主とせられねばならず、敢て季節と暦年との一致を必要とせなかつたのに因るものである。今、これを今日一般に行はれてゐるグレゴリオ太陽暦に換算せんとするならば、

先づ回曆紀年數を二・九七七倍して、その積を百分し、其の商を回曆紀年數より控除して、その差に六二一・五六九を加へればよい。二・九七七は百年間に生ずる兩曆日數の差で、六二一・五六九は回曆元年一月一日の西曆紀年數である。即ち回曆元年一月一日は西曆六百二十一年七月十五日に當るので、その少數五六九は西曆六百二十一年一月一日より同七月十五日に到る百九十六ケ日を表すものである。これを公式に示せば

$$\text{回曆紀年數} - \frac{\text{回曆紀年數} \times 2.977}{100} + 621.569 = \text{西曆紀年數}$$

答の少数は簡單に四捨五入して宜いのであるが、これを $0.596 \approx 196$ なる式と比例して算出すれば回曆紀年の一月一日が算出されたる西曆紀年の何月何日に當るかを知らることが出来る。

次に、西曆紀年を知つて回曆紀年を知らんには、先づ知れる西曆紀年數より六百二十二を控除し一・〇三〇七倍し、その積の少数二桁以下を切捨て、〇・四六を加へればよいことになる。但し、答に表れたる。少数は切捨て、その代りに一を加へねばならぬ。これを公式に示せば

$$(\text{西曆紀年數} - 622) \times 1.0307 + 0.46 + 1 = \text{回曆紀年數}$$

因に、ペルシヤに用ゐらるゝ回教曆は所謂エズデギルド曆 (Zezdegiird) であつて、その紀元元年は、回教曆より十年後れてゐるものであるから、回教紀年數から十を控除すれば知れる譯である。

第三章 ヘジラ以後

收

—經卷之劍—メザナ—バツルの聖戰—オードの聖戰—メツカ軍の來襲—メツカ巡禮—境外派使—ユダヤ族の誅滅—ムタの聖戰—メツカ占領—神聖外套の由來—アラフツト山上の訓誡—最後

餓えたる者には、先づ食を與へて後、教へねばならない。傲れる者には、道を説かん前に、先

づ懲さねばならない、回教の豫言者マホメツドの心中、已に左手^{コイラン}經典を捧げ、右手破邪の劍を揮ふて屍山血河の間に其の教線を擴げんとする決心は固められてゐた。此の手段たるや慈悲忍辱を主義とすべき筈の宗教者として、甚だ矛盾したる行爲であるべく、又た後年、基督教徒のマホメツドを誹議する第一攻撃點とはなつて居る所のものであるが、元來、宗教の目的は神を信仰するてふ形式をとつて人類の平和を保有し、幸福を増進せんとするものたるに外ならない。宛も國家が歴史的將た、互選的主權者の下に國民の福利を増進し、國威を發揚せんとする目的を有てると同一である。等しく其の對象は人にある。所詮、宗教と國家とは本義的同一物の異形式の二物である。其の異なるや、超自然の神は人的の主權主體となり、神の命令の成文律たる經典は人爲の法律規則となつた迄であつて、其の等しき目的に向つて進む手段方法は、時に應じ、處に隨つて種々雑多であることは勿論であつて、決して宗教なるが故に、其の手段や、必ず慈悲忍辱であり、平和的であらねばならぬ譯はなく、國家の手段たるが故に、兵戈戰闘が許されるべしと云ふ議論は成立せない。唯、吾等は古來幾多の歴史によつて、宗教と國家と二者の目的完成の手段方法に、前者は平和的にして、後者は交戰的なる區分があるかの如く自ら觀念してゐるに過ぎないのであつて、古來國家が消極的にも正を護るに武力を以てし、積極的に邪を破つて正を顯はすにも武力

を以てするが如く、宗教も亦、其の教義を擴むるに武力を以てする、必ずしも斥くべき手段ではない。謂んや、迫害日に逞しく、教義の衰滅は、直ちに人間極度の墮落なるを看取したる場合に當つて、武力を使用し得べき者は、當に武力を以て教勢の衰微を挽回し、更に一步進んで其の廣布に力めねばならない。大慈大悲の釋迦牟尼如來は、一方不輕菩薩行を説く傍、白檀王を語つてゐる。基督教はローマ王コンスタンチンの武力に光輝き、佛教も亦、阿育王の武威に榮えたのである。暖衣飽食せしめて撫育するも親の慈愛なれば、鞭打つて訓育するの亦、親の慈悲である。彼れマホメッドが回教の教祖として、唯一天神の道を説くに當つてや、その採るべき手段は他に幾らもあつた。釋尊の如く先づ小乘滅苦の法を説き漸進的に如來出世の本懷に説き及ぼすも一つの法であつたらうし、エスの如く、普遍の愛を眞額に奇蹟の用品を用ゐる方法もあつたらう。然し、彼れが釋尊の軌を辿るには、アラビヤの社會は餘りに混沌し、頽廢し、逼迫し過ぎてゐたし、エスの故智に倣ふには、奇蹟は元來彼れの斥くる所のものである。謂んや彼れは劍戟を以て迫られてゐる、劍戟を以て劍戟に對せずんば、神の教は擴まらず救主の用意は施されずして、彼れの同胞に滅んで仕舞ふであらう。彼れはいしくも、劍を執つて起つた。信仰は絶對の權威であり、武力は方ある最後の手段である。蓋し彼れの武力に倚つて起つや「鬼に金棒」の謂であら

う。何處に誹議すべき一點もない譯である。信ずるものは力である。教義の是非の如きは後日の論議であつて、布教手段の如何は寧ろ論外である。論ずべくんば、吾等は經卷と劍とを同時に必要ありと看取した彼れマホメッドの慧眼に感服し、加之もこれを同時に執り得た彼れを羨まん。

ヤスレブはメッカの北方、六日旅程の處、北東オード(Ohod)と南西ヘル山(Air)の間、三里許りの砂礫の平原に開かれた世界古代都市の一つであつて、市の大きさは、メッカの半分程と云ふからに、更に渺たる一小部落に過ぎないのである。此の市はメッカの商業に榮えたるに反し、商業よりは寧ろ農業に盛んに、地質は以然として砂礫土であり、水は又、鹹味を多量に含んでゐるが、四隣の平野は耕作に堪え、なつめしゆるの栽培は今日尙ほ盛んなるが如く、當時にあつて既に此の地は、アラビヤの食料庫となつてゐたものである。市はアマレ族(Amalak)の創始にかゝり、マホメッド亡命の當時はアウス家カヅラズ家(Khazir)の二に分れて、主長は兩家交迭して就職して居つた。此の兩家族は、既にアカバの誓約後「回教の擁護者」(An-ar-us-Islam)と回教史に記されたる如く、敬虔にして有力なるマホメッドの信徒と化つてゐるので、市の名ヤスレブは、彼等が隱約の間に改められて「豫言者の市」(Medinat-un-Nabi)と呼ばれ、轉じて今日の名メデナ(Me-

tiha)となつた。一般にメチナの四隣は、有勢なユダヤ人の殖民地が集落してゐる處で、カイヌカ
ー (Bani-Kainuka) ナヅヒル (Bani-Nadhir) クライザ (Bani-Kurayza) 等の種族は、就中、優勢であり
且つ回教史に交渉ある種族であつた。

メチナに據を構へたマホメツドの、先づ第一になさねばならぬ仕事は、地を相して禮拜堂を建
立することであり、一方にメチナの行政組織を確定して、四隣のユダヤ諸族と攻守同盟的の協約
を締結すべきことであつた。彼れは市の中央に空地を購入して、禮拜堂を建立し、且つ兼ねて己
れの住居とした。蓋し、之れは回教最初の禮拜堂であるが、其の結構は今日回教國の諸都市に
見るが如き壯麗宏大なものではなかつた。今日メチナにあるマホメツドの墳墓に東隣する禮拜堂
は其の偲を傳えたものであると云ふことである。彼れは又、略々メツカの行政組織に則る行政組
織案を提げ、市民を會して其の賛同を求め、市民中より十二人の委員 (Majlis) を任命して、各自分
擔して行政の衝に當らしめ、賦役と納税 (Taxes) との二大義務を承認させた。同時に、使を四隣の
ユダヤ諸族に派して、和親の協定をなし、力をメツカ征討のことに専らにした。斯る間に、オス
マン、ヤハールの徒は其の亡命地ナジャシを去つてメチナに來り加はつた。

斯くて、メチナの本據は成り、四隣ユダヤ諸族に對する後顧の慮は定められた。彼れは時々、

小部隊を派出して、コレイシユ家の隊商をその途に襲ふて、近く羽翼の完備するを期して、メツ
カ征討の大軍を催さんとするのであつた。

メツカにあつては、早くもマホメツドの勢、日に盛なるを知り、其の極まらざるに先つて征伐
すべく、アブジャハルを將として、一千の軍勢を整え、メチナ征討の途に進發せしめた。マホメ
ツドはメツカ軍の來襲を知つて、身親ら陣頭に立ち、三百十九人の小勢ながら、心は唯一天神の
信仰に固く、氣も亦従つて旺なるを指揮して、メチナの西南、海近ヤバツル (Badr) の谿谷を扼
して彼れを邀へ討つた。戰の結果は、勢の衆寡に因らず、常に氣の旺なるに利あり。メチナ軍の
志氣は、宗教的信念に揚がる。メツカの軍は、遂にメチナの軍に打ち敗かされて、散々の態
に敗走した。此の役、メチナ軍の失ふ戦士は僅かに十四、加之も敵の死傷、算なくアブジャハル
を首めとして、其の裨將七名は討たれ、捕虜及び戦利品も亦無數なり。實にマホメツドが聖戦劈
頭の大捷にして、回教徒の志氣は更に大いに昂る。蓋し、回教徒が向後幾十回の戦勝信念は、強
く此の役に證されたるものと見ることが出来る。回教徒の信する傳説に従へば、マホメツド、先
づ陣頭に立つて手に磔を拾ひ『敵の備へ先づ亂るべし。』と叫びて、磔を敵陣に投ぐるや、言の如
く敵陣は戰はざるに、先づ大いに亂れた。次いで、天神は天使ガブリエル (Gabriel) を將として、

先づ一千の援兵を送り、更に三千の天軍を赴援せしめ、大いにメッカ軍を追ひ撃つたのである。吾等は、斯る奇蹟を信せざるも、尙ほ能くメデナ軍の勝因を曉ることが出来る。時は、ヘジラ第二年、シムーンの時である。シムーン疾風は、東北より起つて西南に吹く時季である。所詮は、メッカ軍がシムーンの時疾風に向つて戦つたことになる。疾風、颯々の聲を揚げて砂礫を飛ばす時、これに向つて走つ者は、攻むるなくも尙ほ倒れん。謂んや我れは宗教上の信仰に固つたメデナ軍である。その大勝利は敢て彼の奇蹟を要せずして定まる譯である。

マホメッドは敢て潰走する敵を追ひ撃たずして、軍を纏めてメデナに凱旋し勇士の功を論じ賞を行ふて、戦利品の處分に關し宣言して曰ふ。「戦勝つて獲たるものは、皆悉く我等が共産とす。其の五分の一は他日聖戦の資に貯へ、他は神意に依る主將の處分に任す。」と。依つて彼れは其の五分の四を諸勇士に頒つた。蓋し、之れは他日、回教徒の戦利品處分法の軌範となつたものである。彼れは又、多くの捕虜の處分に付いて「戦濟むも吾等は見付け次第、敵を屠らざるべからず。されど降る者は厚く遇すべし。彼等は不日、教を聴く機を得べければ。」と乃ち多くの中、二名のみを死に處して軍陣の氣勢を揚げ、他は悉く赦し、且つ厚く遇して神の道を説いたのである。

メッカの敗兵は、敗走の途に結束して、兎も角も今一度メデナを襲ふて、せめてもの復讐をし

てメッカに回らんものと、馬首を回らして竊かにメデナに近付き、郊外のなつめじゆる植林を占領して、先づ辨當を開いて腹を拵へ、勇を鼓して市街に殺到せんとした。マホメッドは早くも之れを探り知つて、精銳を出して敵の虚を衝く。虚を衝かれたメッカ軍は匆遑、辨當を棄て、敗走した。この小戦を回教史は『辨當戦争』(Ghazwat-us-Sawit)と稱して偶像の徒の怯懦を笑つてゐる。

此の年、マホメッドの使徒アリ(Ali)は其の娘フワチャ(Fatima)を得て婚した。

翌ヘジラ第三年、メッカ軍は昨年敗北の恥を雪ぐべく、テハマ、キナラの援軍を合せて總勢三千、アブソフキアン親ら將として攻め來り、メデナの東北方オードの原にオード山を介んで陣を敷いた。マホメッドは精兵一千を親率して、出で、先づオード山を占領し、夜中竊かに山を下つて曉、敵の虚を衝いた。裨將ハムザは大いに力戦して敵を撃ち、敵勢先づ潰え、敵は息むなく一時後退して頽勢を收め整へ改めて勇を鼓して進み來る。メッカの婦は、陣中に進軍の歌を高唱して、その志氣を勵ます。既にして、兩軍は相衝き、偃月刀は交つて碧血は襟襟を染め、兩軍死傷相當。激戦は數時間に涉つて、オードの原は修羅場と化した。回教の猛將ハムザは力戦して敵に殉し、アリ、オマル、アブベクルは傷いた。マホメッドの旗下は亦、優勢なる敵に包圍せられて衛護の勇士は前後して仆れる。今はマホメッドさへ傷いて、豫言者の聖なる血は未だ二葉なる

回教の根を培はんとするやに見ゆる。教祖の急を見て勇敢なるアリは、傷を裏んで手兵を督し、僅かに教祖を重圍の危地に救ふて、オード山に退いた。アリは劔の鞘に水を満たし來りて、教祖の傷を淨め、後靜かに踞まづいて殘兵齊しく午の禱りを捧げた。

然し、メッカ軍も決して戦勝を誇ることは出来なかつた。彼れには既に退くメチナ軍を追ふて直ちに市街に侵入する餘勢を存してゐなかつた。彼れは傷者を扶けて軍をメッカに班し、更に傷夷を回復して再舉メチナを攻むるを策さねばならなかつたのである。要するに、此の役、兩軍の蒙つたる損害は、兩軍をして近く再び主力、相衝つ底の決戦を避けねばならなくした位の大いなるものであつた。

メッカ軍が退いて瘡痕の回復に全力を盡し得たに反して、メチナ軍は、そのみに専念なることが出来なかつた。砂漠遊牧の民は、屢々メチナ近郊を掠奪して回教徒に仇した。其都度メチナ軍は出で、夫れ等の不逞を誅さねばならなかつたし、ナヅヒル族は夫れ等、不逞の徒を糾合して反回教徒團結の盟主となり、回教徒がメッカ征討の後顧の慮となつてゐた。

ヘジラ第五年の十月 (Shawwal) メッカの瘡痕は回復されて總勢一萬、アブソフキアン親率の下に威武堂々進軍して再び來つてオードの原に陣し、決戦をメチナに挑んだ。メチナ軍の瘡痕は未

だ全く癒てゐない。マホメッドは老と幼と婦女子との外一切の男種を擧げて、壘を重ね濠を掘つて、只管、防守のことに力め、敢て野に出で決戦するを避け、一方、使を四隣盟族に遣して來り援けんことを求めた。然し、當初の親交盟約は一片の反古たるに過ぎない。彼等の中、既にナヅヒル族の如き、反回教徒團結の盟主となつてゐたではないか。クライザ族の如きは反つて氣脈を敵に通じて、メチナの東南を威嚇したのである。於是、メチナの運命、否、回教の運命は唯、神のみ知食しめすものとはなつた。敵の軍容は整備して、一舉メチナを屠らんとはする。然し、マホメッドの信仰はこの切逼したる命運の裡に處して些の憂色をだも現はさず、部下を激勵して守防を嚴かにし、只管、天神に祈禱を捧げてゐた。斯くて對陣十二日間、一夜豪雨沛然として到り、數日に涉つて晴れず。平野に陣したるメッカ軍は、敢て陣地を固守すれば怒浪濁水の餌とならねばならない。息むなくも彼等は陣を徹してメッカに退かねばならなかつた。天佑はメチナに幸して、マホメッドは一兵を損せずして強敵を退くることを得た。彼れは問罪の師を、背反の諸盟族に出さねばならぬ。守防の將士は征討の勇士と變じて、先づクライザ族を誅伐し、その悉くの男兒を虐殺し婦女は奴隸としてメチナに送り、更に轉じて、カイクカー族を討ち、ナヅヒル族を誅して、その反回教徒團結を覆した。カイクカー、ナヅヒル兩族の亡命者はカイクバルのガタハン

族に遁れ合して、報復の機を窺ふてゐたが、兎に角、こゝにメチナ附近のユダヤ諸族は討伐せられて、最初親和なる盟結は嫌ふべき結果に終決した譯である。が他の遊牧諸族は依然として隙に乗じて襲來し、メチナ近郊を掠めて、回教徒の平安を害する。誅伐の勢は、其の都度差し向けられねばならなかつた。

リヤーン族(Liyam)の主長の如きは、偽つてマホメッドに布教師の派遣を請ひ、その來るや捕へて或者は慘殺し、或者はこれを奴隸として、殊更にメツカに賣つた。マホメッドは怒つて親ら誅伐の勢を率ゐて到り誅し、其の族を全滅せしめたこと抔もあつた。

ハナハ族(Hanata)の主長ツママ(Thumama)の如きは常に屢々メチナを襲ふて回教徒を虐殺し其の婦女、家畜等を掠奪してゐた最も罪深き者であつたが、或時捕へられてマホメッドの許に送られ、一度、マホメッドの威嚴に打たるゝや、切に請ふて死罪を赦され敬虔なる教徒の一人となり歸つて其の族に布教し、ヤマンとメツカとの交通路を扼して、メツカのヤマン通商を斷つてメツカの衰頹を企てたりしたと云ふ出來事抔もあつた。

斯くの如き誅伐の師は、兩三年間に少くとも二十七回は催され、マホメッド親ら出で、誅したこともあり、又、其使徒をして誅伐せしめたこともあつた。斯くの如くにして、ヘザヅの地は等し

く回教は歸し回教の氣勢は漸次旭日昇天の微を催さんとするのであつた。

彼れマホメッドが開教十三年、メツカより亡命したる彼れの族は、春秋こゝに六年間、日に多忙なる征戰の間、屢々夢は故郷メツカの空に馳る。殊にカーバ神殿は、彼等の歴史を語る忘れ難ない場所である。彼等がメツカ復歸叶はずば、せめて今一度、生ある内にカーバ巡禮を果したいとの希望の切なることは、誰人の眉宇の間にも明かに讀まれてゐた。マホメッドはこれを看取して、メツカ巡禮の儀を允し、巡禮團を募集した。立ち處にして七百人の巡禮團は組織された。彼れはメチナ軍の大勢を率ゐて巡禮團の衛護に任じ、行き行きてメツカの郊外フダイバ(Hudayib)に次し使をナドワに遣し「我等の來るや戰はんが爲めにあらず。カーバ巡禮を許されんが爲めなり。元と、我等は祖を一つにするの同族、不幸にしてその信仰上の相違より戈を曠野に交へたりと雖も、等しくカーバ神殿に額かんと希ふ者なり。幸に吾等が提議を容れて速に和親の議を決せん。」と。於是、メツカも亦タキフ家の主長アラワ(Araw Ebn Masud)を大使として來り、フダイバに向後十ヶ年間の休戰を約し、且つ回教徒のカーバ巡禮の自由なることゝ、巡禮期間、三日間は自由にメツカの何處にてゝも滞在し得ることゝ、アラビヤ人の信仰は各自の自由意志に任せて、敢て布教上の武力干渉を中止すべきことゝを締結した。於是、回教徒が多年の希望は達せられ、

マホメッドは其の翌年も、亦二千人の教徒に連れてカーバに参拜した。回教徒はこれを『成就の巡禮』(Umrat-ul-Kaza)と云ふ。

ヘジラ第七年、マホメッドは巡禮の行を終へてメデナに歸り、特使を未だ回教に歸せざる四境の各主権者に遣して、回教徒たらんことを勧めた。エジプトの太守モカリカス(Mokarrakas)は勸教の特使を迎へて厚く遇し、修交の印として、種々珍奇なる寶物を托してマホメッドに贈り、其の二人の娘をも亦た贈つた。(その妹娘マリヤ(Mariyye)は殊にマホメッドの寵を受けた。)グレシヤ帝ヘラクリス(Heradius)又夙にメッカの商人よりマホメッドのことを聞知してゐたので、衝らす觸らすの所で特使を遇し、返書を齎らして歸り去らしめた。が然し、彼れがバストラの太守なるガツサン族の主長は甚だしく特使を冷遇し、部下の或者に命じてその歸途に要殺せしめた。マホメッドは翌るヘジラ第八年、この事を知つて直ちに問罪の師を起し、三千の精銳は威勢を張つてガツサンに向つて進發した。

問罪の師はエルサレムの東方三日旅程なる處、ムタ(Muta)に敵の主邦ビザンチン帝國の十萬の大軍と遇ひ搏つて、大いに奇捷を博したが、彼我兵力の差違は久しく交戦するの不利なるを曉つて、巧みに兵を收めてメデナに歸還した。此の役、ヤハール、サイド、アブヅラ(Abdallah Ebn Rawaha)は力闘して教に殉したが、ワリド(Khalid Ebn-ul-Walid)は善戦して歸來し、功を録されて『天神の聖劍の一〇』(Sif min soyuf-Allah)を賞揚された。

又、一方ベルシャ王クスルバルビス(Khusru Parviz)は勸教の特使を受けて大いに怒り、特使の目前に勸教書を寸裂して特使を追ひ返へした。彼れは、更にヤマンなる屬藩バヅハム王(Buziam)をして、殊更に非禮の使節をメデナに送らしめた。マホメッドはバヅハムの使節を受け、殊更に接見を一日延ばして空しく一夜を郊外に送らしめ、さて、翌日接見して告ぐるに『余は昨夜、ベルシャ王宮に於てクスルバルビス王が、その太子シルエ(Shirvan)に弑され、シルエは我が教に歸依して、ベルシャ王國は益々榮えんと祝福されたるを知り得たり。汝、速く歸りてバヅハムに告げ、速かに回教に歸すべきことを勸告せざるべからず。』と。使節は臆び驚き疑ひつゝ、速く馳せてヤマンに還り、王に其の旨を奉答した。既にして、使者ベルシャより來り、クスルバルビス王の計を報じ、太子シルエ即位の宣言を齎らすや、バヅハムは大いに怖れて直ちに回教に歸した。回教の教へは漸次、アラビヤ南部に擴まらんとするのである。

ヘジラ第七年第一月(Mahalam)マホメッドは一千四百の軍勢を親率して不逞のユダヤ族を決定的に誅伐すべく、彼等の根據カイバル(Kahbar)に向つた。カイバルは、メデナの北方四日旅程の

處にあり。市の中央には巍然たる主城カムス(Kams)聳え建ち、四圍は幾重にも堡塞を築き固めて、其の市名カイバル(城塞の謂)の示す如く實に不落の要塞であり、ガタハン族(Ghatan)を盟主としてナヅヒル、クライザ等曩に誅伐せられたユダヤ諸族の餘類が據つて、屢々輕騎を放つてメデナ近郊を掠めてゐたのである。マホメッドは城門に近づき、先づ勸降使を送つて平和の裡に事を纏めんとしたのであるが、彼等は之れを斥けて、直ちに戦闘を開始した。回教軍は勇奮一番、忽ちに一塞二壘を蹂躪して直ちに主城に迫り、更に奮躍して是れを陥れ、改宗と忠勤と朝貢とを誓はしめて多年の懸案は解決し、アラビヤのユダヤ教は亡んで仕舞つたのである。

翌ヘジラ第八年、一方、シリヤにガッサン問罪の師を出してゐる時に、メツカのコレイシユ家はフダイバ協約を反古にして回教徒なるクザール族(Kuzal)を討つたので、マホメッドは大いに怒りメツカ征討を決して、勢一萬を率ゐメデナを進發した。當時、マホメッドの勢は旭日昇天のその如く、日に盛んなるに比してメツカの勢力は又た昔日の如くでなかつたので、主長アブソヒヤンは身親ら出で、マホメッドの轅門に謝罪せんとしたが、マホメッドはこれを許さず、引見せずして追ひ歸へし、軍を進めてメツカを衝く。アブジャハルの遺兒イクリマ(Ikrima)オムミヤの兒サワン(Sawan)等少壯氣鋭の徒は、防戦大いに努めたが、既にメツカは昔日の勢威なく殊に

氣、全アラビヤを呑むマホメッドの一萬の大軍に攻められては儼なくも守りは潰えて、勝誇つたるメデナ軍は、怒濤の如くメツカ市街に侵入した。こゝに、回教徒は聖地メツカを復し、カーバ神殿は回教徒の外、何人にも參詣することを許さざる由は厳しく宣言せられ、マホメッドは壯嚴にして盛大なる凱旋式を舉行して、サフツ山頂(Safa)に立ち、改宗したるメツカ市民の誓約を受けた。「我等は眞の神の外、何物をも禮拜せず。我等は偷盜せず、姦淫せず、幼兒を殺さず。我等は嘘言せず。惡魔邪神を語らず。」コレイシユの族も亦た彼れの前に改宗して、この誓約をなしたのである。が、中に六人の男子と四人の女子は其の罪、殊に惡むべきものなるが故に、マホメッドの面前に引かれて嚴かに死刑を宣告せられたのであつたが、事實は内、一女は遁走し去り、三男一女のみ誅されて、三男二女は等しく他の者と共に赦されて回教徒となつたのである。

彼れは戦勝の餘威、更にメツカ附近の未だ回教に歸せざる諸族を討ち、回教に歸依せしむべく軍を四方に分派し、己れは主力を率ゐてハワジン(Hawazin)タキフの聯合軍を、メツカの東北十里許りの峽谷に撃破して長驅、直ちに其の根據タエを占領し、悉くを回教に歸服せしめてメデナに凱旋した。

翌、ヘジラ第九年は所謂「使節の歲」であつて、ヤマンのヒミエル族の五主長を首めとして、各

地方、各種族の各主長は、各々その使節を派して、回教改宗と、教祖マホメッド或は其の真正なる代理者の神意による命令は必ず服従すべきことゝを誓言した。メヂナ市民は是等、日に使し來る各地よりの使節を、厚く遇し、好く饗して歸らしめてゐた。

此の年の或る日の一事件として、こゝに吾等は後年、^{カッパ}教皇の寶器の一つとなつた『神聖外套』(Khirkai-sharif)の由來譚を有つ。モザイナ族(Mozayna)のカーブ(Kaab Ibn-Zuhair)は當時、有名なアラビヤの詩人であつた。彼れの家兄は既に敬虔なる回教徒であつたが、彼れは未だ回教の教へを耳にしたことなきサビ教徒の一人であつた。或る時、家兄に勧められて、竊かにメヂナに入り、禮拜堂に、今し多數の信徒に向つて淳々、神の道を説くマホメッドを見た。彼れ聲を上げて『豫言者よ、今此處にサビ教徒の詩人カーブを伴ひ來らば豫言者は彼れを許して其の徒に容れ得るや。』と叫んだ。マホメッドは少時、説教の口を止めて『來れ諾し』と答への終らざるにカーブは躍り出でて『我れこそ斯く云ふカーブなり。』と、多數の聽教者は、この無禮なるサビ教徒を懲すべく引立て去つて打ち伏せんと息卷いたが、マホメッドは寛大にこれを止め『我れは能く汝を許して我が教徒の一人に加ふべし』と宣す。カーブは三拜九禮して、詩の朗誦を許されんことを請ふた。マホメッドはそれを許す。カーブは朗々とその得意の詩を誦する。詩はカシダ(Kasida)

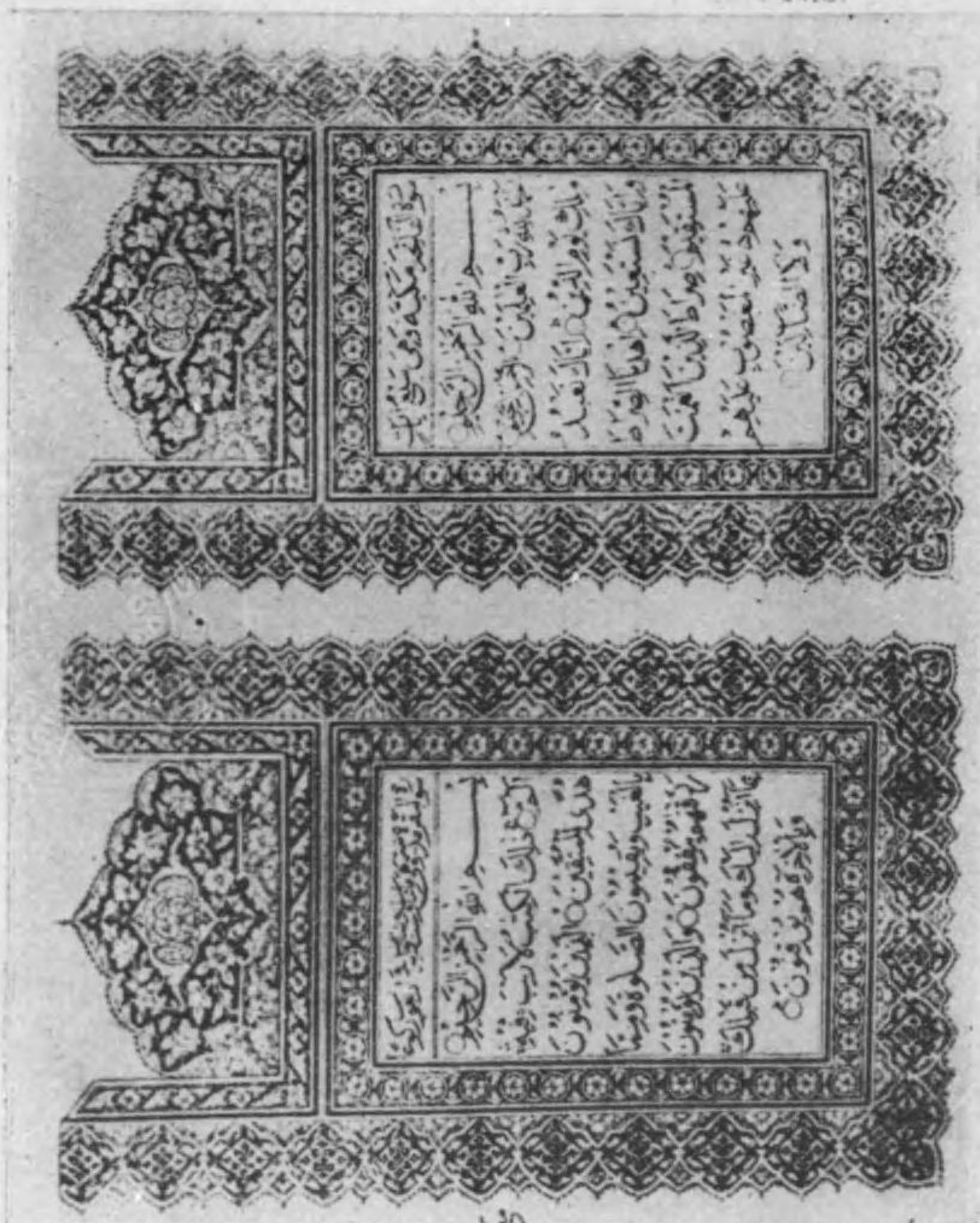
と云ふ長詩の一種であつて、當時、最も稱美されてゐた詩風の一つである。詩は彼れとその戀人スアドとの別れを歌つたものであるが、流石に著名なる一世の詩人が名詩である。些に一點淫靡の節なく、漂渺たる神韻は聞く者をして恍惚として神、遠く天涯に漂はしむ。加之も詩中、唯一天神の豫言者の神聖を歌つたものがある。『嗚呼、我が豫言者は此の世界に光明を與へたる炬火である。彼れは神の背信者を誅すべき神の聖なる劍を手にせり。』と歌ふ一段に到つて、マホメッドは感嘆、我れ知らず、己れの纏へる外套を脱いで詩人カーブを纏ふた。カーブはこの賜物を有難く拜領して、家人に傳へたが後、彼れの子孫はムワイヤ(Muawiyah)の切なる懇望を退け難く四萬金(dinham)を以て譲り渡した。更にこの『神聖外套』はオムミヤ朝、アッバス教皇朝(Abdasid)の寶庫を轉々して、現今はトルコ帝の寶物となつてゐる次第である。

ヘジラ第十年、使徒アリは遣はされてネジヅ、ヤマンの未だ教へを知らざる者供を説教すべく、各地に布教の雄辯を振ふて、その足跡を印する所に、回教の教線を押し擴めた。此處にマホメッド開教以來二十有三年にして、全アラビヤに唯一天神の信仰は擴まり、天神の道はその信者に依つて敬虔に實踐せられ、全アラビヤは統べて一となり、マホメッドはアラビヤ全人民の道の師として、同時に權威あるアラビヤ帝國の主權者となつた。(但し南部ネジヅのヤマナ市のみはモサイ

ラト (Mosci-Jama) が頑迷に割據して、當時尙未だ、回教に歸せず。後年、教皇アブベタルの時迄、時々出で、附近の回教徒を掠奪してゐた。(昔年、コレイシユ家の一マホメッドの出世した意義は明白にされ、その聖命は遂げられた譯である。彼れがアラビヤ統一、回教宣布の遺業を承けて更に廣くこれを世界に及ぼすは、その後繼者の務めであらねばならぬ。彼れまた、自己の聖命の成し遂げられてその最期の近づきたるを期するものありてか、彼れは此の年第十一月 (Dzulka'da) 廿五日、メヂナを發つてメツカに現世辭別の巡禮の途に上つた。従ふ信者、九萬と云ひ、又十四萬とも録せられてゐる。巡禮の式は滞りなく、聖く嚴かに濟んで、彼れは此の年、第十二月 (Dzul-Hidjra) 六日 (西紀六百三十二年三月七日) アラフワット山頂に、多數の信徒を集めて、聲明らかに最後の説教をなす。『吾が曹よ。我が語るを聴け。我れは今後再び此の處に御身等と對する機會を有たざるべし。此の月、此の日、總べては神聖にして御身等は、御身等の聖き神に見ゆるを得べし。記憶せよ、神は常に御身等に正しからんことを求め、常に御身等の生命と財産とを護り給ひ、相互に犯す所なからしめ給へることを。吾曹よ。御身等は、御身等の妻女の上に力あり、御身等の妻女は亦御身等の上に力あり、愛情と親切とを以て夫れを遇すべし。御身等は御身等に信託されたる凡べてに忠實にして不正をなすべからず。高利を貪ぼることは嚴かに禁止せらるゝ所

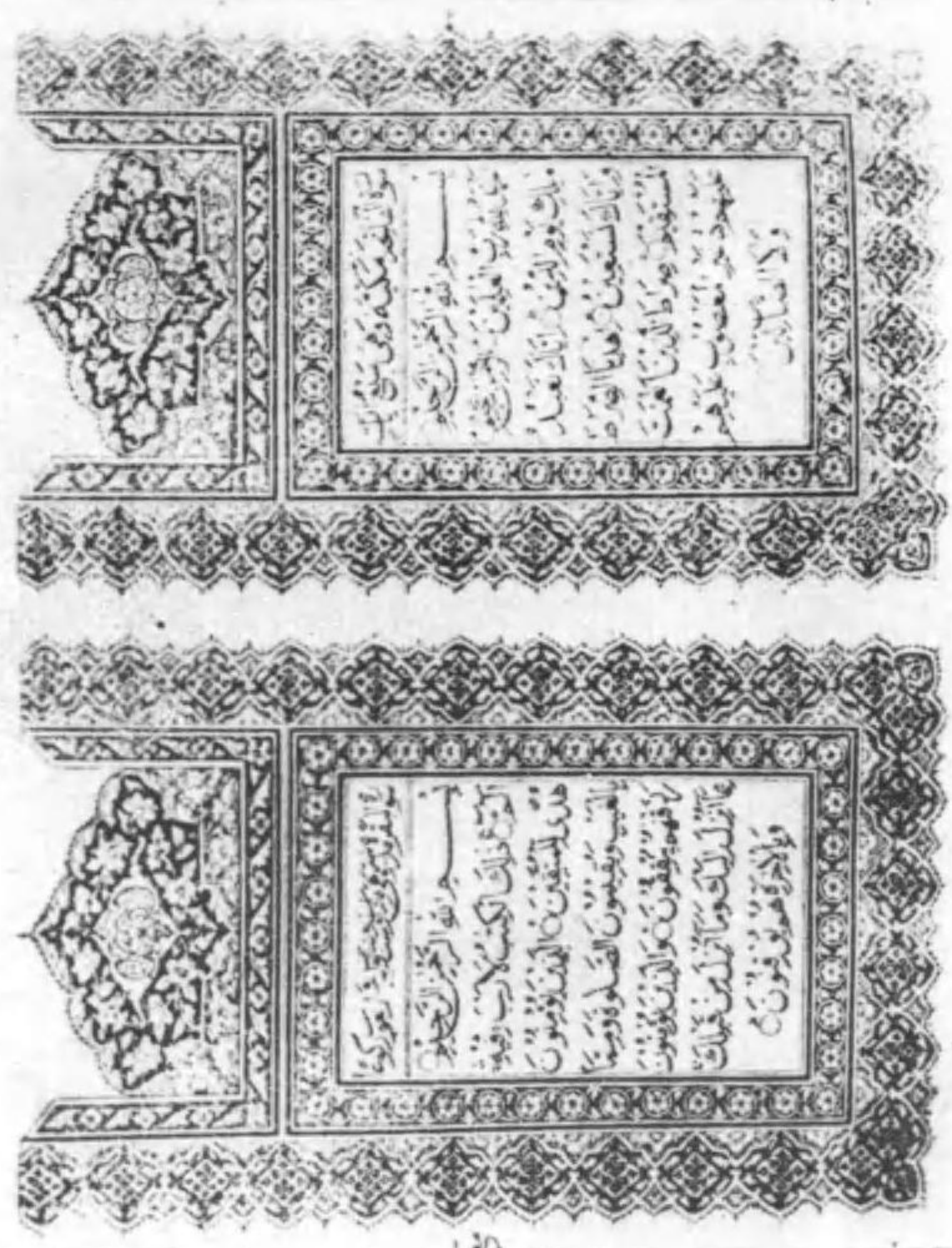
にして、負債者は只、元金のみを返却すべきこと、我が小父なるアブヅルムタリブの子アブバスのなせし所を例とせよ。血を以て血に復讐することは禁止せらるべく總て血の格闘を慎むべし。こは、我が従弟なるアブヅルムタリブの子ハリスの子ラビヤとその弑逆者とを鑑とすべし。而して、奴隸には衣食共に御身と等しきを給與し、彼等に許し難き過失ありとも、御身等も亦、神の僕たることを思ひ身に顧みて苛責すること勿れ。我が曹よ我が語を聴いて善く理解せよ。凡べての回教徒は、相互に親しき兄弟なることを知れりや。御身等は一大同胞の團體なり。御身等の所有は又た御身等の兄弟の所有なり。御身等兄弟の所有を犯すこと勿れ。吾曹よ。今日只今、此場にあらざる同胞に此の吾が語を傳へよ傳へられたる者亦、今日此場に聴く者の如く能く理解するを得べし。』と。此の語は今日廣く回教徒の口に恭しく誦されて彼等回教徒の座右の金言となり、彼等回教徒の心奥に深く刻まれて、その日常行爲の規準となつてゐるのである。マホメッドは更に天を仰いで兩手を高く捧げ、一しきり、神に感謝の禱りを上げて『神よ。我が使命は果たされたり。我が務めは盡されたり。』と。天に赫灼の太陽は輝けり。地は砂礫の平野、天際に連なる。自然の凡べては黒金に固められ、裡に魁偉の豫言者は神の聲を傳ふ。聖なる榮光はアラフワットを中心として全アラビヤを覆ふ。

彼れの最期は平靜であり泰安であつた。彼れは「辭別の巡禮」(Hajjat ul Wadaa)よりメチナに歸つて、彼れの肉身は病んだ。病みて、禮拜堂に近きアエス(Ayeth)の家に臥し、加之も、日々參堂して祈禱と禮拜とを怠らなかつた。最後の禮拜もアリ、ハザル(Fazl)の二甥に扶けられつゝ、敬虔なる禮拜、常の如く、終つて會衆に告げて曰ふ。「教徒等よ。汝等に對して我れに不正なることあらば告げよ。我れは直ちに詫びん。汝等に對し我れに借財せるあらば聞かん。我れは直ちに返却せん。」聲の下に一教徒は立ち上り彼れが、嘗てマホメッドの乞ふに任せて貧者に與へたる三金を返却されんことを述べた。マホメッドは直ちにそれを返済し、アリを顧みて「我れは次の世に恥んことを怖れて此の世に恥じたり」と云ひ、更に復、靜かに天神の聖明を默念し、數度の聖戰に仆れたる幾多の殉教の勇士の冥福を祈り、會衆の現世安穩、教勢の隆盛を禱つて、再び二甥に扶けられて病床に歸り臥し、彼れの肉身は、再び禮拜堂に現はるゝことなくして、後三日、ヘジラ第十一年の第三月十二日即ち西紀六百三十二年六月八日、彼れの肉身は大いに衰へて最期の呼氣に神の豫言者は遠く神の御下に歸つて仕舞つたのである。彼れの肉身は厚く禮拜堂の西に葬られ、其の墓は幾多殉教の勇士の墳墓に衛られて、春風秋雨一千年、今尙ほ、其の穹窿は高く嚴として存して居る。



世のもるたし示を(左)頁二第(右)頁一第の本通普

彼れの最期は平静であり泰安であつた。彼れは「辭別の巡禮」(Hajjat ul Wadaa)よりメヂナに歸つて、彼れの肉身は病んだ。病みて、禮拜堂に近きアエス(Ayash)の家に臥し、加之も、日々參堂して祈禱と禮拜とを怠らなかつた。最後の禮拜もアリ、ハザル(Hazal)の二甥に扶けられつゝ、敬虔なる禮拜、常の如く、終つて會衆に告げて曰ふ。「教徒等よ。汝等に對して我れに不正なることあらば告げよ。我れは直ちに詫びん。汝等に對し我れに借財せるあらば聞かん。我れは直ちに返却せん。」聲の下に一教徒は立ち上り彼れが、嘗てマホメッドの乞ふに任せて貧者に與へたる三金を返却されんことを述べた。マホメッドは直ちにそれを返濟し、アリを顧みて「我れは次の世に恥んことを怖れて此の世に恥じたり」と云ひ、更に復、靜かに天神の聖明を默念し、數度の聖戰に仆れたる幾多の殉教の勇士の冥福を祈り、會衆の現世安穩、教勢の隆盛を禱つて、再び二甥に扶けられて病床に歸り臥し、彼れの肉身は、再び禮拜堂に現はるゝことなくして、後三日、ヘジラ第十一年の第三月十二日即ち西紀六百三十二年六月八日、彼れの肉身は大いに衰へて最期の呼氣に神の豫言者は遠く神の御下に歸つて仕舞つたのである。彼れの肉身は厚く禮拜堂の西に葬られ、其の墓は幾多殉教の勇士の墳墓に衛られて、春風秋雨一千年、今尙ほ、其の穹窿は高く嚴として存して居る。



世のもるたし示を(左)頁二第(右)頁一第の本通普

教義篇

第四章 イスラム

— ラム— 經典コーラン— コーランの由来— コーランの總裁— 神諭の文字—

マホメツドの宗教をイスラム(Islam)と云ふ。歐米人は其の教祖の名に因んでマホメツド教(Religion of Mahommed)と云ひ、吾々は回教と呼んで居る。回教は回々教の略で、回々教は支那人が西域回々人の宗教と云ふ謂で、古く唐時代頃から用ゐられて居たイスラムの呼稱である。彼等回教徒間では、基督教がエス、キリストの宗教なるが故に其名は教祖の名に因り、ゾロアルターの宗教なるが故にゾロアルター教と云ひ、佛陀釋尊の教なるが故に佛教と稱され、サビの教なるが故にサビ教と呼ばれてゐるのに、獨り我宗教のみは唯一至上なる眞の天神の教なるが故に、敢て教祖マホメツドの名に因らずイスラムと稱せるは、實に以て他に誇るに足ると思爲してゐると云ふ工合で、彼等の宗教の名、イスラムそれ自身が業に既に神聖なるものとなつてゐるのである。イスラムとはサラマ(salama)即ち、安穩なりとか義務を盡したりとか平和の支持者に依憑する

とかの謂を有つ語から出た名詞であつて、平和、安全、救済、表敬等を意味し、絶對的に神意に服従する杯と云ふ意味はないが、正義の爲めに激勵努力すると云ふ意味を含んでゐるのである。而して、彼等が所謂神聖不犯なるイスラムの名稱に表現せらるゝ、彼等の宗教は如何なるものであるか、吾等は其の經典コーラン(Koran)を研究し考慮して、(一)絶對不可犯の權力者にして宇宙萬物の創造主、唯一至上無始無終の天神を信仰すること、(二)人間、相互の慈惠、親和、(三)煩惱の禁喝、(四)恩を感じ、徳に報ゆること、(五)來世を信することとて五つの思想の上に立脚して、それは成立つて居るものなることを知り得るのである。經典コーランは其「牝犢章第二」に「此書を疑ふこと勿れ。神は此の書を下し給ひ、神を信じ相互に親切慈善にして、來世(Hereafter)を信する者を導かせ給ふ。神に見えん道はこの内に記さる。」と約言してゐる如く、如上五つの思想を根柢として築き上げられたる回教々義は實にその一切を、コーランに記載してある譯である。さるに依つてか、回教徒の經典コーランに對するは、宛も彼の偶像の徒が偶像崇拜に於けるが如く、コーラン即ち天神なるかの如き觀を爲す。彼等は確くコーランが神によつて記され、神意に依つて天使ガブリエル(Gabriel)がマホメッドに賜ふたものであると信じてゐる。彼等は黄金寶玉を以てそれを壯嚴にし讀誦せんとするや、齋戒し沐浴し、少くとも兩手を淨め口を嗽いで、敬虔に

禮拜して後でなければ卷を展べない。コーランの表紙には必ず「淨めざるものをして觸れしむる勿れ」と書いてある。彼等は決して自己の帶より下には是れを置くことなく、携ふるや、之を目八分に捧げる。彼等は經卷を接吻することに依つて誓ひ、軍陣に携行して戰勝の護符と思爲し、旌旗に銘して軍容を光嚴す。彼等は人智の決し得べからざる重大の事件に遭遇するや、敬虔なる祈禱の後、無意識にこれを開いて最初に目に留まつた文字を以て吉凶を判斷する。文字の意義を解せざる無智の者も、その綴字の形象を見て繪畫的に思想し、等しく重大事の吉凶を判斷する。彼等が信じ傳ふる所によれば、實にコーランは無始の始より、神が常に過去を録し未來の識を記述する天界の廣大無邊なる大机の上にて、天神自ら筆を執つて書き綴り給ふたものであつて、第九月(Ramathan)の「力の夜」一括して、天使ガブリエルをして最低の天界迄持ち運ばしめ置き、爾後、メッカに於て、メデナに於て、時に應じ機に隨つて一章宛、マホメッドに賜ふたものであつて、其の經卷は悉く高貴なる絹を以て裝釘してあり、黄金と天界の寶石とを以て壯嚴してあつたと云ふので、一番最初に傳達された章は「筆管章第六十八」なりとも云はれ又、「被覆章第七十四」も云はれてゐるが、一般には「癡血章第九十六」の最初の五節「神の御名に依つて讀め。神は萬物を創造し給へり。至仁至慈なる神に讀まん。神は運筆の術を教へ、未だ吾等の知らざるものを教へ

給へり。』であるご信じられてゐる。コーラン神授説に就いては、マホメッド自身も屢々『神の作り給ひしもの』神に賜ひしもの』と云つてゐるし、コーランの内にもこの文言を發見するのであるが、所詮、それは印度教のマス法典、彼斯のゼンダベスタ、エジプトのメネス法典將た又、モーゼの五書が等しく皆、神與のものなりと云ふと同じく、所謂宗教的の所説であるべく、マホメッド自身も亦それを宣言するはギリシヤのリカルゴスがスバルタを討つて、永くそを服従せしめんが爲めに一つの法律を制定し、揚言してアポロ神の賜なりとした類であるべくして、事實、吾等はコーランを以てマホメッドの道德思想の大なる結晶と見、マホメッドを以てコーランの著述者とするのである。

然り、マホメッドはコーランの著者である。然し、彼れはコーランの筆者ではなかつたらしく又、編纂者でもないらしい。彼れは宗教的經驗に最も多く富んだ豫言者として、凝念し默思して、彼れが心奥に現はれ出づる思想所謂天啓は彼れの口唇を漏れて聖語となり、聖語は常侍の祐筆の者に依つて筆記せられたことは、彼が使徒等の傳記によつて明かである。此の筆記は信徒に示され、信徒等は更に複寫して恭しく所藏したものであらう。或は複寫以上に暗記されたであらう。斯くの如くにして、マホメッドが豫言者としての二十三年間、或はメッカに或はメヂナに或は聖

戰軍陣の間に説いた宗教的經驗、道德的理想將た彼れ自身の行動が記録され、後に類纂されて今日傳ふるコーランとなつたものである。

コーランは佛敎の經典に見るが如く、決して組織的に編纂されたものではないが（遡つてマホメッドの隨時隨處に説いた各章も、決して組織的首尾一貫する用意あつてなされたものでないらしく、彼れが教義の主要部分、喩へば天神を説く邊は部分的に各章に涉つてなされたり又、同一事が數章に重複してゐたりして甚だしく不統一な斷片的のものとなつてゐる。）その今日の如きコーラン一卷をなすに當つては、其の編纂に多少考慮された痕を看取することが出来るし、更に散逸せる各章を蒐集するに大なる努力を要したことは明かに察せられるのである。當初、マホメッドは隨時隨處に説教したもの、後日、一括して經典一部を編纂する意志があつたか否かは疑問であり、寧ろそんな意志はなかつたものと判断されるのであつて、彼れが逝いた時、彼れの手元には夫れ等の筆記は殆んど一つも無かつたものらしい。夫れを蒐集してコーラン一部を成したものは彼れの後繼者アブベクルであるごせらるゝのである。

アブベクルは敎祖の歿後、其の衣鉢を繼いで敎皇として全アラビヤを號令し、全敎徒に神の道を勸めたものであるが、彼れは己れの當然なる職務として經典編纂の事を決心し、其の敎徒に令

して各自所蔵する教祖の教記を提出せしめ、尙ほ各自が暗記せるものをも筆録して百十四箇の断片的説教録を成し、それを一括して遂にコーラン一編に編み上げたのである。彼れがこの編纂をなすに當つては、實に敬恭慎誠、一字一句も教祖の原意原文を改竄せざる様、その筆録なきものは、息むを得ず自ら筆を執つて暗記せる信者が暗誦するまゝを録したが、苟くも筆録あるものはその棕櫚の葉に記されたものたるを、或は皮革杯に記されたものごとを論せず、その儘、一編に綴り込んで、然る可く壯嚴に装釘して回教々義の原典と宣し、これをマホメッドの寡婦の一人、オマルの娘なるハフサ(Hafsa)に致し、その保管方を依頼したものであつた。従つて其の編纂の様式も、何等其の内容を考慮して組織的に鹽梅された痕なく、唯教祖遺文の長短によつて長より漸次短なるものに順序づけて編輯されたものたることが知れる。又、配列の順序は時間的に用意されて居ず、初めてメッカに説教されたりと云はる、『凝血章』の如きが第九十六章目に配されてゐたり、最後のものであると云はれてゐる『無罪宣告章』が第九章目に記されてゐたりしてゐて、甚だしく不整一なものになつてゐる。然し、教義の典據は定められたのである。總べての信者は此原典を複寫して、各自所蔵依據の經典とせねばならないのであるが、事實は意外にも多少宛、異つたコーランが各地方毎に讀誦されてゐたらしい。即ち、ヘジラ第三十年、オスマン教皇の時

に此意外なる事實が発見された。使徒ムサ(Abu Musa al Ashari)所傳と云ふイラのコーランと、使徒アシヤリ(Macha Ebn Ashari)所傳のシリヤのコーランとにある兩者の相違が発見され、延いて各地のコーランを比較對照してみると、甚だしく原典に相違してゐることが知れたので、オスマン教皇は教團の奇怪事なりと驚駭し、直ちに齋戒して、ハフサに請ふて其保管せるアブベクル編纂原典を複寫し、それを各地に配布し、其寫本原典の落手と同時に舊異本を燒棄することを命じた。此コーラン歸一事業はサム(Zaid Ebn Thabet)・バイヌ(Abdullah Ebn Zohair)・ナス(Abdulrahman Ebn al-Hareth)・アス(Zaid Ebn al As)等數人の碩學智識の輔佐の下に成つたもので、其の字句、内容共に修正されてアブベクル編纂原典と相違してゐる箇所があるのであるが、原典は原典として依然、神聖視し、新統一本は又、それとして實修上に依憑すべきものと敬はれたのである。事實、コーランに限らず經典の改竄修正と云ふことはあり得べきことであり、且つあらねばならぬことであつて、コーランの修正もオスマン教皇の歸一事業に初まつた譯でなく、マホメッドの生存當時、未だ彼れの教義が纏つた經典となつてゐない以前に、既に此ことが屢々あつたことと信せられるのである。使徒(回教)使徒杯と云ふ呼稱は決してないのであるが余は便宜上、普通一般の信者と、彼に常侍して布教のことに専心した特別なる信者とを區別する爲に、殊更に斯かる

名稱を用ゐることとする。マスド (Abdullah Ebn Masud) の傳記を見ると、彼れマスドは一日、マホメッドから其教義の數節を口授されて筆記した。翌日マホメッドが命ずる儘に、昨日の筆記を見せた所が、マホメッドは其筆記の大部分を抹殺して仕舞つたと云ふ記事がある。如何なる教義が抹殺されたものか、其處迄は分らないが、兎に角、マホメッド自身が意に満たざるものあつて抹殺したのに相違なく、彼が經典改竄の偏は、其生時既に作られたと見ることが出来るのである。コーラン『悔恨章』に「若しアダムの子等が二つの黄金の川を有つならば彼等は更に三つを有たんことを希はん。彼等三つを有たば復た更に四つを有たんことを望むべし。斯くてアダムの子等は満足すべき何物をも有つことなかるべし。神は何物をも與へずして悔恨せさせ給へり。」と云ふ一節があつたと稱され、又現今此一節があるかの如く暗誦されてゐるのであるが、事實は斯る句節は『悔恨章』にも、コーランの何處にも無いので、明かにこは何れの時にか改竄されて削除されたものであると云ふことが解かる。如上の二例は、コーランの改訂が、其句節を削除すると同時に、その謂義をも修除したものであることを示すものであるが、尙ほこの外に修辭上或は他の理由からして辭句は削除したが、其除かれたる句章の教義は保存され服膺されてゐると云ふ改訂と、その反對に、辭句は其のまま、貽してあるが、宗義上その辭句の解釋を文字通りにせずして違つた解

釋をしてゐる箇所や、全々無意義のものとしてある箇所杯がある。オマルがマホメッドから口授されたものとして今尙ほ暗誦されてゐる「男にもせよ女にもせよ、若し彼等姦淫するならば、汝等は彼等に磔を打たざるべからず。こは神の命じ給ふ命令なればなり。」杯云ふ句節が、何時の程にかコーランからは削除されてゐるが、其教義は依然として力あり、教徒の間に服膺されてゐる杯は、其改訂の様、前者のそれであるべく後者の例に入るべき改訂は、コーラン全章百十四の内六十七ヶ章に涉つて二百二十五ヶ節もある事が知られてゐる。祈禱禮拜の場合にはエルサレムの方向に向つてすべしと明記されたものはあつても、事實は他の節に名記してあるものに據つて、メッカの方向に向つて祈禱し禮拜されてゐるし、五ヶ信條の一つとして體行されてゐる斷食の修行も、コーランの一節に明記されてゐる通り、古きアラビヤの習慣通りに行はれてはゐないし、偶像に對する禁厭の教も、其の文字通りを離れて異つた意味に解釋されてゐる事杯は即ち夫れである。是等經典解釋の異同は後章、時に當り、要に應じて大略ながら述ぶるべきを期して、今日行はれてゐるコーランに七種類ある。それはメチナ第一本と云ひ、メチナ第二本と云ひ、メッカ本、シリヤ本、バストラ本、クハ本、普通本と云ふのであるが、是等は皆、其の昔オスマンの歸一原本が、配布された各地方地方に固定したもので、七種相互の間には綴字上に節數に各自異同がある

が、其の各章の順序は依然としてアブベクルが編纂當時のものに據り、辭句文言はオスマンの歸一原本に據つたもので變りはないのである。是等七本の綴字上の異同は其の理由、明かなるものがあるので、元來アラビヤ語の綴字法は母韻を表はす音標を略す。それが今日の如く一定した母韻の固定性が明かにされてゐなかつた時代のことゝて、一度母音符省略の法に依つて記された文言は後日、記者其人でなければ一寸判讀し兼ねたものであつた。それで精確に讀誦する必要上、讀經者(Mokris)と云ふ一種の專業者が出來て、その讀經者がコーランの讀誦をし、又、求めに應じてコーラン讀誦上必要な各種の符號を添附記入してゐたものである。然し此職業的なる讀誦者と雖も各人各様各々の讀み癖もあり、又、發音の異同もあつた譯で、同一コーランも各地方々々に依て讀方に多少宛異同があつたのである。それを後年、母韻符をも明確に記入するに當つて、如上七種のコーランが各々多少宛の異同を生じた譯なので、今日吾等がマホメッドの羅馬綴りを見るにしても Mahommed Mohammed Mahommed Mohamet; 等、多少の異同を見るのであつて、これは各々の譯者が各々その準據した原本の綴りの相違に依るので、各自各様とも正なるものなるべく、決して正と謬とを分ち得る性質のものでないのである。オスマンの歸一原典に據るとマホメッドは Minhd (アラビヤ文字では Min-ha-min-dal) と綴らねばならぬことになる譯である。

遮莫、回教經典コーランは、其信徒が確く信するが如く、神より授かつたものでもなければ、尙ほ更に神が書いたものでもない。記し貽されたるものは、教祖マホメッドの思想であり、先づ筆を執つて記したる者はその信者であり、それを一括して一部の大冊としたものは、第一代の教皇アブベクルであり、更に多少の修正を施して歸一原典を示したものは、第三代の教皇オスマンであつて、現時はオスマンのそれに據つた七種のコーランが行はれてゐると云ふ次第である。

次に吾等はコーランの體裁、將た内容を知る必要がある。内容は回教々義そのものであつて、余が本篇に述べんとするものである。

抑々、コーランと云ふ語はユダヤ教のカラー(Kahin)聖書)と等しく、動詞カラア(Kana)から出た名詞である。カラアは『讀む』或は『集める』と云ふ意で、従つてコーランは『讀まねばならぬもの』或は『斷片を寄せ集めたもの』と云ふ謂になる。其の回教經典の呼稱となつたのは何も教祖マホメッドが『我が説教録をコーランと云ふ。』と斷定した譯でなく、後世の信者が長き時代の間、自然に呼び倣して、今日では直ちに回教經典を指す固有名詞となつたと云ふに過ぎないので、其の呼稱の由來杯も宗教的に莊重に判するならば『讀まねばならぬもの』と云ふ方が眞らしいし、又、回教徒は左様に解釋して居り、コーランの呼稱は經典全部を指すのみならず其の一章一節等

の短なるものを等しくコーランと呼んでゐる點等からみて『寄せ集めたもの』と云ふ意味は排斥されるべくあるが、前述した如く、事實、コーランはアブベクルによつて寄せ集め編纂されたものであり、且つ又、余は多くの事物に對するアラビヤ人の命名心理から考察して、或は『寄せ集めたもの』と云ふ方が正しくはないかと思つてゐる。孰れにせよ事實、コーランはアブベクルによつて『寄せ集められたもの』であり、回教徒の『讀まねばならぬもの』である。(因に、アルコーラン(al-Koran)と呼ぶ人もあるがアルと云ふのはアラビヤ語の定冠詞なのであるから只單にコーランと呼ぶ方が正しい。)

回教經典はコーランと呼ばれる、外、ホルカンとも呼ばれることがある。ホルカン(Horkan)は『分つ』とか『明かにする』とか云ふ意味の動詞ハラカ(halaka)から轉じたものらしく、即ち『章節を分つたもの』とか『神と悪魔とを明かに區別したもの』とか云ふ義らしい。(この兩者に關しても、余は彼等の命名心理が理論的思索的でなくして、常に實際的直感的である所から前者であるべく思つてゐる。)此の外又、モシヤフ(Moshaf)書卷(Kitab)書籍(Dikir)訓誡等と呼ばれることもある。

コーランは長短異なる百十四章から成つてゐて、章のことをスラ(Sura)と呼んで居る。スラは

『秩序』『順序』『軍人の階級』『建造物の一部分』等を意味する名詞で複數形は(Suratin)である。この百十四の章は前にも述べた通り、決して内容を考慮し、將た。説示の時日を標準とした組織的用意の下に編輯されたものでなく、唯僅かに長短に依つて順次一括された迄のもので、各章の名稱も本來は第一章第二章と稱されることなく、其章中の主要語或は章頭の文字若くは語、その章に述べられた説話の命題をとつて章の名としてゐるので、第二番目の章に赤毛の牝犢の説話があると云ふので『牝犢章』と呼び、第二十八番目の章にモーゼのソアイブ旅行談が出てゐるのでそれを『記談章』と呼んだり、第三十番目の章の頭がキリシヤ(Rum)と云ふ字であるから『希臘章』第五十番目の章が K(Kitab)の略字に初まるから『K章』第百十一番目の章の冒頭にアブラヘブと云ふ人名があるので其章を『アブラヘブ章』と云つたり、第百六番目の章中の重要な語はコレイシユであると云ふので『コレイシユ章』と呼ぶと云ふ鹽梅である。然し此章の名も決して一定されてゐると云ふのではないので、各宗派に依て多くは五十以上も、少くても十一二は互に異つた名稱を呼んでゐるので、異宗派間の之に關する談話には多少の不便が伴はふ、それで近來はコーランが初めてラテン譯された時に、譯者が煩雜な殊異な呼稱を一切棄て、單に第一章第二章と呼んだのに倣つて、章の順序に依つて第何章と呼ぶことが多く、又た幸に各派ともその據る所のコーランがメ

ツカ本、バスラ本と違つて居ても、その章の順序に不同がないのであるから、これによるとこの種の談話には不便がない譯である。(余は本書に於て必要により提示する章名を以上の兩者を併せて論語の『學而第一』『堯曰第二十』の例に倣つて『婦人章第四』『光明章第二十四』杯と呼んでみた。)

又、全篇百十四ヶ章をその啓示した地に依つて類別してみると、メッカで啓示されたものと、メヂナで説き諭されたものと、半分はメッカ半分はメヂナで示されたものと『無花果章第九十五』『曉章百十三』『人間章第十四』等十ヶ章、其の啓示の地が不明なるものとなる。メヂナ、メッカに涉つて啓示されたものは『牝犢章第二』の一ヶ章丈であるが、メッカで啓示されたものは數に於て最も多く『序章第一』を初めとして『三途の川章(al Araf)第七』『豫言者章第二十七』『象章百五』等八十四ヶ章を數へ、残り『食卓章第五』『戰利品章第八』『禁止章第六十六』等の十九ヶ章は即ちメヂナで啓示されたものと稱されてゐるのである。此の區別は根本的にコーランを研究するに重要なもので、之れと併んでは今一つ、各章啓示の時日上の區別が大いに重要なのであるが、餘りに煩多に流るゝ嫌があるので本書にはその記述を省く。

各章は又、長短不同の數節に分たれる。この節の^{アヤ}をアヤ(Ayat)と云ふ。アヤは『記號』或は『不可思議なるもの』と云ふ謂で、即ち神の聖訓、裁斷、命令等は到底凡夫の思議すべからざるものと

して啓示されるから、アヤと云ふのであると回教徒は教へて呉れる。節も亦、章の如く各節毎に特別の名稱があるのであるが、節の區分は章の如く一定して居らず、メヂナ第一本では六千節であるのが、同第二本では六千二百四節に分れて居り、メッカ本では六千二百九節、バスラ本はメヂナ第二本と同數であるが、普通本は六千二百二十五節、シリヤ本は六千二百二十六節、クハ本は一番多數に分れてゐて六千二百三十六節と云ふ工合で、節の名稱の如きは各本各宗派に依つて各別不同で、二三の例を擧げるだに煩に堪えない。

節の區分に七本六通りの差違はあるが、コーランの字數と語數とは違ひがない。回教徒はユダヤ教徒以上に宗教上の或る迷信から、コーランの字數と語數を數へ上げたもので、コーランの字數は實に三十二萬三千三十三文字あり、その語數は七萬七千六百三十九語あると云つてゐる。又特別な計算の結果によると三十三萬百十三文字、九萬九千四百六十四語となつてゐるが、孰れにせよ吾等には些して重要なことでもない。南洋の回教徒は前者の計數を信じてゐる。

要するに、コーランは其の分量に於て三十三萬文字内外のものである、之を羅馬綴に直してカピタル活字で組んでみても、四六版で五百頁そこ／＼のものにしかならないのであるが、之をアラビア文字のものに見れば、彼等は殊更に勇健に莊重に六分角大の文字で書き連ねるので、コー

ラン全部は随分な量になる。それで彼等は略ぼ同一分量のもの六十巻に分冊する。それを彼等はヒズブ(Hizb) 複数は Ahizab)と呼んでゐる。斯く六十巻に略等分して置くに、捧持讀誦に便利である云ふ匠好である。更に又、この巻を各々四等分することもある。然し今日實用向きには普通巻の二倍の分量にして、コーラン全部を三十冊に略等分する。之れをホズ(Hoz) 複数は Ajza)と稱し、更に便誼上各冊を各々四等分することもあるのである。で、高格の寺院禮拜堂、皇帝とか貴族の墓塋、特別に嚴肅なる宗教儀式の場合等には、三十人の讀經僧が參列して、各僧は同時に各自所割の一冊を敬虔に光嚴に聲高らかに讀誦して、一時にコーラン全部を讀誦し終るのである。

各章の冒頭は必ず「唯一至上天神に代つて」と云ふ神聖なる一句(Bismillah)が記され、本文は行を改めて其の下に記されてゐるのであるが、唯一ヶ章「無罪宣告章第九」のみには、この神聖なる一句が記されてない。其理由に就ては多くの解釋が區々であるが、此の章下に種々諸々の罪の事が記述されてあるので、罪坏と云ふ不淨なことは神の語にあらすしてマホメッド彼れ自身の語であるからだ云ふ解釋が、最も穩當であるらしい。基督教徒の回教研究者は基督教徒らしくこれを解釋して、此の章はマホメッドが最後の啓示であり、其の時はマホメッド既に人にあらず、自ら神或は神の兒たる自覺があつたから、敢て「唯一至上天神に代つて」と斷る必要がなかつたので

あると説明してゐるが、マホメッドは基督教の三位一體説杯を最も非難したものであり、インドの思想に見るが如き、神人同格など云ふ思想は寸毫も有つてゐなかつたことが確められてゐるので、彼れの見た神は絶対に神であり、豫言者と雖も人たる以上到底神となることは出来ないものであると思つて居たので、この解釋は聞くに足らない。その他、多くのコーラン研究者が各人各種の解釋をなしてゐるのであるが、事實は思はざる所に因して、當初の筆記者が不注意に遺脱してゐたものを後代世々の寫經者が何等か意識的に記してないものであるかの如く思爲し、更にその不可解を解釋せんが無めに無用に時間と智力とを空費しつゝあるのであるかも知量るべからずである。斯の種、所謂難解の詮索がコーラン中に尙ほ一つある。

コーラン百十四ヶ章の内、其の本文冒頭に A L M (arif-lam-minj) とか A L M R (arif-lam-min-ra) とか C H Y A S (cha-ha-ya-arif-shim) とか Y S (ya-shod) K (kaif) とか其の他十二種許り、單獨にアラビア文字が書き放されあるのが二十九ヶ章ある。回教徒はこれ即ちコーランの神祕なる所以の一つである云はず顔に、夫れ等の不思議なる文字を何事か無上に有難い咒文でもあるかの如くに取扱つてゐて、果して夫れ等の文字が何を意味するや、研究し解釋し説明しやう杯云ふ所謂謀反心を有つてゐないのであるが、異教徒には唯だ神祕なものとして丈では満足が出来ないので、

異教徒の學者達は普通人から嘲はれつゝも、又、回教徒からは咀はれつゝもこの解釋に力めてゐるので、之れ亦、各人各様の説明を試みてゐる。一例をALMの解釋にとつてみれば、この所謂神祕なる三字は『牝犢章第二』の劈頭に記されてあるもので、ALMは即ち Ana li minni (我に我より) の略字であつて、宇宙間總ての物は悉く我がものであつて、而して我れより汝等凡べてに授與するものであるとふ意であると甚だしく思索的に説明する者がある傍、これは Ana Allah alim (我は全智の神なり) の略字で、即ちAは第一語の頭字で、Lは第二語の央の字、Mは第三語の終りの字であり、其の意は神が福音を啓示するに當つて最も普通なる前唱であると云ふ一般的な説明もある。又、非常に理窟を捏ね廻して、Aは咽喉音で即ち物の始を表はし、Lは舌音で即ち物の始より終に移る過程を示し、Mは唇音で即ち物の終を意味する。因つて案ずるにこの三文字は一切物の一切を表はすのであるとも解釋されてゐるし、又、この神祕は何程の事もなく、唯マホメッドの斷り書きである Anar li Mohamud (マホメッドが啓示されたるまゝ) の略字たるに止まる抔と人嫌はれを云ふてゐる學者もある。『K章第五十』の冒頭の單獨なるK唯だ一字に就てさへ、カーフ山の略字なりと云ひ、又た Kala el amir (物質は判決せらる) の略字なりとも説明されてゐる有様で、二十九ヶ章に涉つて十七種の斯種所謂神祕なる文字の解釋は決定的に説明

し盡くされたものはない。唯『YS章第三十四』のYSの二文字は Ya israhim (噫、人よ) の略字であると云ふ説が回教徒間で有難く承認されてゐて、彼等回教徒はこの章を以てコーランの中心、眼目なりとなし、この章は人間斷末魔の苦悶を和げ得る神力あるものと信じて、今しも最期の息を引きとらんとする病者の枕頭に、この章を讀誦することにしてゐる。

コーランの用語は、其の當時マホメッド等コレイシユ一族の間に日常使用されてゐたアラビヤ語の一方言であるらしい。尤も中には多少、他種族の方言も混り込んでゐるやうが大體に於て悉く云へるので、其の語は、一度記されてコーラン一編となるに及んで、全アラビヤの基準語となり、漸次他種族の諸方言を攝取し、調和し、將に驅逐して全アラビヤの言葉となつたのであるが、元より言語は固定さるべきものでないので、現代のアラビヤ語とは大いにその趣を異にしてゐる。其の文章は回教徒が以て神聖とし崇高なるものと信じ、且つ他教徒に誇つてゐるもので、文體は一種の散文であるが、各句節が互に美妙なる脚韻を踏んでゐるので、高誦して流麗、聞く者にしめて必ずしも宗教的感情を有たすとも恍惚、自ら人界以上の妙なる音樂を聞くの感あらしめる。傳へ云ふ。ラビド (Labiḍ Ibn Rabiā) はマホメッドと代を同じうしたアラビヤ第一の譽れある詩人であつた。彼れの詩が一度、オカヅの詩合せに月桂冠を戴いてカーバ神殿の扉に掲げらるゝや、

古來傳誦され來つた總べての詩は月の前の星、日の前の螢光の如く光薄く遂に忘れられ失せて仕舞ふと云ふ位ゐるの詩聖であつたが、彼れ一度コーランの一章に接するや、唯僅かに冒頭の一節を誦した丈で嘆稱して曰ふ『嗚呼、斯の如き莊嚴は神助ある詩人の外、企及すべきものにあらず。』と、兎に角コーランの名文なることは事實で、假にその内容が神を説き道徳を教へたるものでなく、淫靡の物語を叙したものであるにしてもアラビヤ文學の一大産物なりてふ讚辭は當然授け得らるべきものである。斯る靈妙なる一大長詩が、何等マホメッドの修辭上の琢磨を経たものでないとするならば、實に天來の妙韻と稱すべく、後年回教徒の學者アブツラハリムが『實に人の筆になれる最上の文章であつて、神の世界を信證するに足るべく、死人が蘇へる以上の奇蹟である。』と云つたのも強ち不當なる過褒ではないらしい。

マホメッドは、この奸爛たる一大文章を以て百十四ヶ章に涉つて、總べての異端を折伏し、回教統一の聖命を宣布し、無始無終唯一至上の天神を顯示し、その信仰を教へ人の道を説いたのである。但しコーランは金言名句の拔萃録ではない。神の聖語を録する間、彼れ自身の行動をも記してもあれば、改むべきアラビヤの風俗習慣をも記述してある。又當時の世話嘲しをも語つてゐるもので、嘗に回教徒にとつて神の福音書であり、民治の法典であり、實踐倫理の教科書である以

外に異教徒にとつてもアラビヤ文學の至寶であり、アラビヤ史研究の重要な資料である。

第五章 アラ

— 宗教の進化— ヤーベの信仰— アラー— 天使— 惡魔— ケニイ— 豫言者— 經典— 宇宙世界觀— 生命觀—
— 最終日の審判— 地獄及び極樂— 宿命觀—

吾人は、人類學者が不斷の研究に教へられて、吾人人類は其の最も原始的なる時代、即ち第三紀層の中葉に於て既に咒物崇拜將た自然物崇拜等の原始的拜物教を有つてゐたことを知ることが出来る。蓋し、太古にして人智の尙極めて幼稚なる時代には、その思想は單に具體的であつて抽象力を缺き、其の注意の集まる所は單に有形的なる事象にのみ限られたとはいへ、尙ほ能く彼等は肉眼に映する儘の天然自然の萬有を、何等の思索する所なくして直ちに眞實と認め得、自己と同じく皆悉く有情なるものとした。加之、夫等は時に人力以上の大活劇を演じて、其の神出鬼沒將た靈妙不可思議なるは、再轉して自己以上の權威者と認めらるゝに至り、夫等を怖るゝの情は積極的に倚依するの感情を生じ、於是、彼等と夫等との交渉は生じて原始的なる自然萬有崇拜の拜物教は生れたので、其の神格として崇拜せらるゝ物象は、單に日月星辰山河湖澤奇巖怪石巨木

奇草等の自然物將た風雷雨霆等の天然現象なるのみならず、飛禽走獸昆蟲魚介の類にして、會々彼等が思議すべからざる所謂神祕を表はしては直ちに彼等が原始的宗教の對象となり得たのである。但し原始的拜物教にありては、感覺に現はれたる儘の天然現象將た自然物象その儘の崇拜であつて、未だ何等の思索的色彩は施されてゐないので、これが形而上に意識され人格化する精神作用の漸く高調し來るに當つて、轉じて進歩せる天然崇拜教となる。即ち後者に於ける神格は、前者に於いて直接感覺上の信仰たる以上に多少とも推論に依る信仰對象となるのである。又た石片樹枝木皮草根鳥爪獸牙羽毛土砂將た護符等の如き、偶然の機會に於て得たる微少なる物體の上に不可思議なる超人間力の宿れる事を信じた場合、夫等の微小物體を崇信することとなつて、咒物崇拜の一宗教現象は生ずる、咒物崇拜は物體其の物の崇拜にあらずして其の裡に潜在する靈力を崇拜するてふ點に於て又、進歩したる天然崇拜の宗教と軌を一にするものであるが、其の崇拜の對象たるものは、普通進歩したる天然崇拜教の對象たる天然事象が徹頭徹尾信者以上の上位を占むるに反して、信者が任意に存廢し得るてふ點を異にするので、従つて咒物崇拜は其の崇拜を維持する爲め不可思議なる魔術の力を借ることが普通であつて、魔術と宗教の差は程度の差であつて種類の別にあらざるることとなるし、その崇拜されるべき咒物が單に石片樹枝鳥獸の爪齒牙羽

毛等の天然物たるに止まらずして人工の護符の如きものとなり、美術の進歩と共に種々なる形象を製作するゝに到つて咒物崇拜は偶像崇拜の宗教となる。彼れと是れと其の崇拜の對象を異にするも以然として其の崇拜する物體を介してその裡に潜める靈力を崇信するてふ點は何れも其の軌を一にしてゐるので、生殖器崇拜若しくは陰陽崇拜の如きも是等と等しき宗教の階壇にあるものである。次に咒物偶像等の物體を介せずしてそれを獨り抜け出で來れるが如き靈の存在を信じて、之れと宗教的交渉關係を結ぶ時、茲に精靈崇拜の宗教は生れる。この精靈は道德的に思索されて惡精と善精とを意識せられ、漸次、人の宗教意識が道德的進歩したる宗教に進む一楔子となるのであるが、未だ僅かに進歩したる天然崇拜咒物崇拜偶像崇拜の宗教より稍進みたる宗教意識たるに止まるので、斯かる幼稚なる自然的宗教の階壇にありて、漸次に比較的大なる神格の崇拜は發達し、彼等が實際的な宗教意識の活動が主として多神的若しくは多靈的に支配せられつゝある間に、又た髣髴ながら實在の面影を原始的唯一神教として寫象するに到るのである。但し、是等原始的自然教の崇むる所のものは神と云はんより寧ろ遊魂離魄であつて、それは性の差別なく一定固有の神の名さへないのであるが、斯く各地方地方に行はれたる地方的精靈は、漸次に成形され一大神格の確立となり、一定固有の名稱を得て立派なる實在の神となり、男神女神に分化し來り各地方各

種族特有の守護神即ち鎮守神の如き形式をとりて表はれ來るので、斯くして原始的自然教は漸次に高等自然教に推移し來るのである。斯くて古代印度の交替神教即ちベダの宗教となり、古代エジプトの準單一神教となり、古代ギリシヤ或は北歐アールヤ民族の如き純多神教となり、ペルシヤの古代宗教の如き二元的多神教ともなり、バビロン、アッシリヤの古代宗教將たヘブライの古代宗教の如き拜一神教となつたのである。是等高等自然教にありては神に既に男女の別あり、人に既に貴賤上下の別定まり社會の產物として、ギリシヤの如く一國君主の大權を神界に代表するものさへ生じて、何れの國の宗教たるを問はず、又多少とも神話的なるものとなる。而して其の神話の裡には、早く既に自然的宗教をして更に一步を進めて倫理的宗教たらしめんとする機契を髣髴せしめてゐる。が、その本領は尙ほ依然として自然的實際的であつて、善惡の觀念の如きも單に主として物質上の善惡たるに止まり、且つ著しく地方將た種族的であるを逃れないのである。然し漸次に發達進歩して息まざる人智と道德思想とは、相共に彼等の宗教の上に作用してその向上發展の縁となり、古代印度のベダの宗教は印度教と化り、ジナ教と化り、古代ペルシヤの高等自然教はマジ教となり又たミトラ教となり、ギリシヤの密教、ヘブライの猶太教と進み、倫理的儀律教の華を咲かせると共に一方、ゾロアルターのペルシヤ教、ヘブライの豫言者

教、内祕的バラモン教の如き倫理的宗教の初期の宗教と發達し、遂に主觀的に佛教の倫理的宗教を完成し、客觀的に基督教のそれを發達させたのである。以上、吾人は宗教を時間的に考察して、其の進歩の階梯を明かにすると共に、宗教は人類と共に終始するものであつて時間的に殆んど普通なるものなることを知るのであるが、又た空間的にも普遍なるを知るのである。即ち、現今地球上に存在する民族は其の文野を異にし、アフリカの土民の如く原始的未開の域にあるものより、吾人日本民族の如き物質的にも精神的にも文明の高度に達せるものに至る迄、各々皆何等かの宗教を有つてゐることを知るのである。基督教の偏見に拘束せられたる宣教師、若くは皮想なる觀察よりなし得ざる旅行家の報告に依れば、時に或は宗教を缺ける蠻民あることを報せられることがないではないが、前者の所論を極端に進むれば佛教徒の如きも無宗教の徒なり、後者の所論の如きは極めて皮相膚淺の觀念に立脚してする憶斷に過ぎずして、些細に且つ周到なる用意の下に考察すれば、宗教は實に空間的にも亦人類と共に在るものとなるのである。世に無神論を主張し、以て一切の宗教を否認する所謂無宗教者の徒の如きも、それが自己の無神論に立命し安心せるならば、彼等は實に又た一種の宗教に生くるものであつて、宗教は以然、人間と終始し形影相共に在るものであると云ひ得るのである。

余は回教の唯一至上神アラー(Allah)を述べたくして門外なる宗教論に數頁を費した。が、尙ほ數頁を費してヘブライの宗教を叙し以て本題に入ることとする。

斯く時間的に空間的に普遍なる宗教は、其の種類は枚擧するに遑なき程多數であるが、等しく其の本質は超人間力の神格と人間との交渉である。吾人はこの多數の宗教に就いてその神と人との關係を考察して、其處に相異りたる二つの大いなる思潮を認むることが出来るのである。即ち、一つは、神と人との關係が絶對にして、神は九重の雲深き所に在して遙かに人寰を超越し、其の威儀を正して下人間に臨む、宛として東洋古代の專政君主が尊威を以て下臣民に接するが如く、兩者の間隔は天地霄壤も嘗ならざる底のものと、他は人間の中に神を認むるもので、その表現の有様に多少の差違はあれ、結局は神と人とは單にその威勢上の程度の差に過ぎずして、前者の如く種類の差ではないものである。佛教の『一切衆生悉有佛性』娑婆即寂光土草木國土悉皆成佛』の教理は之れに立脚することが出来、後者の思潮はインドアーリヤ民族の宗教を一貫する。チール教授(Dr. Tiele)は之れを神人教と呼び前者を神治教と呼んでゐる。神治教はヘブライの宗教に依つて代表され得るので、無より宇宙萬物を創造したる神は、人間の主で世界の大権力者不可犯の統治者である。基督教の神の如きは、大いにこの神人懸隔の思想を寛和して、神は人間の父と

迄親まれるに到つてゐるが、依然としてヘブライ思想に因る神であり、回教の神の如きは神人懸隔のこの思想を極説して、その教徒をして神を見ること畏るべく屈從すべき大権力者統治者となし、親むべく依憑すべき保護者としての神の普遍なる愛を感じるを得しめぬまでになつてゐる。されば或學者は回教の神アラーをヘブリュー語エロアー(Elom)即ち戰慄或は畏懼の義と解せんとする位である。『全き愛は怖を除く』てふ豫言者ヨハネの喝破は打棄てられて、マホメッドの神は古きヘブライの嚴格なる神に立戻つた譯である。然り回教の神は古代ヘブライのヤーベ(Jahve)神であり、其の宗教はヤーベの信仰の進歩したものであつてユダヤ教の一傍系である。今少しくヤーベの信仰を歴史的に辿つてアラーの信仰に入るならば。

人は彼の出埃及記の『我は有りてあるものなり』てふ語を以て、ヘブライの宗教は其當初より唯一神教でありしかの如く思爲する。然し輒近宗教學者の周到にして精密なる研究は、ヘブライの宗教も亦その當初より嚴密なる意味に於ける唯一神教に非ずして、其過去にありて既述せし如き宗教上の諸階梯を経來りたることを明かにし、其天神ヤーベの如きも、多神教中の一神に外ならぬことが立證されるに到つた。元來、アラビヤ、パレスチナの地方に遊牧してゐたセム民族の思想の特色は實際的と云ふ點にあつて毫も理論的冥想の痕なきことである。チール教授の説に従へ

ば、ヤーベは元、セム民族のケニ族が祭祀した神で、モーゼが其外舅なるケニ人エトロより傳承したものであらうと云ふことである。兎に角、モーゼは史的實在の人物として紀元前第十三世紀の頃、シナイ半島の地に遊牧生活を營み外舅エトロの爲めに野に羊を牧ふてゐたので、ヤーベの起源がケニ族の神たりしにせよ、將又何れにありしにせよ、既に當時ヘブリュー民族の守護神たらんとしてゐたこと又は事實である。而してヤーベとは、そも何物の神格化せられたものであるか。出埃及記は曰ふ『シナイ山は烟を出し、エホバは火の中に在りて其上に下り給ふ。雷と電と密雲とは山の上にある。烟は竈の煙の如く立ち上りて山は凡べて震ひたり。』と、實にヤーベはシナイ山中雷電の神であつた。即ち雷電でふ自然現象の神格化されたものたるに過ぎないのである。

一度ヤーベのモーゼに顯現せしより、ヤーベはヘブリュー民族の守護神とはなつたが、ヘブリュー民族は尙ほ依然ヤーベ以外の他の諸神を信仰し、その他偶像樹木咒物等を崇拜してゐた。然し、ヘブリュー人がカナアンの地を領して土着農業の生活を送るに到つて、茲に團結したる國民として發達し、従つてヤーベの信仰も發達して、天然現象の神ヤーベは遂に完全にヘブリュー國民の守護神となり、國民の安寧幸福一切をその掌中に握るものと思爲さるゝに至り、眞にヘブリューに君臨する天上無形の君主となつた。ヘブリュー一人は自らヤーベが特別の選民なりと思爲

して、彼等にして苟くもヤーベを忘れ、他國の神に事へんか、そは直ちにヤーベの怒に觸れてヘブリューの破滅を來たすものなりてふ思想を成形した。

ヘブライにあつてはソロモンの榮華、樞花一朝の喩となつて南北二朝に分裂して國家衰亡の凶兆を示し、爾後漸次國勢は陵夷して、北朝は紀元前七百二十二年に、南朝は同五百八十六年に滅ばされて、其住民は多くバビロンの地に移され、悲風慘雨の異境に彼等は新しく宗教的經驗を嘗むべき幾年を送つた。この宗教的試鍊はユダヤの豫言者教を育成して、古代ヤーベの宗教は道德的に彩色せられてユダヤの民に臨むに到つた。豫言者イザヤのヤーベは先づ『敵は鷲の如くエホバの家に臨みたり。此民が我契約を破り、我律法を犯したるが故に』とヘブライの滅亡を説明し『汝等、汝等の神の律法を忘るゝに因り、我亦た汝等の子等を忘れん』と威嚇し『イスラエルよ、汝の神エホバに歸れ』と勸告して、人の履むべき神の律法を説いた。エキゼルの『若し人の正義にして公道と公義とを行ひ、偶像を仰がず、人の妻を犯さず、穢れたる婦女子に近かず、何人をも虐げず、質物を還へし、物を盗まず、飢へたる者に食を與へ凍へたる者に衣を着せ、利息を取りて貸さず、吾が法律を守りて眞實を行はば是れ即ち義者なり。』は蓋し其道德的教訓の一端である。翻つて、ユダヤのバビロニア囚虜はペルシャ王クロスのバビロン征服に會して、赦されて其の

本土に歸還するを得、その一旦兵燹に罹りしエルサレムの神殿を再建し、一意専心、ヤーベの神意の儘に舉措して寸毫も戻らざらんことを畏れ、宗教上一定の繩墨法規を制定して萬事を嚴格なる儀制の下に律し、割禮の勵行、安息日の嚴守、十分一税の遂行其の他、結婚法、食物法、齋戒法、報償法等何れも微細なる點に迄互りて規定の、彼のアモス、ホゼア、イザヤ、エレミヤ等の豫言者の生ける宗教を謬つて死したる化石したる宗教と化し去つて仕舞つた。尤もエヅラの如き導士の巨擘が其の儀律を制定するに際しての用意たる、是れによりて人をしてその嚮ふ所を知らしめ、其の履む道を教へ、斯くして一舉一動も神慮に戻る所あらしめず、再び神の震怒に觸れてバビロン幽囚の覆轍を踏まざらしめんとするにあつたことは相違ないのであるが、事實は用意的の外に脱して煩瑣なる儀律は其の教義の精神を没却して、その宗教的將た道德的行爲は毫も内發的自律に發せずして他律的外制の末に拘泥し、その神の精神は血なき化石と化り了した。然しこれも亦、宗教進化上の一起伏である。

既にして『天國は近づけり。諸人よ悔い改めよ』と叫んでヨハネは出でて生ける神の道を傳へ、彼れヨハネが『我に優りて能力あり。我は其履を取るにだも足らず。』と歎稱せるイエス、キリストは現はれて『神の國は汝等の衷にあり。』と喝破した。彼は、其侃諤の言遂に一身の奇禍を買つてア

ンチバスの怒に觸れ空しく清き白骨を斷頭臺裏に晒したるヨハネの後を承けて、愛の福音を喧傳し、其所謂神の國を倫理的言語に翻譯して名教中に自ら存在する極樂の地たることを説き、其道德的意義を教示して『人は二人の主に事ふること能はず。汝等は神と財とに兼ね事ふること能はず。此故に我れ汝等に告げん、生命の爲に何を食ひ、何を飲み、身體の爲に何を纏はんぞ憂ひ煩ふこと勿れ。汝等の天に在す父は凡べて是等の者の必要なるを知り給へり、汝等先づ神の國と其義とを求めよ。然ば是等の者は皆汝等に與へらるべし。』と説き、於是、原始天然現象のヤーベ神は倫理學上の究竟最高善と化つて、其宗教は基督の名の下に倫理的精神的絕對教と進化したのである。

回教は基督教に後る、こと六百年にして開教されたものであるが、其教義は反つて基督教のそれ以下にあつて、僅かにユダヤ教のそれ以上により出ないものである。等しく太古ヘブライのヤーベ信仰の流なることを思ふ時、その歴史的に進歩を論ふて、確かにヤーベの信仰は回教に於て數段の退歩を示したと斷すべきであるが、宗教を論ずる、歴史的に單なる議論は國を同うせる時代世相を同うせる場合に於てなさるべく、既に第一章に於て述べたるが如く當時アラビヤの世態を明かにする以上、マホメッドの教義はその世態革新上必要な顯象であつて、單に一切の純理論を以て回教を論ずる譯にいかぬのである。後年、何人かの回教徒中に宗教的の一大偉人の現は

る、あらば、彼れは必ずその教義に一大革命を斷行して以て回教をして基督教のそれの如くに進歩せしむるに相違ないと豫斷し得るのである。

太古シナイ山上にはためいた雷霆はモーゼの宗教意識にヤーベ神と化り、ユダヤ國民の守護神となつてエホバ神と崇められ、基督教の至上神となつてゴッドと尊ばれ、回教の唯一神となつてアラトと禮される。アラトと云ふ語は元、ヘブリユのエル(一)バビロニヤのイル(三)と等しく單に神てふ義に外ならずして、古くよりアラビヤの各部落々々にて崇拜せられたる幾多劣等自然神の普通名詞であつたものらしく、その一度マホメッドの出でて唯一至上神を開顯するに當つて、夫れ等の各神は皆悉く回教の唯一神に統歸吸攝せられて、その統一神をアラトと呼び崇めたるものと斷せられる。

そのアラト神たる、ユダヤ教のエホバが全々ユダヤ國民獨占の神たるに反して、アラビヤ人を主とするが稍々世界的普遍的の實在であり、等しく宇宙萬物の創造者にして萬物の統治者であり、全智全能にして最終の日の審判者であり、仁慈にして人類の保護者であり、聖明にして人類に禍福を與ふる者であるが、其の人間との位置關係は依然として甚だしく隔絶して居り、加之も教祖が布教の手段たる所謂左手に經卷右手に劍なる宗教戦争の史的潤色と、其の教相の精神以上

に外制的律儀を顯表する事實とは、勢ひアラトの畏るべく屈從すべき無限至上の天上の君主としての一面のみ力説せられて、未だ甚だ仁慈汎愛の温乎たる一面は説かれてゐない。従つて回教徒のアラトに對する、只管に其意に戻らざる様々戦々。彼等のアラトを禮拜するは奴婢の主人に對する敬禮であつて、彼等は災禍に泣いて神に謝し、喜福に悦んで神に感謝するが、福を希求し疾艱を求被することは躊躇せねばならぬ。或人の曰ふ「基督の神は慈母の如く、マホメッドの神は嚴父の如し。」とは蓋し、一言にして能く悉くを言ひ盡したるものである。

アラトと人間との位置は絶對に隔絶してゐる。此の間、兩者の交渉を媒介すべき何者かを必要とせねばならぬ。天使の存在は茲に於てか經典コーランに記述せられ、其清淨にして不可犯なることを宣言されてある。コーランに於て回教徒が教へらるゝ所によると、天使とは神が火で造つたものであつて、絶對に清淨、精巧至妙なるもので何等飲食する事なくして能く生存し、加之も不老不死、兩性の差別はなくして従つて生殖することはない。其形態は種々雑多であつて、其執る所の職も種々雑多である。或者は種々の位置に種々な姿勢をとつてアラトを欽仰し莊嚴し、或者は歌ひつゝ神を讚美し、或者は人間界の出來事を細大漏らさず精細に記録し居り、或者は人間に代つて人間の祈りを神に傳奏し、或者は神の左右に侍つて小用を勤める。中にガブリエルと云ふ

天使はアララの祕書官長とも云ふべく、神の書記役であつて又天啓告示の天使であると信せられてゐる。マホメツドに經典コーランを授けたのも此天使であると信せられてゐる。此天使の思想も亦明かにユダヤ將來のものがあるらしく、併せてペルシヤ思想をも鹽梅されてゐることが看取される。ペルシヤ思想によるソルース天使は即ちガブリエルなるべく、彼モルダード天使は死を與へる天使なりてふに於て、回教の靈魂を死屍より引き離すことを職とする天使アヅラエル(Azrael)なるべく、人間の守護を職とする戦の天使ミカエル(Michael)は彼ヘスタ天使と等しいと比較することが出来る。ミカエルはユダヤ教にありては最も重要な天使で、回教の天使ガブリエルの如き天使第一人者の位置をもつてゐる。此他、コーランはモアキバ(Moakibat)と云ふて、日々人間を監視しつゝ其行爲の細大を漏れなく悉く天の記録に記し留むることを職とせる天使、イスラール(Israir)と呼ぶ復活の天使のこと等を記載してあるが、凡べて是等の詳細は省略して置きたい。是等の天使と併んで悪魔エブリス(Eblis)の存在をも回教々義は承認する。コーランの説く所に依ると、エブリスは元と神に常侍してゐた天使アザジールであつて、彼れは神の命に背いたので墮落して悪魔となつたものだ相で。その悪魔と稱せらるゝも、吾人が朦朧と意識する所謂悪魔の如く人間に不徳を勧めて魔道に誘惑する底の悪業は働かないので、こは單に神の聖明なる、犯し

たる罪科を處罰する、天使に對してさへ尙ほ斯くの如し、謂んや吾人々間にありてをやと懲惡の一教説としての用意たるに止まるものらしく、悪魔の存在は回教々義上甚だしく重要なものではなく、その人間との交渉の如きは皆無である。

回教では又、天使と悪魔との中間に位するものでゲニ(Geni)或はジン(Jin)と云ふ者の存在を承認してゐる。是れはユダヤ思想のシエデー(妖魔)の思想の押し擴げられたものらしく、經典コーランの教ふる所に従へば、是等は等しく神が火から造つたものであるが、天使よりは餘程粗末に造られてゐるので、是等は飲食せねば生存することは出来ないし、老いもすれば衰へもし、果ては死ぬ。従つて兩性の差別はあつて、生殖に依つて種族の存續を計るのである。彼のアラビヤンナイトに屢々出て來ては不可思議を演ずる役者は、即ち是等のゲニ共であつて、是等は大抵善者であるが、又た悪魔に近いものもあるので、マホメツドはそのコーラン中に於て三ヶ所許りにも「我は人及びゲニを教化すべく神に遣はされたものである」と宣言してゐる。是等はアダム以前の太古より此の世界に住んで居たのだ相で、ペリ(Peri)妖精)デブ(Div)巨身魔)タクウイン(Tacwin)幽霊)等の種族があり、今日人間社會に見るが如き各主權者が統治する社會國家を組織してゐた。然し長い年月の間に其の社會も漸く墮落しつゝ、彼等の信仰も唯一天神のそ

れを離れたのでエブリスが未だ悪魔に墮落もせない以前、神命に依つて討つて世界の遠隔の地に驅逐して仕舞つたのであるが、尙ほ其の討ち漏らされたゲニ等は深山の洞窟、密林の樹間等に棲息してゐると云ふのである。又一方にペルシャ王タームラヅは彼等と戦争して、その悉くをカーフ山の彼方へ追ひ退けたと云ふアラビヤの傳説もある。然しこのことも回教々義上、必ずしも重要なものではないが、次に述ぶべき豫言者を尊信するてふ箇條は唯一至上神の信仰に次ぐ重大なる教義である。

我國語の豫言者とは英語プロヘット(Prophet)の直譯であつて、皮想的に解釋すれば單に事象の現はれぬ前に豫め言ふ者の義となるが、元と豫言者ナビ(Nabi)なる語はヘブリエー語で、其謂は神と特別な交通ある者、若くは神が乗り移れる人、即ち一時的の神なるもので、回教思想の解釋によれば、實に神の命に依て出現し神に代つて神の教を説く者と云ふことになるので、回教の豫言者マホメッドは神の命に依つてアラビヤに出現し、神アラーの教イスラムを説くべき聖命を帯ぶる者となるので、神に亞ぐの威儀を持して衆に臨み、神に亞ぐの尊崇を衆に要求したのである。その教義により彼等回教徒が有つ豫言者に關する智を略述するならば、神は必要に應じて隨時、その教を代り傳ふべき豫言者を此の世に遣されるのであつて、マホメッドに至る迄、既に

二十二萬四千人以上の豫言者は此世に遣はされたと云ふ。豫言者の數に關して、他の傳説には十二萬四千人と十萬人少なくなつてゐるのがあるが、何れにせよ悉く多數の豫言者があつたことと信せられてゐるのである。此の中、眞に神の言葉を傳唱し重大なる宗教的使命を以て遣はされた者は三百十三人であつて、就中、アダム、ノア、アブラハム、モーゼ、エス、マホメッドの六人は殊にも重大な使命の下に、新しき宗教儀律を齎して遣はされた豫言者中の豫言者であると信せられてゐる。是等の豫言者は皆罪惡より隔絶して居り、豫言者の言行悉く善であると解釋せられ、所詮人間の道徳は豫言者の行爲を判斷する規準とはなり得ないのである。

豫言者の尊信と併んで、經典コーランの崇信は回教々義の重大なるもの、一つである。こは凡べての經典は實に神がその豫言者を煥派するに當つて授け給ふ神の聖語の筆記であると信せられるからである。回教の教ふる所では、斯くの如き經典は實に一百四ある。其の十經はアダムに、五十經はセスに、三十經はエノに、十經はアブラハムに授けられたので、残りの四經はモーゼ、ダビデ、エス及びマホメッドに各々一經宛授けられたので、モーゼの五書、詩篇福音書及びコーランが夫れであると云ひ、更にコーランは實に最後の經典であつて、向後如何なる事があつても、是種の經典は絶対に神授されることはないものであると、コーランを一層有難いものにしてゐる。

今日、モーゼの五書とダビデの詩篇とエスの福音書とこのコーランとの四經の外の百經は傳はらずして四經のみが傳はつてゐる譯で、回教は其の教義に於て是等四經を等しく神の授け給ふた不可犯の聖經なりと認むる以上、理論上、其の教徒は其のコーランと等しく他の三經をも神聖視し崇信せねばならないのであるが、事實は獨りコーランのみ崇信せらるゝこと前章に述べた如くであつて、時に往々爾餘の三經中に錄された神の聖語を論難するてふ矛盾を敢てする。但し回教宣布以前のアラビヤ人間にては、他の三經を何分か崇信し居たるものらしく、今日傳はれる夫等三經のアラビヤ語譯の斷片は、以てこれを證するに足るのである。

以上略述した唯一天神アラ一の信仰と、天使の存在を信すること、豫言者マホメッドを神の代理者として崇信すること、經典コーランを神の授け給ふた聖語の記録として崇敬することの四箇條と共に、次に述べんとする最終日の審判を信する未來轉生の信條と、禍福二つながら皆悉く神意の發動にして人間の如何ともなし得ざる絶対のものなりてふ宿命觀とは相寄つて回教々義の理論的方面即ち信仰 (Iman) をなすものである。余は暫く筆を回教の宇宙世界觀の略述に染め、次いでその生命觀より最終日の審判に、その宿命觀に進めて本章を終らんと思ふ。

回教の教ふる世界は地球にあらずして地平である。のみならず宇宙は幾層かの層から成り立つ

てゐて、人間の住む層、即ち世界は四圍を環繞するカーフ大山脈の一大盆地であること云ふのである。層體である宇宙の最上の層はアラス (Alash) と云ふ聖火に燃ゆる神の世界であつて、其の次が水晶の如く透明な世界で神の最終日の審判の御座のある所であり、光榮の世界、安息の世界、鏡の世界、不老境、歡樂境、天の樂園、久遠の樂園と次々に層を成して九層の天界の下に七層の空界があり、その下が地界七層であつて。吾人人類の今日棲息する地平は即ちこの七層の地界の最上層に當る。地平の四周は、宛かも吾人々間が誤つて此世界から漏れ落ちない様に保護するが如く、カーフ山 (Kha) が盆の縁の様になり圍んでゐると云ふことである。このカーフ山の東側の山脈の尙ほ東には曉の泉と云ふのがあつて、毎朝太陽は三百六十人の天使が棹さす日の舟に乗つて、この泉を發して吾々人間世界に必要な熱と光とを頒ちつゝ空界の虹の海を西に航して夕暮の井戸に没るのである。夕暮の井戸は非常に高熱の湯泉であつて、其處にはオデと呼ぶ巨人魔が番人として居つて、大海から魚を掴み上げては此井戸の湯に浸して、黄昏、太陽の着くを待つて太陽一行を饗應するのだ想である。夕暮の井戸に姿を隠した太陽は神に其日の終りを報告して、天の安息の世界で復た次の日の航海を待つ間を安く慰ふのである。其間即ち夜は太陰が太陽の晝の航路を繰返して夜を幸する。而して太陽太陰共に恒久にこの晝夜の巡航を神に誓つたので、

是等は一日一夜たりともその務めを怠ることは出来ないのであるし、又た嘗て怠つたことはない
と説かれてゐる。又た夜半天空に瞬く無数の星は、第二層の上天の穹天井に懸けられた神祕の燈
火であつて、雷は天使の私語であり、日月の蝕は虹の海の海蛇の仕業であると云はれてゐるので
ある。元より今日進歩したる科學上の見地よりして論ずべくもなく荒唐無稽のものではあるが、
彼等回教徒は尙ほ之を信じ、その少しく智見の開けて進歩したる輓近の科學に教育されて地球説
を信する者と雖も、其宗儀上依然として地平説を併せ信するてふ滑稽事を平氣で澄ましてゐる。

死の問題は吾人が有つ他の多くの不可解と共に確かに不可解なる問題であり、古來幾多の哲學
者はこの不可解なる問題に悲しき努力を續け、一方生物學者はこの不思議なる現象に科學的研究
を積んで來た。然るに宗教者はこの不可解不可思議の難問題を存外容易に解釋し去つて、加之も
その獨斷的解釋はその信者をして絶體的に信じ了らしむるの奇蹟を演じて居る。回教の與ふる死
の解釋は恠様である。

人が此の世に於ける最後の息を引き取つて、その墳墓の裡に横へられるや、死の天使アヅラエ
ルは來つてその死を承認して、應て試問の天使の來るべきを告げて去る。試問の天使は名をモン
ケル(Monker)ナキール(Naki)と呼び、共に等しく形相凄まじき灰黑色の天使であつて、この二箇

の天使は來つて先づ死人跪坐にすべきを命じ、交々問を發して、唯一至上神アラーに對する死人
の信仰と、豫言者マホメッドに對する敬仰とを尋問する。其の正信なる死人は平和の裡に安堵せ
しめられるが、不信なる死人は、天使の手にする鐵矛を以てその顛顛を強か打ち慘まれる。この
苛責に呻吟する不信なる死人の苦しき聲は、彼の世にある四方八方の死人の靈に明かに聞かれる
位のである。不信なる死人は當にこの苛責を受けるに止まらず、更に土で塗り籠められて刺され
噛まれた揚句、七頭の惡龍の大なるより、小なるは蝸の如きに至る迄の毒蟲の何れかに化身さ
れて、最終の日の審判に再生する迄、無慘なる苦惱の生を送らねばならないのである。回教徒が
その墓塚に空所を造つて置くのは、その墓の主が天使の尋問を受くる際、其の命の儘に坐跪する
に都合よい様にと云ふ用意である。但しモタザル派其の二三の宗派では、別の見解から敢てその
墳墓に空洞を設けて置かない。然し凡べての回教徒は其の宗派の何たることなく、この墓中の尋問
を信するより、水葬火葬等を絶對に否認し、葬儀は必ず土葬によることとし、今日彼等を統治す
る異教徒の政府者の内にも彼等がこの教習を積極的に保證するてふ意見よりして、回教徒の火葬
水葬等を罪惡なりと成文せる向もある。

この墓中尋問の思想は明かにユダヤ教の思想を輸入したものと知れてゐるので、ユダ

ヤ教では死人の墓へ天使が来て死人を直立せしめ、其の信仰を尋問し鐵と火との鞭を振つて苛責し、一息を吹いて死屍の筋肉を剝離し、二息で骨を潰し、再び元の通り組み立てて鐵火の鞭の苛責をなし、斯くの如きを三度繰返して後、死屍の總べてを灰と芥とに化して仕舞ふと云ふのであるが、イスラエルの住民であつて安息日の前晩に死んだ者はこの尋問の苛責を逃れると云ふ特典を與へてあるに反し、回教では等しく死者は悉く信仰の尋問を受くるも其の正信者は好遇されて彼の世の平安を保證されることになつて居るのである。

墓中の尋問後、再び死の天使アヅラエルは來つて靈と肉とを分離する。不信者の靈は毒蟲に宿つて畜生道に入るに反して、正信者の靈は他の二箇の天使に扶持せられて上天に神の御座を拜し、下つて何處か安穩なる安息所に最終日の審判の時まで安息するのである。正信者の靈の安息する場所に就て、殉教者の靈は天國の青鳥に安息して樂園の果實を食み、天國の清泉に飲むと傳へられてゐるが、殉教者にあらざる正信の徒の靈の安息所に就ては傳ふる所、各々異なる多數の傳説があり、或は白鳥と化つて神の御下に安堵すると説かれ、或はアダムの靈と共に最下の天界に安んずると云ひ、或は地上より第七下地に遷り更に地下世界 (Sajin) に移つて、其處の綠色の岩影に安息するものであると説かれ、或はゼム／＼聖泉の内に安住する (不信者の靈はハドラマウ

トのボルブート鹹泉に投げ込まれる。)と云はれて居るし (但しこの思想は今日の回教諸派の等しく、異端的なりとして排斥するものである。)七日間墓畔に止まるも其の後は空界の諸所を翩々してその定所を指すべからずとも云はれてゐる。南洋の回教徒間にあつては、死者の靈はその墓の附近に往生して、墓參する親戚故舊を認知することを得、現世の言語を以て應答することは出来ないが、その親戚故舊の語る所を聴取して了解することが出来ると思はれてゐるので、彼等は屢々その親戚故舊の墓を展して、宛かも生ける者に語るが如く四方山の雑談に耽けるのである。

靈と分離したる肉體は、漸次にして土に歸するのであるが、唯一つアヂブ (Ajb) と云ふ薦骨のみは最終の日の來る迄、人間の種子として胎るのである。此の骨は神が最初人間を造る時に先づ初めに造つたものと信せられてゐるものであつて、世界最終の日、神は四十日間に渉る雨を降らせて、此の骨を土中十八尺の深きに埋め、植物がその種子から萌生する様に此の骨から人間を芽立たすと説かれてゐるのである。此の思想も亦たユダヤ思想の輸入と斷すべく、ユダヤ教にあつてはこの骨をルツと呼び、四十日間の天雨は甘露と代つてゐる位がその相違である。

最終の日の審判と云ふのは、世界の終りと云ふことであつて、世界に生きとし生ける凡べての生物は皆悉く死滅し盡して、神は審判の座に威儀を正して嘗て生けりし者をその死の眠りより蘇

らせて、峻嚴なる審判を夫れ等が生前の行跡に加へ、其の是非善惡正邪を判別して、善なりし者は天國へ惡なりし者は地獄へと、各己各己に聖明にして謬るなき斷獄をなすてふ思想である。この思想は天使の存在、豫言者經典の神聖及び神意に因る宿命觀と共に、既に回教が一つの宗教として其の教義の樞軸を唯一天神の信仰に確立したる以上、そが信仰の必然的歸結として生じ來るものであり、アラブがヤーベのそれである以上、是等伴隨的諸信仰も古來へブリユエー民族間のそれであり、今日ユダヤ教に説く所と大同小異であつて、其の起源を必ずしもユダヤ教のそれにありと斷せざるも、又た彼れと此れと相關する所甚だ深きことは分明である。

謂ふ所の最終日の審判は今後幾千將た幾萬、幾千萬年後に來るものなるか、其の期日に就てマホメッドは嘗て天使ガブリエルに質問した。然し此の件に關しては流石天神の祕書官長も知らなかつた。勿論、神は既に業に知食めすのであるが。事は神の最大祕事であつて、神は未だ何人も語り明かされたことはない。然しこの最終日の接近はその社會の世態により、又た宛も最終日を豫告するかの如くに現はれる奇怪なる事象によつて、凡夫と雖も尙ほ能く豫め其近づけるを覺ることが出來るものらしくある。即ち、人口甚だしく蕃殖して都市は著しく膨脹し、メヂナ市街が遙かにヤハブに擴がり伸びた時、人間の信仰は墮落し、社會の秩序は亂れて下級民は上流民を

虐げ、淫靡の風は吹き荒んで、下婢は媚を主婦と競ふて主人の寵を擅にし、主婦を蔑にして女主人となり、更に次代の主人が母となる時、イラ、シリヤの朝貢は止まり、外にトルコ人と戦を交へ、内に騷亂相踵いで起り、災害亦た頻りに起る。世態は如斯にして、奇怪の事象が尙ほこの上續起する。曰く、メツカの神殿サフツの山、タエの地方或はアラビヤの他の地方に身の丈九十尺、頭は牡牛にして眼は豚、耳は象にして鹿の角を有し、駝鳥の如き長き頸と獅子の如き豊かなる胸を有つて、猫脊にして羊の尾あり、全身は虎の如き麗はしき毛皮に蔽はれて、驢馬の如き鳴聲する怪物が其駱駝の如く逞しき脚に委せて三日の間、神出鬼没し其の迅きこと隼の如く、見る人をして端倪するに遑なからしめる。この怪物は更に他の一説にありて、身の丈は量るべからずしてその現るゝや、人は僅かにその踵のみを認め得べく、他の大部分は高く雲表にあつて人の能く仰ぎてさへ見るを得ずと傳へられて、其の怪は更に一層の怪を増すに、尙ほ他の一説は傳へて、此の怪物の現はるゝ、その手にモーゼの權標とソロモン王の印章とを持ち、縦横無盡に出沒馳驅して正信なるを不信なるを明確に判別し、その正信なる者にはムメン (Munim) 不信なる者にはカヘル (Caher) の記號を夫れ／＼附し廻ると云つてゐる。(が然し後者傳説のその怪物の用を説くは、彼のヨハネ黙示録第十三章を誤譯したるものらしく、本來のへブリユエー傳説にはない所であ

る。次に、回教徒は兵をローマ帝國と交へて其の東の首都コンスタンチノールを攻圍しい迫撃大いに努力する。會々、イサアクの子孫七萬人、來り援けて「神の外に神なし、神は至上唯一なり」と喊して突撃するや、さしも堅固を誇る城牆も忽ちに潰れて、城守遂に破れ、勝誇る回教軍は潮の如く侵入して、天にも響く凱歌の裡に山なる戦利品の分配をなさんとする。時に飛報はアラビヤより到り、似而非基督の大舉してアラビヤに現はると聞くに、連日力戦のアラビヤ軍は此處に片時の休養さへ貪る暇なくして急遽アラビヤに班軍する。

似而非基督教徒 (Mash' al-Dajjal 嘘を云ふ基督教徒の謂) に就て、マホメッドは屢々語つたことがあるものと見えて、彼の傳説中に三十人許りの似而非基督教徒のことが比較的詳しく語り傳へられてあるので、彼等は皆、隻眼でその額にはCFR (C'est le 不信者の略字) が深く慘しく烙せられてある。彼等は驢馬に跨がり、イスバハンのユダヤ七萬を號令して先づイラとシリヤとの中間の地に現はれ、漸次西南に進んで遂に回教徒の大虐殺を行ひつゝ、先づメヂナに殺到してマホメッドの墳墓を犯さんとするが、天使の守護するあつて手痛く撃退せられ、轉じてメツカにカーバ神殿を壞たんとして復た守護の天使の爲めに成らず。暫らくヘザヅの地方を荒らして漸次南下してヤマンの地方に及ばんとするのである。一方、急を聞いてローマ征戰の途に引返したる回教

軍は途をユダヤ人の爲めに阻まれ、息むなくも其處に奮戦して宗教上の大殺戮を行ふ。時にエスキリストはダマスカスの東方、荒野の内に神祕を包む一白塔下に降臨して、ルツド門外に似而非基督教徒を誅戮し、回教に歸依して回教徒の婦女を容れて婚し兒をなす。エスの一度、回教に歸依して其處に回教の世界は限りなき瑞昌に祝福されて、獅子と駱駝と場所を同うして棲息して何等の犯争する所なく、兒は毒蛇と嬉戯し毫も害さるゝことなき泰昌無事の時代となる。此の間、時にエジヤ、マージヤの蠻人が蜂起してエルサレムを犯し、この泰平を惑亂せんとするところがあるも、エスの祈りに神軍忽ちに降り來て彼等の死屍はベスレヘムの曠野に敷く、次いで神鳥は降り來て悉皆の死屍を運び去つてエルサレムの聖城は清淨に清められるであらう。但し、このエス治下の回教國の昌平も僅々四十年以上を超えざる約束の下にあるもので、昌平四十年にしてエスキリストは再び死し、世界は數日間妖霧なる密烟に包まれ、アラビヤの東に於て西に於て毎夜の如く月は蝕に光を隠す。冷かにして香ばしき一陣の奇しき迅風はダマスカスの邊より吹いて、全アラビヤ人の正しき信仰と聖典コーランとを何處へか吹き飛ばして、アラビヤ人の信仰は古き偶像のそれに逆轉する。エシオビヤ人は來り冠して遂にカーバ神殿を破壊し去つて仕舞ふ。ヘザヅの地に祝隔の大災は起り、エウフラトの太江の流れは早上つて、底に金銀の大塊が露出するな

ごのことも起る。更に奇怪なるは、地上に走獸飛禽蟲魚介將た木石草苔の如き非情の物に至る迄、凡そ有りとし有る物悉く聲を發して意を述ぶるの奇兆あり、天に太陽の西より昇る奇怪は現はれる。斯くの如き吾人が想像さへ及び難き奇怪なる諸事象が相踵いで起ることありとするも、尙ほ一つマホメッドが豫言せる事の實現されぬ以上は、世界の終末、最終日の審判は起らないのである。

マホメッドは豫言して「余が神の聖命を果して神の御下に歸りて後、余と名を同じくし、加之も其の父も亦た余の父の名と同じき余が子孫の現はれて、余と同じくアラビヤを支配し、余が爲したるが如く彼れは復た、此の土を光嚴すべし。」と宣言してゐる。この宣言は遍く回教徒に確信されてゐることで、シャ派の如きは此の教祖が豫言した人物は、既に此の世の何處かに生存してゐるものなることを信じ、其の人物を擬して回曆二百五十五年(今より一千餘年前)セルマンライ(Semantai)に生れたる教祖十二代目の裔孫なるマホメッド(Mahommed Abu al Kascem)を以て夫れと信じて居る。彼れの父は名をハサン(Hassan al Askeri)と呼ぶ。この後日、自己に代る聖者の出現を豫約する思想は、ユダヤ教のメシヤ出現のそれであり、基督教のエス再誕のそれと軌を一つにするものであつて、一宗教の始祖としての宗教的用意は、佛陀がその諸經の王法華經の肝心

如來壽量品に説く良醫救兒の譬を精神とする表現の相違であつて、己れの死後の信者が安心と戒愼とを保有する契機となるものである。

譙莫、マホメッドが豫言する人物は現はれ前述の諸象悉く現起した時、人は此の世の末期の近いたことを知るのである。忽ちにして辛辣なる喇叭の第一聲は天の一方に起り、その響きに大地は振動し、地上總べての建造物は勿論、山岳は振ひ壞れて曠野となり、海洋は干上り、天は暗く太陽の光は鈍り、無数の星辰はそれを支持する諸天使の死滅するが故に地に墮ち、天上天下生きとし生ける總べてのものは皆悉く等しく審判の恐怖に慄ひ戦く、コーランはこれを叙して「嬰兒を愛しむ母親もその恐怖に愛し兒を捨て、戦き、生後十月に満たぬ仔を哺める牝駱駝も、その恐怖に戦いては仔の愛を打ち忘れて逃げ惑ふ。」と記してある。但し敬神なる正信の輩は毫もこの恐怖に驚くことなく、靜かに審判の日を待つことが出来ること云ふことである。次いで喇叭の第二聲は響き渡つて、總べての生物は死滅する。この死滅したる總べての生物を、死の天使アヅラエルは前に述べたるが如く處置して、己れも亦た最後に死滅する。此の後四十年にして、神は先づガブリエル、ミカエル、イスラヒルの三天使を再生せしめて、喇叭の第三聲を吹奏せしめるのである。天使イスラヒルはエルサレムの岩頭に立上つて「再生の喇叭」を三度繰返して吹く。その響に各所

に散在してゐた無数の靈魂は集ひ来た空中に充滿する。同時に神は四十日間に渉る甘雨を降らし、て靈魂の宿、肉體の種子たるアヂフを活し、草木がその種子より萌出づるが如く、以前の肉體に生長せさす。集ひ來れる靈魂は各々其の肉體と結び合つて、曩に死滅した生物の總べては、一つも漏るゝ所なく悉く再生して、神の聖命なる審判の御座の下に跪くのである。再生した人間は、それが死亡當時の容貌骨柄であるが、正信なりし者が直立して歩行し得るに反して、不信なりし者は匍匐してゐなければ再生することが出来ない。更に他の傳説に由る時は、不信なりし者は其の生時に於ける不信暴慢の程度に應じて、各々十種の異形に化へられて再生すると云ふことになつて居る。即ち、ペルシャ教の道士は猿と化して再生し、現世に在りて貪慾飽くなかりしものは豚に、高利貸しにして貧者を虐げた者は顔は逆様に脊面し足は扭れて再生するし、不正なりし裁判官は盲目となり、僅かなる智能技藝に高慢なりし者は盲目にして聾啞となり何物をも知解し得ない不具と化りて再生せねばならぬ。又、現世に言行不一致なりし徒は、其の舌は咽喉の内方へ垂下へて言葉を出すこと能はざるのみならず、慘ましき黒血は唾液の如く常に口唇を溢れ出で、二目と見やられぬ無慘の姿となつて再生するし。隣人を無慈悲に苦しめた輩はその四肢を切斷せられて著蟲の如く轉び出でねばならない。常に嘘言を吐き、嗚偽を行ふた者は四肢棕櫚の幹の如く硬直

して再生し神の爲めに其の財の喜捨を惜んだ徒は再生するもその四肢胴體は腐爛して醜く穢なき醜骸によらねばならず、常に尊大にして事毎に高慢なりし者は瀝青を襲ねた衣裝を纏はされて重く苦しく、暑く苦しまねばならないと云ふのである。

既にして四度、喇叭は鳴り響いて最終の審判は開かれるのであるが、審判の場所は地上でありと云ひ、又た地下第二層であるとも傳へられる。その地上なりと云ふも亦た、或はシリヤの一地方なりとも云はれ、或は其の地の何處なるかを明かにするべからずと雖も、山も川も勿論何等の建物とて眼を遮るものなき漠々たる一大砂原の一望白砂清らかに敷き詰められた處であると云はれる。コーランはその場所に就て、唯一言「審判の日の地は以前の地にあらず。」と言ふて居るのみである。

神は多数の天使に莊嚴せられつゝ、雲に乗つて嚴かに審判の場に降り立ち、世界人類の始まつて以來、天使モアキバが不斷に記録したる下界一切の記録を前に展べ、豫言者を證人として其の左右に侍らせ、最後の審判は開始せられる。審判は第一其の生存せりし時代、第二其の生涯の履歴、第三富の程度、第四其の所有せし富を獲得し使用せし手段と方法と目的と結果、第五智識及び學力の程度、第六其の智識學力を利用せし方面及び其の結果に就て嚴肅に進行し行くのである。

審判は靈と肉と各別に試みられるので靈は罪を肉を嫁せんとし、肉は罪を靈に嫁せんとして、イソップ訓話に見るが如き説話は屢々演出されるのであるが、神は絶対に聖明である。罪を斷じて些毫も誤ることはない。罪の輕重は天使ガブリエルが司掌する大天秤で量り定められる。この大天秤はその巨大なること、天地を一度にして秤量し得ると傳へられてゐる位で、一方の皿は極樂の上に、一方の皿は地獄の上に吊り懸つてゐて、各人の善行惡行を各々秤量して比較し、其の善行の量、蟻螻の重量程の勝りありとするも、其の人は極樂に安住することを許され、これに反して、其の惡行の量の重きこと、喩へ末毫のそれ程なりとするも、其の人は永久に地獄の渦巻き上る火炎の内へ投せられるのである。斯かる審判は神の聖明なる、利刃の盤根を斷る如く、快刀の亂麻を拂ふが如く明確に、且つ迅速に進行するのであるが、審判さるゝ者の數は無量無數である。加之もそれは人類のみでなくして、ゲニイの類から鳥獸魚蟲の微なるものにもまで渉るので、審判は一年二年の短日月に終るべくもない。マホメッド其のコーラン「欽仰章第三十二」に於て一千年と云ひ、『階段章第七十』に於て五萬年と記して居る。

この審判の結果、斷罪せられた亡者共は、その極樂に行くも地獄に墮つるも等しく共に一度はシラ(Sirat)と云ふ。細き狭きこと秋毫の如く、鋭く危きこと刃の如き橋を渡らねばならない。その

何故に地獄へ墮する者も極樂へ行く者も、皆共に斯かる橋を渡る危險を冒さねばならぬかと云ふ説明は、回教傳説に聞くべくもないが、此思想は古くユダヤにもあり、又たペルシャにもある以上、回教はこれを其何れよりか、不用意に輸入して漫然と傳へたものらしく考へられるのである。

危くもシラー橋を渡り了せた亡者達は、その極樂に入る者は左し、地獄に行く者は右して彼等が現世の因の果として、至福と慘苦の非常に駈け距つた二世界に分れ行くのである。

回教の地獄は七段に分れてゐる。即ち、第一はエーンナム(Jehennam)と云ふて回教徒の不善なりし輩の墮ちる地獄で、第二はラドハ(Radha)と云ふユダヤ教徒の墮する地獄、第三はホタマ(Hotama)とて基督教徒のための地獄、第四はサーイル(Sair)と云ふてサビ教徒の墮する地獄、第五はサカル(Sakar)と云ふてペルシャ教徒のための地獄であり、第六はヤヒム(Jahim)と云ふ偶像崇拜の徒のための地獄で、第七なるハウキヤツ(Hawiyat)と云ふ地獄は七ヶの地獄中最苦惱の重獄であつて、これは表にアラアの信仰を装ひて、中心に其の實なき偽善者輩のために設けられた地獄である。蓋し、回教にありては實に、内心に信仰の誠實なくして而も外面のみ如何にも敬虔なる信仰を持するが如く装ふ偽善の徒を以て最惡なる行爲者とするのである。但し第二段より第六段に渉る五段の地獄を異教徒の爲めに設けたることは、自家宗教廣布上の一方便なることは

勿論であるが、こは甚だ汎愛なるべき宗教として偏狭なる譏りを逃れ難く、且つこの方便は往々にして用意なき宣教僧等に誤用されて反つて最悪行爲たる偽善をして旁午せしめてゐる。實に今日回教徒の半は、この偽善的回教徒であつて、回教の來世應報説の地獄極樂説の方便は不用意の間にその救度すべき自家信徒を謬つて、最苦の地獄に墮れてゐるのである。斯くの如くんば第二第三將た第六の地獄に墮することより救ふと雖も、そは何等の意味をなさずして、回教革命の一動機は斯かる間にも蟠つてゐるのである。但し、回教は地獄の苦惱に就ては餘りに多く誇張して説明してゐない。『地獄には各々大寒と大暑とあり。悪人は永久そこに留まりて苦痛を受けざるべからず。』水を求むるも、與へられず。煙を喫ひ焰を喰ひ、身は常に燃え熱して其苦云ふべからず。』か『大寒の風は吹きて皮膚を裂き、骨を凍らせ、氷りたる碧血は迸り出づ』等と論へてある。之れに反して、極樂を説くや、其の至幸至樂なる言辭の及ばん限りを盡せるかの觀がある。蓋しその郷土たるアラビヤの地は、既に地上の樂土にあらず、荒涼たる曠野は天然の地獄に比さるべきで、彼等は宗教に依つて人爲の極樂を想見するに當つてや、必ず彼等が欲求する理想の樂境を、彼等が表現し得る言語文章の極みを盡してなさんとすることを自然と云はねばならぬのである。

『第七天の下、神の下に極樂 (Jennat al Firdaus) あり。其處は最上なる小麦の粉を以て地を敷

き、紅白の花を以て飾り、建物の壁は黄金と銀とにして加之も珠玉寶石を以て鏤め飾りあり。樹の幹や將た枝は凡べて黄金にして、葉は悉く白金に光り輝き、香氣ある花は四時妍を競ひ、幸福の樹ツバ (Tuba) には柘榴葡萄なつめじゆる其の他の美果絶えず、木の枝は自ら低く垂れ下りて食はんと欲する時、自ら人の口に入る。肉を欲すれば美味なる鳥肉、獸肉、魚肉、望むが儘に調理せられて運ばれ、生命の川カウザル (Cawthar) は或は乳、或は酒、或は蜜等人の飲まんと欲する凡べての飲料を湛へ、酒は飲むとも頭を害せず、衣は悉く高貴なる絹で金銀珠玉を鏤めて裝飾してある。人界の女の如く神が粘土を以て造り給ひしものにあらずして清麗豊艶妍美なる天國の女性七十二人は其の婦妻となるべく、八萬の奴僕と天國の美少年とは常に侍して諸用を辨すべく、食事を欲すれば三百の美少年は各々黄金の皿器に大宰の珍肴を盛つて膳すべく、騎さんと欲すれば奴僕は天の駿馬に黄金の鞍を置いて曳く』以上はコーランの諸章に涉つて斷片的に記述せられたる所を綜合した回教の極樂の様であつて、尙この外に數多き回教の諸傳説中より極樂に關する説話を考究するならば、彼等が理想とする快樂希望を側る趣味多き論文は成るべく、極樂の女性に關する彼等の思想がペルシヤの極樂 (Minu;) の天使ザミヤッド (Zamiyad) の思想に類すること等を研究すれば甚だ興味あるものとはなるが、吾等は如上彼等が極樂の記述に見て、彼等の極樂

なるものが甚だしく肉感的であることを看取しきへすればよい。實にマホメッドは其の經典コーランの隨所に於て屢々極樂を説くこと、如上肉感的なる以外、平和とか安心とか將た立命等、精神的幸福を意味する文字を一度も使つてないのである。

マホメッドは又た、その極樂の至樂至福を説くに誇張すべき文辭の及ばざることを慮ふて、地獄と極樂との位置に就て回教獨特の説をなした。『極樂と地獄と相去る甚だ遠からず。只僅かに一重なる壁 (Ort 壁は Arab) に距てらるゝのみ』と以て大寒大暑に虐げらるゝ地獄の徒は至幸至福の極樂の様を望見すべく、極樂の徒は地獄の阿鼻叫喊を聞くことが出来るのであると云ふて居る。これは甚だ慘酷な説法であるが、一面に又た之れに依つて極樂の樂と地獄の苦とは相對的に一方は益々樂となり、他方は彌々苦となる譯である。尤も、この兩境界一重境界説はユダヤ教にもあることで、マホメッドはそれを借用して更に峻酷なるものとしたものらしくある。ユダヤ教のそれは甚だしく厚く高くして兩境互に交通し望見し得ざる底のものであるので、この思想は回教特異のものとして特言することが出来るのであり、回教々々の賞罰觀念の峻烈なるはこの一事を知つて全豹を推すことも出来るのである。

來世に於ける女性に就ては、アラは毫も兩性に對する賞罰を區別せないもので、其の毒婦は地

獄に、善女は極樂に男と等しく安住させられるのであるが、婦人は婦人として自ら其の欲求する所も異なるものあるべく、マホメッドは慧しくもこれを看破して、『醜婦は美人と化り、老婦は妙齡の婦と化つて極樂に入るべし。』と説いてゐる。實に若くして美ならんことは婦女が第一の欲求であらねばならぬ。

終りに回教々々の信仰上の方面として一種の運命説を略述せねばならぬ。彼の現世に起る善惡幸不幸等種々雜多なる凡べての事件は、一つとして神意に依らざるものなく、神は實にその凡べてをも豫め定めて神の豫録に明記して置き、これを神秘の裡に秘して敢て人間をしてその毫末をだも豫知せしめないものであるが、人は既に定められたる運命の下に生れ、長じ、働き、馳ては死し、死して神の審判を受けて來世の運命を定められるのであると云ふ思想が即ちそれであつて、これが宗教々義となつた時、『汝等如何に聰明慧智なりと云ふも未來を窺ふことを止めよ。汝等の未來は只神のみ獨り知食す所にして、汝等の努力は毫末も汝等の未來を轉ずるに功なく、汝等の用意も現在の運命を轉ぶること能はず。信者よ、唯須らく運命に従つて未來の幸福を神に祈るべし。』と云ふ危険なる説法となるのである。幸に教祖マホメッドは巧にこれを善用して其の聖戰の間、士卒を激勵することが出来たが、一步この教法を誤ればこの宿命記は他力本願の教となつて、

信者をして現世的努力を忽にして無氣力なる厭世主義者と化する危険がある。又實際、回教徒の現状を見るに、この宿命説に禍せられてゐることが深甚である。次に述べんとする回教の外制的嚴格なる儀律主義が其の精神を沒了して徒らに莊嚴せられたる宗教の形骸を守るの醜をなしたことは回教痿廢の源因たるには相違ないが、その根本は實に回教の宿命説に胚胎せるものと斷すべきである。

第六章 修行

—五箇信條—祈禱—清淨—割禮—齋食—回教本山—巡禮—喜捨—

既に宿命説は信せられ、地獄極樂説は説かれた。彼等回教徒は神に依つて豫定せられて祕せられ、各人の人爲的に如何とも變更し得ざる運命の支配下に生活し、來世に於て墮地獄の苦難より遁れて極樂の至福を享けんとするには、如何にして此希望を満足せさせ得るか。彼等は唯一至上神アラを敬仰し、其の神意の儘に敬虔に行爲する外にはその希望を満足せしむべき途は無い筈である。回教々義は之れを設定して五箇信條(Rukun al-Islam)と云ふものを定めてゐる。第一には無始無終唯一至上神アラの信仰、第二に一日五回以上の祈禱禮拜、第三に回曆九月ラマザ

ンの一月ヶ月間の齋食、第四に聖地メッカへの巡禮、第五に神の爲めにする敬虔なる信者への喜捨の五ヶ條がそれである。第一のアラの信仰は回教々義の理論的方面即ち信仰であつて、爾餘の四ヶ條は實行的方面即ち修行(Din)である。

偶像破壊はマホメッド開教の目的であり、偶像排斥は回教精神の一である。従つて回教は其の信徒が常住禮拜すべく禱祈すべき天神アラを偶像することは絶対に出来ない。於是、祈禱禮拜は回教修行中最も重大なるものならねばならない。偶像其の他、人間の五感に依つて意識されるべき用意なきものは、得て人間の注意の外に閑却し去られ易いものである。神を偶像其の他容易に意識され得べき物象を以て表顯することを絶対に拒否する回教は、他に何等かの方法を以て彼等の神が不斷に存在せることを記憶し続けしめられねばならないのである。宜哉、マホメッドは祈禱を以て其の修行の最重大事となし「祈禱は宗教の柱にして、天國の鍵なり。」と教へたのである。但し斯く重大なる祈禱、それから爾餘の三修行も其の人清淨潔白にして些の穢れなしてふに立脚してゐなければならぬのである。

『凡べての宗教修行は清淨の上に築き上げらるべく、祈禱の鍵は實に清淨のそれであり、清淨ならざる者の祈禱は決して神に聴かるゝことなし。』とはマホメッドが清淨の重大事たることを

教へたものであつて。回教徒の宗教修行は先づ汚穢を清むることに初まるのである。而して、汚穢を去り身神を清浄にする方法として、肉身の沐浴、精神の齋戒を目的とするゴスル (Gohl) と、顔と手足とのみを洗淨するワザ (Wada) と云ふ二種がある。前者は本源的意味の清浄法であつて、後者はその省簡されたものである。一體、回教にては生殖上の諸行爲と死屍とを穢漬の最なるものとするので、従つてゴスルは死屍に近づいた場合、送葬した場合、女と交媾した場合、手淫、鶏姦、夢精其の他性慾的行爲及び衝動のあつた場合等に實行せらるゝ方法であつて、祈禱禮拜讀經等に際し、或は自家の業務を執らんとする時、ゴスルの清浄法を行ふことを理想とはするが普通は省簡してワザを實行するのである。回教にあつて自己の業務を祈禱其他の宗教儀式と等しく神聖視することは大いに意義ある精神であつて、他日何人が立つて新回教を宣布するある日、我が日蓮聖人の『宮仕へを法華經と思食せ』の道徳は、この精神より生れ出づるに相違ないのである。治世産業皆之れ神意なりてふ精神は今日回教徒間に甚だ力めて説かれては居ないが、これは確かに回教精神の美なる一つなのである。是等沐浴洗淨の齋戒法はユダヤ教徒も等しく實行する所であり、マホメツドの傳ふる所に依ればアラビヤ人の祖アブラハムが清浄の天使ガブリエルから傳へられたものであると云ふことになつて居るが、斯かる清浄法は古く回教以前の原始アラビ

ヤ人の間にも既に實行せられて居り、アブラハムを祖とするアドナン族以外の諸族間にも實行されて居たので、思ふに、こは熱帯及び亞熱帯の住民が當初、意識なき自然的要求に迫られて行ふてゐた冷水浴が漸次にして宗教的意味をとつたものらしくある。

此沐浴清浄の二方法も、人の健康上將た處の地理上、水を以て爲し得ない場合は、清浄なる砂を以て水に代用することが出来ることになつてゐる。そは兩掌に砂を掴んで宛も水を被るが如く頭上からあびるのであつて、砂を代用した場合は水を以てするワザの方法は否認されるのである。

回教修行の精神以上に甚だしく外制的に嚴格なるは、其の齋戒清浄法に前述した二法を以て足らずとして、頭髮を櫛り、鬚髯を刈り、腋毛を抜き、爪を剪り、更に男女陰皮の一部を切斷する所謂割禮をさへ斷行する。

割禮 (Katan) とは、男兒はその陰莖包皮を、女子は陰唇の一部分を切斷する所謂彼等の宗教行爲であつて、イスマエルが古くアラビヤに傳へたものと云はれてゐるが、それより以前の原始アラビヤ人間にありて既に實行されてゐたらしく、其の起源は後年の如く宗教的意味よりするものでなく、或は今日尙ほボルネオ内地の野蠻人が勇者たる表明となし以て婦女の歡心を贏ち得んが爲めにする。殊更に自己の陰莖を傷ける的の習風であつたかも知れない。或は又、オーストラリ

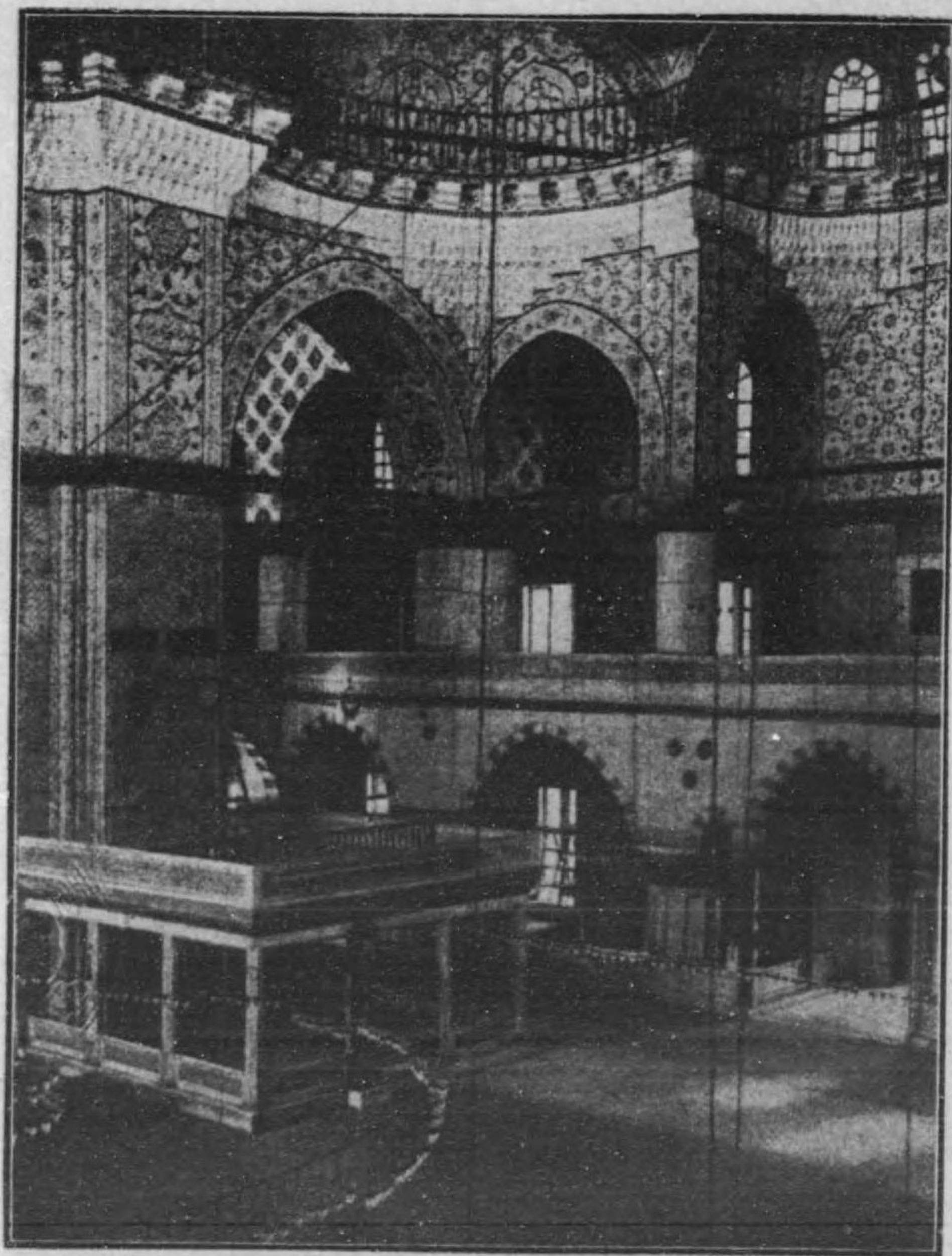
ヤ其の他太平洋諸島の蠻人がせる如く少年が一人前の人間となつた事を表明する所謂入社式の儀式として行はれてゐたものであつたかも知れない。然し、割禮の宗教的意味の顯著なるものはユダヤ教に初まるものらしくある。ユダヤ人が赦されてバビロンの配所より故郷の地に歸還するを得るや、戦々兢兢としてヤーベの神命に違背せざらんことを維れ力め、彼のバラモンの律法主義も三舍を避くべき煩鎖なる儀律を制定して勵行したことは前章に略述したが、其中、特にユダヤ人に向つて勵行を迫つたものは割禮であつたのである。レヰ記第十二章の第二及び第三節は明かに『婦女若し種を宿して男子を生み、第八日に至らば嬰兒の前の皮を切る可し。』と制定してゐるのである。尤もユダヤに於ける割禮の風は古くモーゼが其の兒に施したるに初まるゝ傳へられ、其れより代々ヤーベ信仰の宗教にては、その宗教修行の一つとして實行せられてゐたものであり彼の豫言者エレミヤの如きは既に其の蠻風なることを指斷して、『心の割禮』を教へた事さへあつたのであるが、ユダヤ教に至つて、こは復活せられ更に従前より以上に勵行されたのである。マホメッドは又た、これをその宗教中に傳へたのであるが、其の實行は寧ろ否認してゐたものらしく、そのコーラン中にも多く記してゐないし、回教徒が豫言者はその生れざるに既に割禮されて居り現世に於て敢て割禮するの要なき者なりと信せられてゐる邊より見て、マホメッドそれ自

身が割禮せられ居りたりしや否やさへ疑問なのであるが、今日回教徒の多くは割禮を以て重大なる宗教行爲と思爲し、五箇條以上に重大視し嚴行されてゐる地方もある。南洋の回教徒の如きは、その一つである。

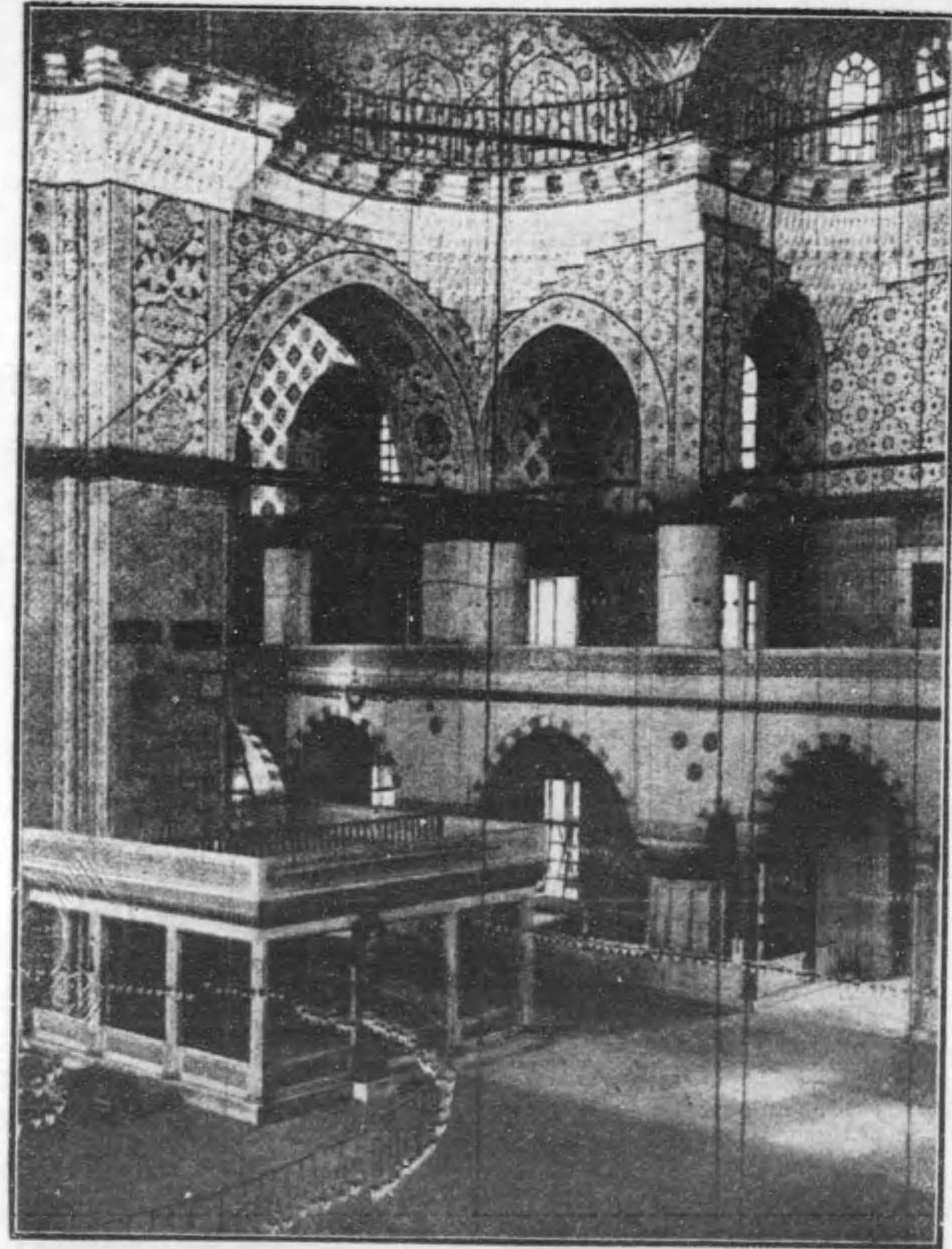
回教にありて、等しくユダヤ教の如く割禮を以て重大なる宗教行爲として勵行し居り、そはユダヤより傳へられたるものとすも、其の意義に於て多少の相違あり、其の實施の時機にも亦、相違がある。回教の謂ふ所に由れば、この割禮の修行はゴスル、ワヅの二淨行と共に、アブラハムが清淨の天使がブリエルより傳へられたものと云ふので、清淨の天使がブリエルは實に天神が創造し給ひし萬物中第一の清淨潔白なるものであつて、其の容姿の端麗なると精神の淨白なることは、回教々義が其の信徒に要求する理想的清淨潔白の典型なりと思爲されて居るのである。依是、之れを觀れば回教の割禮は單に汚穢を禊ひ清淨を期する一方法手段であつて、ユダヤ教の如く犠牲の意味なきものである。他に同じく回教傳説の語る所として、アダムが神命を蔑して彼の天國を追はれ慚悔して措かず、再び神命に背かざることを誓約して割禮を行ひしを以て嚆矢とするもの也と云ふのがあつたが、是れに依つて觀るも尙ほ犠牲を意味する以上に贖罪を精神として居ることが看取されるのである。又た割禮の年齢に關しても彼のレヰ記に所謂、生後第八日に施さるゝ

ものにあらずして、イスマエルの子孫なるアドナム族間にては、回教宣布以前より兒女十二三歳に達するを俟つて施行されたものらしく、今日回教徒間にあつては普通六歳乃至十六歳にして割禮を受けることになつて居り、且つユダヤ及び回教以前のアラビヤ人間にありて父母が其兒を割禮したるに反し、回教僧侶に依つて割禮さるゝことゝなつて居る。彼等回教徒にありて割禮は、基督教徒の洗禮のその如く、回教徒たることを表明する入門式であつて、未だ割禮を受けざる回教徒の子弟は回教徒として遇されず、従つてコーランの素讀を習ふことも出來ず、祈禱、禮拜、齋食等の修行をも強ひられないのである。

如上、汚穢を袂ひ身神を清淨にして次に、祈禱禮拜の修行は如何に行はるべきかと云ふに、コーランは少くも一日五回以上の祈禱禮拜を要求し、其の最小限五回の時刻を明示してゐる。即ち朝日出前と、太陽が西に傾き初めたる正午過ぎと、日の將に没らんとする少し前と、晚即ち日没したる後と夜初更との五回であつて、この度数は彼のユダヤ教或はサビ教のそれに比して確かに多いのであつて、これは實にマホメッドが祈禱を以て宗教修行の第一義とする理想である、其の傳説に従へば、こは彼れが開教の第十二年の一夜、天國に旅行して直接アラーより指教された所に依ると云ふことになつてゐる。その祈禱し禮拜する對衆が天神アラーなることは言ふ迄もない



回教寺院之内部
 内堂『寺ンマイラス』ルプーノチンタスノコ
 (壇教説ハ壇高ノ面正)



回教寺院之内部
内堂『寺シマイラス』ルプーノチンタスコ
(壇教説ハ壇高ノ面正)

回教

ものにあらずして、イスマエルの子孫なるアドナム族間にては、回教宣布以前より兒女十二三歳に達するを俟つて施行されたものらしく、今日回教徒間にあつては普通六歳乃至十六歳にして割禮を受けることになつて居り、且つユダヤ及び回教以前のアラビヤ人間にありて父母が其兒を割禮したるに反し、回教僧侶に依つて割禮さるゝことゝなつて居る。彼等回教徒にありて割禮は、基督教徒の洗禮のその如く、回教徒たることを表明する入門式であつて、未だ割禮を受けざる回教徒の子弟は回教徒として遇されず、従つてコーランの素讀を習ふことも出來ず、祈禱、禮拜、齋食等の修行をも強ひられないのである。

如上、汚穢を禊ひ身神を清淨にして次に、祈禱禮拜の修行は如何に行はるべきかと云ふに、コーランは少くも一日五回以上の祈禱禮拜を要求し、其の最小限五回の時刻を明示してゐる。即ち朝日出前と、太陽が西に傾き初めたる正午過ぎと、日の將に没らんとする少し前と、晚即ち日没したる後と夜初更との五回であつて、この度数は彼のユダヤ教或はサビ教のそれに比して確かに多いのであつて、これは實にマホメッドが祈禱を以て宗教修行の第一義とする理想である、其の傳説に従へば、こは彼れが開教の第十二年の一夜、天國に旅行して直接アラーより指教された所に依ると云ふことになつてゐる。その祈禱し禮拜する對衆が天神アラーなることは言ふ迄もない

ことであるが、そのアラは嚴かに偶像することを禁せられてある。彼等は敬虔にアラを畏れ
 尊び崇めて祈禱し禮拜するにしても、唯漠然と宇宙に澎湃たるアラに禮し拜するでは、其の宗
 教感情は些か不満足であることを否めない。於是、回教は祈禱禮拜の方向、所謂ケブラ (Kibla)
 を定めてある。このケブラも回教の獨創にあらずして、ユダヤ教にも定められてあることであ
 つて、ユダヤ教のそれはエルサレムを以てするに反し、回教ではメッカを以て祈禱禮拜のケブラ
 と定めてある。尤もコーラン中にはケブラをエルサレムと明示した章句はあるが、こは前々章に
 も一言して置いた如く辭句存して其の精神の失せたる章句であつて、回教のケブラは世界何れの
 地よりしてもメッカの方向を以てそれとする。彼の回教寺院 (Mosque) の堂奥、讀經壇の脊後の壁
 に設らへられたる壁龕は、必ずメッカの方向に當るものであつて、これをメラブ (Mihrab) と云
 ひ、祈禱禮拜のケブラを指示してゐるものである。彼の基督教會堂の壁龕 (Niche) に十字架或は
 聖母マリヤの像等が安置されてあるに反し、回教のメラブには何等の偶像將た神聖なる記號の
 如きさへ現はれてゐないことは勿論である。

祈禱を正式に行ふとすれば、多數相集つて寺院の床上に跪座し祈禱僧の差配下に一齊に禮拜し
 祈禱するのであるが、回教の聖日金曜日の正午過ぎの祈禱を除いては、他は各人任意に自家の室

内に或は路傍の樹下石上に或は船舟の中にあつて祈禱し禮拜して居る。この一日五回の祈禱は旅行中であらうが、兵馬劔戟の戦場であらうが、苟くも回教徒たるものゝ一回だも癡することの出來ないものであつて、篤く病みて四肢の自由を缺きたる者も、尙ほ心中にメッカの方向を志して静かに黙禱を捧げねばならないのである。但し今日の回教徒悉くが敬虔であり、この祈禱禮拜が嚴行されてゐるやは本書の論すべき限りでない。

回教寺院は其の外壁に高く聳立つ一或は數基の尖塔を有つことを其の建築上の特徴とするが、この尖塔はミナレ(Minaret)を稱するもので、其の語源は或はマナール(minar)であり、點火する場所の謂であるかも知れられず、又た清時代の書『羊城古鈔』には廣東の回教寺院懷聖寺の狀を記して、ミナレのことに及び「輪困、凡ソ十有六丈五尺。廣人ハ呼ンデ光塔トナス。」とある等より推して、或は昔時燈明をミナレ塔上に點じたものであつたかも知れないが、本來の目的は祈禱時に當つて呼報僧(Muezzin)が塔上に登り高聲に祈禱を呼報したもので、呼報僧の呼報に續いて教徒は淨身し、寺院に集り、或は各自任意の場所に恭しく唱題し、コーランの政節を朗誦し、神に捧ぐる讚美の叫びを擧げて祈禱は進行するのである。

Allahu akbar ! Allahu akbar ! Allahu akbar ! Allahu akbar !

Aslahadu an la ilaha illa Allah ! Ashhadu an al ilaha illa Allah ! Ashhadu anna Muhammad

rasulu Allah ! Ashhadu anna Muh' ammad rasulu Allah !

Hayya ala as-salati ! Hayya ala as-salati !

Hayya ala al-falah ! Allahu akbar ! Allahu akbar !

Lailaha Allah !

神は至上なり。神は至上なり。神は至上なり。神は至上なり。神の唯一なることを信ず。神の唯一なることを信ず。マホメットの神の使者なることを信ず。マホメットの神の使者なることを信ず。祈禱せん哉。祈禱せん哉。禮拜せん哉。禮拜せん哉。神は至上なり。神は至上なり。神の外に神あることなし。

以上は、彼等回教徒が祈禱の時、その正式なる寺院内に祈禱僧の唱題に復唱し、その家庭に於ける場合、家長或は他の導者が唱題に復唱する祈禱の文句(Azhan)であつて、特に早朝の祈禱の際は「禮拜せん哉」の次に As-salatu kairun nina an-nannu ! (祈禱は睡眠より優れり)を二度繰返し唱する。スンニ派では尙ほその次に Hayya ala kairi al-amali ! (聖き業務に就かん哉)を二唱反復する。この祈禱唱題は回教徒にとりては、我等が國歌「君が代」に對するその如きもので、彼等

は何時如何なる場合でも、これを聞かば直ちに跪座して敬虔を態ふのである。婦女子、醉漢、狂人、不淨なる者は斷じてこれを口にする事の出来ないことになつてゐて、彼等回教徒が敬虔に莊重にこれを唱題する時、L音の多きこの唱題は、妙に聖に貴く響いて、吾人異教の者をしてさへ一種云ふべからざる宗教的讚美の情を起さしむるに充分である。

祈禱に際し身神共に清淨ならざるべからざることは既に業に述べたことであるが、尙ほ祈禱をなすに當つて華美に装ふことは禁忌せられる。こは慕無き人間界の華美を以て萬能なる神に誇らんとする虚榮の菲禮であるてふに因するものらしく、回教の祈禱は實に身神共に清淨なるを質素に装ふて敬虔になされねばならないのである。其の主意は現世の過去現在に於ける神の加護に對する感謝であり、現世未來に於ける神の冥護を祈求するものであり、演べては現苦消滅壽福無量の祈願であるべきであるが、回教の天神を説くや、甚だしく其の嚴峻なる神威の一面のみ力説されたるの嫌あり、且つは其の布教の手段として、所謂劔と經典と併用主義を把持したる歴史的色彩とに因つて、教徒をして甚だしく普遍なる神愛の一面を覺悟せしめずして、其の祈禱禮拜の修行の如き、其處に神人相通する愛の美情を缺いてゐて缺點を保存してゐるのである。其の教習が祈禱に際して男女兩性の差別を設けて、公の祈禱禮拜に婦女子の參列するを嚴禁し、引いては教徒

自宅の祈禱にも婦女子の供にすることを嫌忌し、婦女子憐むべくも不用意の裡に神より離されつゝある有様で、若し婦女子にして祈禱せんと欲せんか、私かに自己の居室内にて爲すか、未だ男子の集まらざるに先つて寺院に詣つて惶惶として禮し禱らねばならない仕儀となつてゐるのである。恚くてコーランの所謂『男は常に女より勝れたり。神は實に恚く造り給へり。』は力あり、『夫は婦の衣装にして、婦は夫の衣装なり。』てふ男女無差別同等説は、唯僅かに文字通りに男が夫となり女が妻となつた時にありてのみ、その回教儀律が社會道德上の夫婦關係を圓滑せんとする文法として認めらるゝに止まるものとなつたのである。

飲食は人の生存上、缺く可からざる重要事であることは勿論であるが、心靈上の思念の徒よりしては、時に往々悪魔と同一視さるゝことがある。彼の釋迦牟尼が苦行林の斷食思索は吾等が幼きより知る所であり、印度バラモンの徒が心靈上の妙諦を斷食苦行の裡に求めたことも夙く聞知する所である。マホメッド亦たヘーラ山中の默念に、絶對的斷食をせざりしとするも、飲食を攝して只管心靈上の思念に耽り、遂に一夜天神の聖語を聽くを得て回教宣布の獅子吼を發したことは既に述べた所である。獨りマホメッドのみならず、當時アラビヤの生活に餘祐ある富貴の曹は、年の幾期間かを齋食に費して心靈上の神祕探求に苦行したものであつたし彼のヘブライのヤーベ

信仰の宗教がユダヤ教の嚴格なる儀律主義に變ずるや、齋食のことは外制的に強要せられ、回教以前のアラビヤの原始宗教にありても、其の徒は回曆第七月 (Rabi) に於て齋食のことは修行せられてゐた。マホメッドがその宗教の修行の一つに採用するに至つては、其の主張する所、ユダヤ教の齋食に依つて肉身より貪欲の罪を禊ひ、神を默念して内心の瀆れを清むるてふ宗教的意義に加ふるに、暖衣飽食の富者は齋食に依つて、常に飲食に飽くを得ざる乏しき徒の痛苦を分ち嘗むるてふ道徳的同情心喚起の意義を以てしたのである。飲食を以て時に惡魔と同一視する宗教家は、唯に間渴的なる齋食を以てその宗教修行の一要義とするに満足せずして、日常飲食の事物に迄何等かの制限を附して、彼のユダヤ教に見るが如き嚴格なる飲食法の制定となる。回教にありてもユダヤ教のその如く嚴格ならざる迄も飲食に關する儀律は制定せられてゐる。然しこのことは次章に述べべくして今は齋食の修行に語を進める。

回教の齋食 (Fest) は (一) 肚其の他、肉體各部を貪慾の惡徳より清淨する爲めに (二) 耳眼鼻舌等肉體の感覺機關を食物の瀆れより清淨する爲めに (三) 俗心を法心に訓練し、思念を神以外一切の俗事俗物より斷つことを目的とするものであつて、回教第九月の新月の夜より、次の新月の夜迄三十日間、續け行はれべきものであつて、此の齋食期間は生殖行爲及び死の穢れより遠のき、飲

食を斷ち、香を嗅ひ、灌腸注射等に依つて外物を體内に攝り容るゝことは勿論、唾液を呑み込むこと入浴すること、さては呼吸するにも靜かに死んど呼吸さへせないことを理想とする位い、戒慎して一切の外物を攝容せざる様にせねばならないので、異性との交媾は勿論のこと、抱擁、接吻、握手、交語さへ斷禁せられるので、斯くの如き一ヶ月間の齋食は甚だ苦痛と云はんより寧ろ不可能の如く思はれるのであるが、事實は日出より日没時迄の間勤行さるべきもので、夜は飲食することも自由である配遇者と交樂することも罪惡ではない。とは云へ齋食修行は決して容易なものではなく、若し齋食期即ち第九月が酷熱なる夏若くば玄寒なる冬に當つた場合、此の修行の至難なるは、往々にして齋食者をして死の危険に瀕せしむることがあるのである。(回教曆は純全たる太陰曆であつて、一年は三百五十四ヶ日、而かも其の間支那の太陰曆に見る如き閏年の制なく、従つて三十三年目毎にでなければ年の月日と地球の太陽に對する位置とが一致することがないのであるから、第九月が三伏の夏季となり、或は玄寒の冬季に當ることはあり得るのである。) 翌第十月 (Shawwal) の朔日即ち一ヶ月間の齋食を修行し終つた日は、所謂「齋食期明け」(Id al Fitr) で、大いに親戚故舊を招じ、且つは夫等に招かれもして、盛んに飲み且つ食ひ語り談じて御祭り騒ぎを續ける。南洋の回教徒は他の幾多の回教聖日にも越えて、此の日を盛大するので、異教徒をし

て誤つて『馬來の正月』(Tawu-bahru)と稱させてゐる。

回教以前のアラビヤ人が同じく齋食期を定めて第七月としてゐたのに反して、回教が第九月と定めたことに就ては、又た宗教的な傳説のある所で、コーランにはコーランが天使ガブリエルに依つて天神から賜はつた月であるからと語り居り、他はアブラハムもモーゼもエスもマホメッドも皆共に第九月に於て天神の聖啓を覺悟したからと云ふて居るが、何れにせよ回教が第九月を以て他の月に比し神聖なる月とせることは明かである。

齋食の修行は教祖マホメッドが諭へて『齋食者の口臭は麝香以上に神に喜ばる。』と曰つてゐる如く、祈禱禮拜に亞ぐ重要な修業であつて、其の規定されたる一ヶ月間は苟くも回教徒の齋食せずと云ふことの出來得ないものであるが、旅行中の者、疾病に悩める者及び哺乳を要する嬰兒ある母は例外としてこの修行を免除せられ、未だ割禮を受けざる回教徒の子弟は回教徒として遇せられざるの故を以て齋食の必要を認められてない。この外、自己の業務上事情息むを得ざる者も亦た齋食をなさず、或は其の期間を短縮することを得るのであるが、斯る者の斯る場所は、其の者相應に敬虔なる貧者に淨財の施與をなさざる限りは宗教上の罪惡となるのである。

回教々義の規定したる齋食は大略前述の如しとして、マホメッドは尙ほ『神聖なる月の一日の

齋食は他の月の三十ヶ日のそれより優る。』と諭へたるに因つて、敬虔なる回教徒は前述第九月の齋食以外にも、屢々所謂神聖なる月の或る日をトして任意齋食を修行する。而して彼等の以て神聖なりとする月は、第九月を勿論のこととして、他に第一月(Moharram)第七月十一月(Dulhijja)第十二月(Dulhijja)の四ヶ月である。就中、第一月の十日(Ashura)と第七月の十日(Tisri)とは特に齋食すべき良辰と思爲されてゐるのである。

次はメッカ巡禮(Hajj)の修行であるが、それに先つてメッカ神殿の様を略述する必要がある。神殿はカーバ(Kaaba)と稱し、メッカ市の中央に建つ神聖寺(Mesjiti al alharam)の中心であつて、其の建築は全部石材を以て高くメッカの一般住宅の上に聳へ建ち、様式は平面的にも立面的にも方形で、丁度六面立方體の箱様のものを安置した如き工合である。従つて一般アラビヤの建築と甚だしく異つて居るので、其の名をカーバと云ふものも、其の意『異なれる物、或は事』であつて、其の名の由來は明かに其の建築の異様なるに起ることが知られる。で、彼等は公式にこの神殿を呼ぶ時、『神の宮殿』(Bait Allah)と云ふのである。神殿の大いさは南北六間、東西五間五尺、棟の高さ六間四尺で、人口は只一ヶ所丈け其の東側壁の南端に開き、而も地面より一間高く外部よりは梯子に依つて攀じ入らねばならない。然し殿内の床は戸口の下框と同一平面に鋪かれてゐ

るのである。殿の屋根は殆んど傾斜なき二重屋根であつて、三基の十角柱はこれを支へてゐるのである。その柱間に桁した鐵棒からは銀製のラムプが吊り下げられてゐる。殿の外部は高貴なる黒絨子で覆はれ、黄金の延金を以て縁取られてゐる。この黒絨子は毎年新しきものと取換へられるので、それは教皇の仕事の一つであつて、現今は即ちトルコ帝が教皇としてこの義務を盡くしてゐるので昨年如き、トルコ國が國運を賭して敢行せる戰爭中なるに關はず尙ほその義務を果さんとした。然しそはアラビヤ反軍のメッカ占領に阻まれて果たさなかつたので昨年はこの年行事は行はれなかつたのである。

殿堂の東南隅に徑三尺餘の黒石があつて、其の半は地中に埋まり、地上五尺許り現はれてゐる。こは回教徒がアララの左手が地上に垂れ下つたものであると稱して神聖するもので、銀の延金を以て莊嚴してゐる。回教傳説に依れば此の石は天國の石であつて決して地上のものではないのである。其の昔、アダムが天國を追はれた時、共に地上に落下したものである。であるから神が大洪水を遣してノア及び其の他少數の義人以外の罪多き人草を滅ぼし淨めんとした時、この石を再び天國へ運び移した。が、後アブラハムが今の地に神殿を建立した時、天使ガブリエルが彼れの爲めに神に乞ふてその堂側に安置してやつたのであると云ふことになつてゐる。又た此の石は元と雪よ

りも白いものであつたのであるが、久しく人界に横はり人間界の諸々の罪惡、將た婦女が月經の穢れに汚漬されて、今日見る如く黒色に變じたのであるが、そは單に表面のみで石の本質に以然として純白であると信せられてゐる。嘗てカルマチャ人がメツカを侵した時、この聖石を奪ひ去つたことがあり、メツカ人は此れを取戻すに金五千片を以てカルマチャに貢したと云ふ記録も傳はつてゐる。

神殿の北側には、イスマエル及び其の母ハガルの墓がある。相並んだ二基の墓は其の北方を、長さ七十五尺の半圓形をなす白石で限られ、神殿の屋根から樋を引いて神殿の屋上に溜つた雨水を注がれる様になつて居る。神殿の樋は最初木製のものであつたのであるが、現今のそれは黄金で造られてゐる。

神殿の東にアブラハムの控所 (Makam Abraham) と云ふ無蓋家屋があつて、其の内に回教徒が以て神聖なりとする石が横はつてゐる。此の石は鐵匣を以て圍まれアブラハムが最初カーバ神殿を建立する時、足場としたものであると傳へられ、石上、明かにアブラハムの足跡を印してゐると云はれてゐるもので、コーランはこを巡禮者の禮拜すべきもの、一つと指定してあり、巡禮は其の修行の一つとして、この石を周つてゼムト、聖泉の水を飲むのである。

アブラハム控所の南にゼムク、聖泉は湧く。聖泉は昔ハガルが其の兒イスマエルの爲めに飲用水を求めて歩いた時、神が與へ給ふた所であると傳へられてゐて、穹天井の小堂で覆はれてゐる。従つてそのゼムク(Zamzam)の名は、ハガルがこの泉を得た時、喜び溢れて高聲に「ゼムク」と叫んだに由來すると云はれる。ゼムとは蓋しエヂプト語の止まるの謂、彼女は涸渴なるアラビヤ曠野の内に、僅かにこの一泉を得て「止まらん哉、止まらん哉(此處に斯くの如き清泉あり)」と叫んだものであらう。然し、又一説にゼムクは單に泉水湧出の聲を擬したるものであると斷じたものもある。回教徒がこの泉水を有難がることは吾人異教徒の想像外であつて、巡禮者は各自携行する容器に詰めて家郷に苞し、留守居の家族をしてその餘福を分け得さすのである。

神殿の周圍は銀の擬寶珠を戴いた欄杆を周らし、杆に東方に開いて、其處に神聖門(Bab al ahram)が立つてゐる。門外は碓道直に礫庭の間を貫いて、神聖寺の正門なる聖者門(Bab al Nabi)に通じてゐる。欄杆の外には北西南の三ヶ所に參拜者の控所(Makam)が設けられてあつて、是等の控所はスンニ、シャ、シャフキ三宗派各自の特設にかゝるもので、他の宗派に屬する者は入ることは出来ない。従つて斯く特設の控所を有たない宗派の者は、相供に東方のアブラハム控所に入るのである。

ゼムク、聖泉の背後に當つて、二箇の泉水が設けられてゐる。これは參拜者が顔手足等を洗淨する爲めの設備であつて、何れの回教寺院にも必ず設け置く所のものである。

カーバ神殿の抑々は、アダムが天國を追はれて地上に來り、己れが天國にありし時の記憶に基いて地上に天國の家を建てんことを欲し、幸に神の允許を得て其の兒セスと共に建てたもので、其の後ノアの大洪水に潰倒して仕舞つたが、アブラハムが天神の啓示を得て其の兒イスマエルと協力して再建したものである。勿論其の様式にアダム、セスの建立せしものと寸毫も相違せる所なき筈で、爾後、幾星霜の風雨に破損しては修築し、異民族侵寇の兵燹に破壊されては再建したのではあるが、其の様式は以然として舊に則り些の變改を適用したことなく、現今のそれは回曆第七十四年即ち西紀第六百九十四年にユッフ(Ebn Yusuf)が改築したるものを多少異式の點ありとして、更にアッバス朝第五代の教皇ラシド(Harun al Rashid)が古典を調べて改修したものであつて、彼等回教徒の信する所に従へば、實にカーバ神殿は地上にある天國の家屋の模型であることになる。

神聖寺はカーバ神殿を周つて建てられたるビザンチン式の建築であつて、東西六十六間、南北四十八間、其の狀は宛としてカーバ神殿の外郭の如く、六基のミナレは方尖直に天を衝き、諸門

は外壁をアーチ型に穿つて四方に開け、東側を正面として聖者門を正門となし、平安門 (Badr Salam) アツバス門、アリ門は並び開いてゐる。堂内は周廻して一大廻廊の状をなし、堂の屋根は相並ぶ數箇の莊麗なる穹天井になつて居り、堂の柱は悉く黄金色に鍍金せられ、半月型或は尖塔等の裝飾が現はされてゐる。柱と柱との間には、天井より銀のラムプが懸け下り、是等無数のラムプは皆悉く常夜燈である。

神聖寺は元來、獨立したる寺院として建立されたものでなく、最初教皇オマルがカーバ神殿の外郭として大略建築したのを、爾後數年間に互つて敬虔なる富者が莊嚴し増築して今日のものとなつたのである。

回教徒は常に神聖寺の一部のみならず、メッカ全市をも聖地 (Haram) となすので、メッカ市外、十哩七哩將た五哩にして。數十基の小かなる樓郭は周り建てられてある。是等の樓郭は外敵を防ぐ堡塞の用をなすものでなくして、市の附近に群れ飛ぶ山鳩の棲家に當てられたものである。由來、回教徒は山鳩を以て神聖なる鳥とする。そはマホメッドがメッカを逃れてメデナに走らんとしてトール山中の岩窟に隠れた時、山鳩が來つて卵をその入口に置き、僅かにコレイシユ家の追手が發見する危急を遁れしめたこと云ふ傳説に由るもので、山鳩は實に教祖危難の救助者として

崇められ、メッカに於て保護鳥と定められたる以外、回教徒はこれを射ることを憚り、少しく富有なる回教徒は其の自宅の一隅に必ず山鳩の來り棲む小宇を設らへて置くのである。

マホメッドは其のコーランに記して「メッカに巡禮せずして死したる者はユダヤ教徒基督教徒の死と等し。」と宣言せるが如く、回教徒の男兒は其の生涯に是非一度はメッカ巡禮を修行せねばならないのである。(女子の巡禮は任意と謂はんより寧ろ憚られてゐるので、殊に未婚の女子の巡禮は拒否せられてゐる。)

巡禮は回曆第十二月に修行されるべきもので、各地の回教徒はそれに先つてメッカに參集するアフリカ、トルコ、シリヤ、メソポタミヤ、ペルシヤ、中央亞細亞、カザン、コーカサスの回教徒は主に陸路に由り、シリヤより鐵路直にヘザツの地を南下してメッカに詣り、インド、南洋諸島の回教徒は海路してメッカの海港ジツダに上陸し、鐵路メッカに入る。巡禮のメッカ郊外に集まるや、ゴスルの清淨法に齋戒沐浴して巡禮衣 (Ihram) を纏ふ。巡禮衣は二枚の大巾毛織布であつて、その一つを腰に纏ひ一つを肩から被ぶる。足には草履を穿つて頭には何物をも纏はず被らず、靜肅に列をなして聖市メッカに繰り込むのである。身にこの巡禮衣を纏ふ、其の人既に俗にあらずして身神共に清淨無垢である。その巡禮の修行を續くる間、彼等は殺生禁斷の誠律を嚴